

茨城県教育財團文化財調査報告第325集

上境旭台貝塚

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII

上境旭台貝塚

平成21年3月

独立行政法人 都市再生機構茨城地域支社
財團法人 茨城県教育財團

茨城県教育財団文化財調査報告第325集

かみ さかい あさひ だい
上境旭台貝塚

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII

平成21年3月

独立行政法人 都市再生機構茨城地域支社
財團法人 茨城県教育財團

序

茨城県は、つくば市を日本における科学技術の研究開発の中核として、さらに国際交流の拠点としてふさわしい街づくりを進めています。この新しい街づくりの一環として、つくば市と独立行政法人都市再生機構茨城地域支社は、市と首都圏を直結する「つくばエクスプレス」の整備とともに、その沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を計画的に推進しています。

しかしながら、この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である上境旭台貝塚が所在することから、これを記録保存の方法により保護する必要があるため、当財団が独立行政法人都市再生機構から同貝塚の埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成19年4月から平成20年1月にかけてこれを実施しました。また、平成8年度から平成18年度にかけては、同社から開発区域内における埋蔵文化財発掘事業の委託を受け、中根中谷津遺跡、東岡中原遺跡、金田西遺跡、金田西坪B遺跡、九重東岡廃寺、上野陣場遺跡、上野古屋敷遺跡の調査を実施し、その成果は、当財団の『文化財調査報告』第139・155・159・170・182・195・209・251・285・307集として既に刊行したところです。

本書は、第307集に続き、平成19年度における上境旭台貝塚の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもちろんのこと、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります独立行政法人都市再生機構茨城地域支社から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成21年3月

財團法人 茨城県教育財團

理事長 稲葉節生

例　　言

1 本書は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成19年4月から平成20年1月まで発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字栄439番地の1ほかに所在する上境旭台貝塚の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調　　査　　平成19年4月2日～5月31日　9月3日～10月18日　平成19年11月28日～平成20年1月31日

整　　理　　平成20年2月1日～6月30日

3 発掘調査は、調査課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　三谷　正　平成19年4月2日～平成20年1月31日

首席調査員　白田正子　平成19年4月2日～5月31日

主任調査員　柴山正広　平成20年1月1日～1月31日

主任調査員　田原康司　平成19年4月2日～5月31日

主任調査員　照山大作　平成19年4月2日～10月18日　平成20年1月1日～1月31日

主任調査員　小野政美　平成20年1月1日～1月31日

主任調査員　小室弘毅　平成19年4月2日～4月30日

主任調査員　小川貴行　平成19年10月1日～平成20年1月31日

主任調査員　齋藤和浩　平成19年4月2日～5月31日

副主任調査員　櫻井完介　平成19年4月2日～5月31日　9月3日～9月30日

　　　　　　　　平成19年11月28日～12月31日

調　　査　　員　越川欣和　平成19年4月2日～平成20年1月31日

調　　査　　員　中村博子　平成20年1月1日～1月31日

調　　査　　員　作山智彦　平成20年1月1日～1月31日

調　　査　　員　川井伸也　平成19年4月2日～5月31日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、以下の者が担当した。

主任調査員　柴山正広　第5章第2節2

主任調査員　小野政美　例言・凡例・抄録、第1章、第3章第1・2節

主任調査員　小川貴行　第2章、第5章第2節1

調　　査　　員　越川欣和　第3章第3節、第4章、第5章第1節、第6章

主任調査員　須賀川正一　第5章第3・4節

5 哺乳類、骨の同定については国立歴史民俗博物館考古研究部教授の西本豊弘氏に依頼し、考察は付章として巻末に掲載した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、X = +12,160m, Y = +26,280mの交点を基準点(A 1 a1)とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI—住居跡 SK—土坑 SD—溝跡 SE—井戸跡 TP—陥入穴 PG—ピット群 P—ピット

遺物 P—土器 TP—拓本記録土器 DP—土製品 Q—石器・石製品 B—骨角器 S—貝製品

土層 K—擾乱

3 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

4 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は300分の1、遺構実測図は原則として60分の1で掲載した。遺構全体図において、調査が完了した遺構については実線で示し、確認調査だけをおこなった遺構については実線のトーンを落として表現した。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。



5 遺物観察表及び遺構一覧表の表記については、次のとおりである。

(1) 計測値の()内の数値は現存値を、[]内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、m, cm, gで示した。大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に単位を表示した。

(2) 備考欄は、土器の現存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については、土器、拓本のみ掲載の土器片、土製品、石製品ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 竪穴住居跡の「主軸」は炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例 N-10°-E)。

目 次

| | |
|---------------|-----|
| 序 | |
| 例言 | |
| 凡例 | |
| 目次 | |
| 第1章 調査経緯 | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査経過 | 2 |
| 第2章 位置と環境 | 3 |
| 第1節 地理的環境 | 3 |
| 第2節 歴史的環境 | 3 |
| 第3章 調査の成果 | 8 |
| 第1節 遺跡の概要 | 8 |
| 第2節 基本層序 | 8 |
| 第3節 繩文土器の分類 | 10 |
| 第4章 A区の調査 | 11 |
| 第1節 調査の概要 | 11 |
| 第2節 調査区の状況と遺物 | 11 |
| 1 トレンチの状況 | 11 |
| 2 遺物 | 15 |
| 第3節 A区貝塚の様相 | 30 |
| 第5章 B・C・D区の調査 | 31 |
| 第1節 B区の調査と遺物 | 31 |
| 1 トレンチの状況 | 31 |
| 2 遺物 | 41 |
| 第2節 C区の遺構と遺物 | 50 |
| 1 繩文時代の遺構と遺物 | 50 |
| (1) 壓穴住居跡 | 50 |
| (2) 陥し穴 | 57 |
| (3) 土坑 | 58 |
| (4) 遺構外出土遺物 | 76 |
| 2 その他の遺構と遺物 | 80 |
| (1) 燃土遺構 | 80 |
| (2) 井戸跡 | 81 |
| (3) 潟跡 | 81 |
| (4) 土坑 | 82 |
| (5) ピット群 | 87 |
| 第3節 D区の調査と遺物 | 88 |
| 1 遺構の確認状況 | 88 |
| 2 遺物 | 88 |
| 第4節 特殊遺物 | 90 |
| 第6章まとめ | 97 |
| 付 章 旭台貝塚の動物遺体 | 101 |
| 写真図版 | |
| 抄録 | |
| 付図 | |

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

つくば市は、世界に開かれた国際交流の中心、世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として、21世紀の新しい街づくりを進めていく。その一環として取り組んでいるのが、西暦2005年8月開業の「つくばエクスプレス」の建設とそれに伴う沿線の開発である。中根・金田台地区については、住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に、平成16年7月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に名称を変更）を事業主体として、土地区画整理事業を進めている。

平成6年11月18日、住宅・都市整備公団つくば開発局長から茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は、平成7年度に現地踏査を行い、上境旭台貝塚については平成12年1月18・19日、平成19年3月1・2日に試掘調査をそれぞれ実施し、遺跡の所在を確認した。平成12年2月15日、及び平成19年3月23日に茨城県教育委員会教育長から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、事業地内に上境旭台貝塚が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成19年1月11日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘についての通知が提出された。茨城県教育委員会教育長は、計画変更による現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成19年1月31日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成19年2月23日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から、茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。平成19年2月27日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、上境旭台貝塚について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財團法人茨城県教育財團を紹介した。

財團法人茨城県教育財團は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成19年4月2日から平成20年1月31日まで上境旭台貝塚の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

上境旭台貝塚の調査は、平成19年4月2日から5月31日まで、平成19年9月3日から10月18日まで、平成19年11月28日から平成20年1月31日までの合計約6か月間にわたって実施した。

なお、発掘調査事業の委託期間中の6月に、中根・金田台特定土地区画整理事業における開発計画の変更がなされたため、A区の調査については、調査範囲と方法を限定して行った。

以下、その概要を表で記載する。

| 工程 | 期間 | 平成 19年 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 平成 20年 1月 | 2月 | 3月 |
|--------------------|----|-----------------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----------------|----|----|
| 調査準備 表土構造 確認 | | | | | | | | ■ | | | | | |
| 遺構調査 | | ■ | | | | | ■ | | | ■ | | | |
| 遺物洗浄 注写 整理 | | ■ | | | | | ■ | | | ■ | | | |
| 補足調査 撤収 | | | | | | | | | | | ■ | | |

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

上境旭台貝塚は、茨城県つくば市大字栄439番地の1ほかに所在している。昭和62年11月の4町村合併（桜村、谷田部町、大穂町、豊里町）によるつくば市誕生（その後昭和63年1月に筑波町、平成14年11月に茎崎町が編入）までは、新治郡桜村に属していた。

つくば市は、茨城県の南西部に位置しており、市の東方約5kmに霞ヶ浦がある。市域の多くは標高25～26mのほぼ平坦な台地上にあり、この台地は筑波・稲敷台地と呼ばれている。台地の両端には、桜川、小貝川が流れ、標高約5mほどの沖積低地を形成している。両河川にはさまれた台地は、花室川、蓮沼川、東谷田川、西谷田川などの中小河川にも樹枝状に開折され、市の北東部は筑波山を中心とした筑波山塊に接している。

筑波・稲敷台地は、千葉県北部から茨城県南部に広がる常緑台地の一部であり、地質的には、新生代第四紀洪積世に形成された地層が堆積している。下層は成田層及び竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂疊層が主体をなし、その上に常緑粘土層と呼ばれる灰白色粘土層、さらに関東ローム層、腐植土層が連続して堆積している¹⁾。

当貝塚は、つくば市の東部に位置し、桜川右岸の低地から入り込む谷津に面する標高24～27mの台地上に立地している。谷津は調査区の東側にあり、道路によって遮断されたため、現在はため池となっている。調査区の北側は桜川低地に向かって、南側では谷頭近くでその小支谷に向かって、ゆるやかに傾斜している。その台地縁辺部から斜面部にかけて貝の散布が確認されている。谷津を挟んだ東約200mの対岸には、平成8・9年度に発掘を実施した中根中谷津遺跡が所在している。

縄文時代前期には、海進によって霞ヶ浦は内湾を形成しており、桜川流域にも海水が入りこんでいたと考えられる。その後の海退によって河線は変化するが、当貝塚が形成された後・晩期には、桜川下流域にも海水の入り混じる汽水域が広がっていたと想定される。

当貝塚とその周辺の土地利用の現状は、台地上の縁辺部の一部が雑木林・杉林のほか、主として畠地として利用されている。桜川によって形成された沖積低地は、主に水田として利用されている。

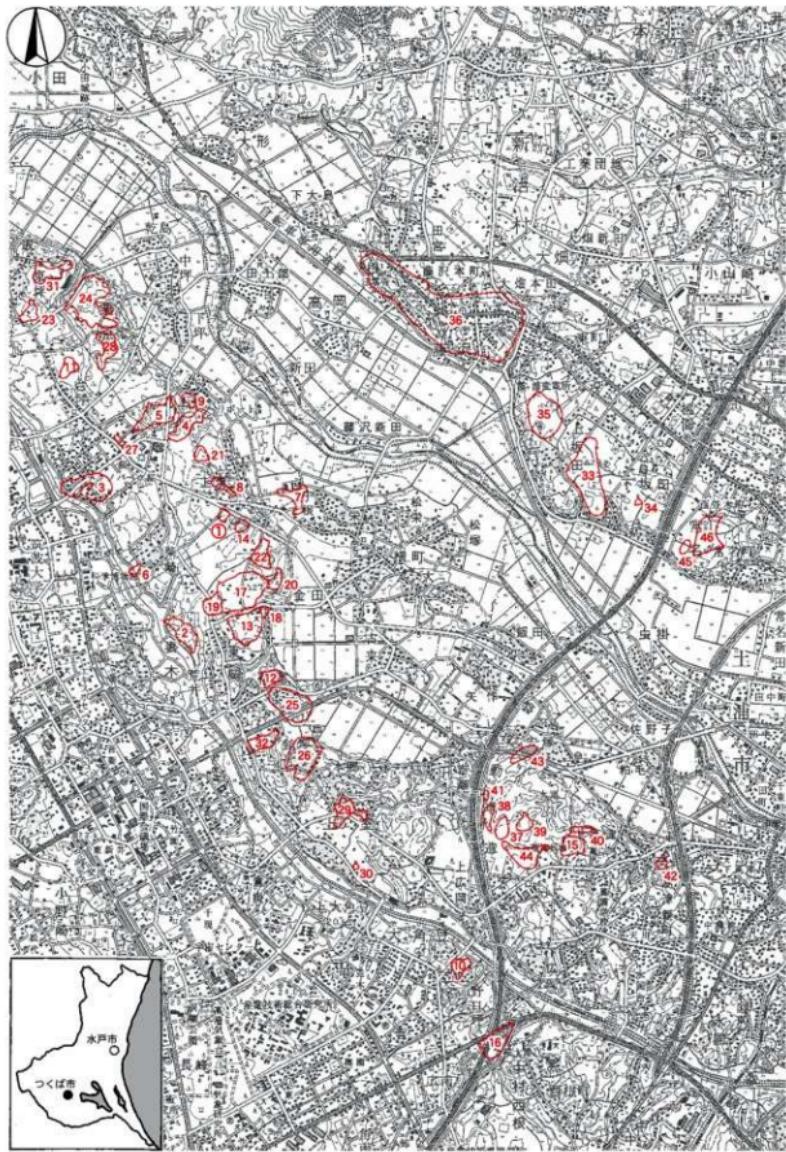
当貝塚の調査前の現況は宅地・畠地・山林であった。

第2節 歴史的環境

桜川と花室川に挟まれた台地上には、数多くの遺跡が点在している。その中で上境旭台貝塚は、縄文時代後期から晩期にかけての遺跡で、ヤマトシジミを主体とする汽水系の貝塚である。ここでは、縄文時代の遺跡を中心に、周辺の遺跡について概観する。

東岡中原遺跡（2）では、荒屋型彫刻刀形石器を含む細石刀石器群が確認されている。当該地では、すでに旧石器の時代から、人々が生活を営んでいたことがうかがえる²⁾。

縄文時代になり、遺跡の数は飛躍的に増加する。縄文時代の遺構が確認されたり、土器が表面採集できた遺跡として、柴崎遺跡（早・前期、後期）（3）、上野古屋敷遺跡（前・中期）（4）、上野陣場遺跡（前期～後期）（5）、柴崎南遺跡（中期）（6）、中根不葉抜遺跡（中期）（7）、上境滝ノ臺遺跡（中期）（8）、上野天神遺跡（中期）（9）、大角豆遺跡（中期）（10）、栗原才十郎遺跡（中期）（11）、花室遺跡（中期～後期）（12）、



第1図 上境旭台貝塚周辺遺跡位置図(国土地理院5万分の1「土浦」)

表1 上境旭台貝塚周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 時代 | | | | | 番号 | 遺跡名 | 時代 | | | | | | | |
|----|---------|----|----------|----|----|----|----|-----|----|---------|----|-------|-------|----|----|---|
| | | 縄文 | 主な時期 | 弥生 | 古墳 | 奈良 | 中世 | 近世 | 縄文 | 主な時期 | 弥生 | 古墳 | 奈良 | 中世 | 近世 | |
| ① | 上境旭台貝塚 | ○ | 後期～後期 | ○ | | | | | 24 | 栗原中台遺跡 | ○ | — | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 2 | 東岡中原遺跡 | ○ | 前・中期 | | ○ | ○ | ○ | | 25 | 花室城跡 | ○ | — | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 3 | 柴崎遺跡 | ○ | 早期～中期・後期 | | ○ | ○ | ○ | | 26 | 上ノ室城跡 | ○ | — | | ○ | ○ | ○ |
| 4 | 上野古屋敷遺跡 | ○ | 前期～中期 | | ○ | ○ | ○ | ○ | 27 | 上野中塚遺跡 | ○ | — | | ○ | | |
| 5 | 上野陣場遺跡 | ○ | 前期～後期 | | ○ | ○ | ○ | | 28 | 栗原五竜遺跡 | ○ | — | | ○ | ○ | ○ |
| 6 | 柴崎南遺跡 | ○ | 中期 | | ○ | ○ | ○ | ○ | 29 | 上ノ室野中遺跡 | ○ | — | | ○ | ○ | |
| 7 | 中根不葉抜遺跡 | ○ | 中期 | | | ○ | ○ | | 30 | 上ノ室中畠遺跡 | ○ | — | | | ○ | ○ |
| 8 | 上境瀧ノ臺遺跡 | ○ | 中期 | ○ | | | | | 31 | 玉取遺跡 | ○ | — | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 9 | 上野天神遺跡 | ○ | 中期 | | | | | | 32 | 花室儀量台遺跡 | ○ | — | | ○ | ○ | ○ |
| 10 | 大角豆遺跡 | ○ | 中期 | | ○ | | | | 33 | 中台貝塚 | ○ | 中期～後期 | | | | |
| 11 | 栗原才十郎遺跡 | ○ | 中期 | | | | | | 34 | 馬場先貝塚 | ○ | 中期～後期 | ○ | | | |
| 12 | 花室遺跡 | ○ | 中期～後期 | | ○ | | | | 35 | 原の門遺跡 | ○ | 中期 | | ○ | | |
| 13 | 金田西坪B遺跡 | ○ | 中期～後期 | | ○ | ○ | | | 36 | 岡の宮遺跡 | ○ | — | ○ | ○ | | |
| 14 | 中根中谷津遺跡 | ○ | 後期～後期 | | ○ | | | | 37 | 糞屋久保C遺跡 | ○ | 前期 | ○ | ○ | | |
| 15 | 上高津貝塚 | ○ | 中期～後期 | | ○ | ○ | | | 38 | 糞屋久保B遺跡 | ○ | — | ○ | | | |
| 16 | 下広岡遺跡 | ○ | 中期 | | ○ | | | | 39 | グミヌキ遺跡 | ○ | — | ○ | ○ | | |
| 17 | 金田西遺跡 | ○ | 中期 | | ○ | ○ | | | 40 | 蛭田遺跡 | ○ | 前期～中期 | ○ | ○ | | |
| 18 | 金田西坪A遺跡 | ○ | 中期～後期 | | ○ | | | | 41 | 馬場先遺跡 | ○ | — | ○ | ○ | | |
| 19 | 九重東岡廐寺 | | | | ○ | ○ | ○ | | 42 | 寄居遺跡 | ○ | 前期 | ○ | ○ | ○ | |
| 20 | 金田城跡 | | | | | ○ | | | 43 | 穴塚遺跡 | ○ | 前期～後期 | ○ | | | |
| 21 | 上境作ノ内遺跡 | ○ | — | ○ | ○ | | | | 44 | 栗崎遺跡 | ○ | 中期 | ○ | | | |
| 22 | 横町庚申塚遺跡 | | | ○ | ○ | ○ | | | 45 | 羽黒後遺跡 | ○ | 前期～中期 | | | | |
| 23 | 玉取向山遺跡 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | 46 | 北西原遺跡 | ○ | ○ | 中期～後期 | ○ | | |

*縄文時代の「主な時期」は遺構が確認されている時期である。細分できないものは縄文全般とし「—」で示した。

さん せん じ てき 金田西坪B遺跡（中期～後期）〈13〉、中根中谷津遺跡（後期～晚期）〈14〉などがあげられる³¹。下流域には、国指定史跡の上高津貝塚〈15〉があり、後期から晚期にかけて形成された大規模な貝塚として知られている。貝塚は4地点からなり、いずれの地点の貝層もヤマトシジミが主体である。捕獲魚類もスズキ・クロダイなどの汽水域に生息する魚が中心であるが、注目すべきは、鹹水種のマダイが成魚に限って捕獲されている点である。平成2年度のA地点貝塚の調査でも、水洗選別で小型のマダイは全く確認できず、これらの資料から、他の集落との交流が想定されている³²。

じとうりゆう 当財団が調査した下広岡遺跡〈16〉は、堅穴住居跡8軒が確認された中期の集落跡である。また袋状土坑も多く検出され、この中からパン状炭化物や木の実の炭化物が出土しており、当時の食文化を知る上で貴重な資料となっている³³。近年の調査では、上野陣場遺跡で前期から中期にかけての堅穴住居跡8軒、上野古屋敷遺跡でも同時期の堅穴住居跡8軒が確認されている³⁴。本跡と谷津をはさんで対岸には、中根中谷津遺跡が位置し、後期から晚期の堅穴住居跡10軒、土坑115基、地点貝塚4か所が確認され、堅穴住居跡は堀之内式期を中心である。出土した縄文土器の大半は堀之内I式土器であり、一部に北陸地方や東北地方の影響をうけた土器も出土している³⁵。

当貝塚の紹介は、中村盛吉、藤田清の両氏が最初である。それ以後は、地元の桜村立栄小学校郷土クラブ、桜村教育委員会による調査が行われ、平成12年度の常磐新線沿線開発の区画整理事業による試掘調査では、堅穴住居跡1軒、土坑5基、溝3条、遺物包含層4か所、地点貝塚4か所が確認されている³⁶。

縄文時代以降、上野陣場遺跡では10世紀後半まで、隣接する上野古屋敷遺跡でも16世紀代まで、断続的ながら集落跡が確認されており、当該地では人々の営みが続いていたことがうかがえる。なお、奈良・平安時代において、北の筑波郡との境にある河内郡菅田郷に属しており、国指定史跡である金田西遺跡〈17〉、金田西坪A遺跡〈18〉、金田西坪B遺跡、九重東閼廬寺〈19〉など、河内郡跡と関連建物群と推定されている³⁷。

また東岡中原遺跡、柴崎遺跡、上野陣場遺跡などもほぼ同時期の集落として周辺に位置し、河内郡との関連が考えられている。当該地は、鎌倉時代から戦国時代にかけて小田氏の支配下となり、台地上には金田城跡〈20〉など小田氏関連の中小城館が築かれたが、小田氏の衰退に伴い支配下の土豪層の多くが帰農し、集落の廃絶と移動があったと考えられている³⁸。

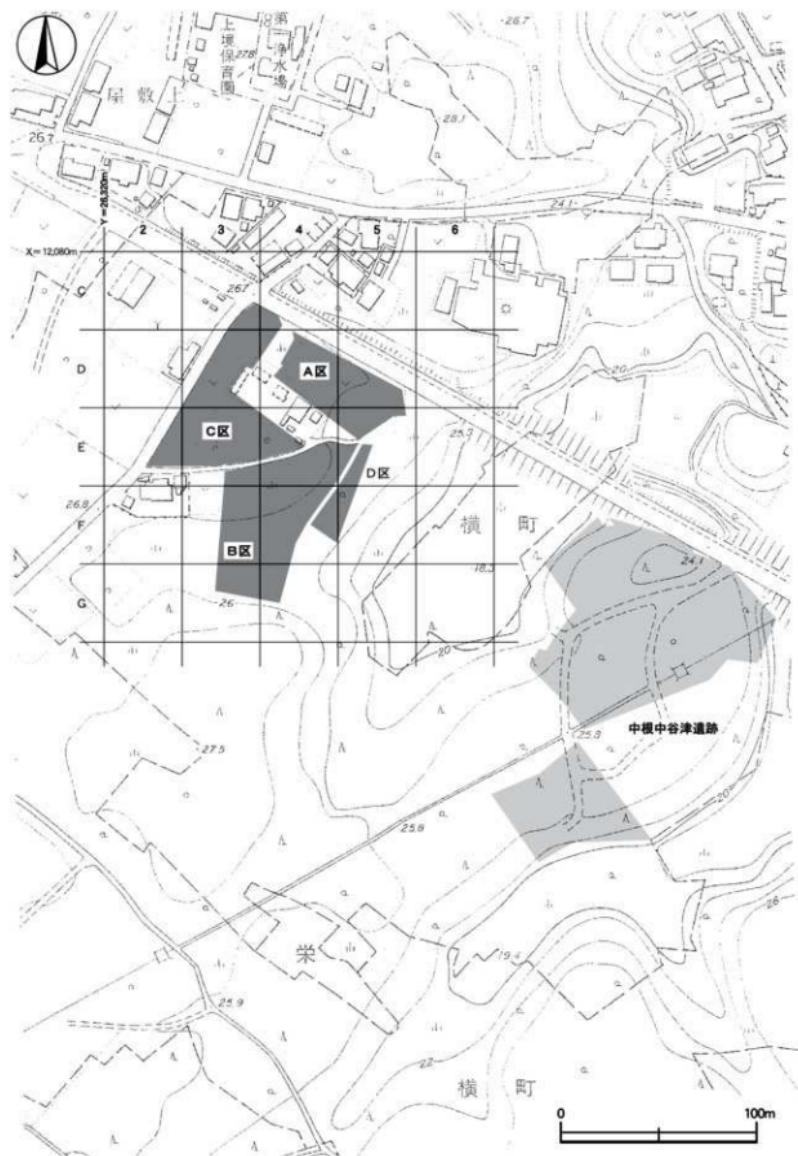
※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註

- 1) 大山年次監修『茨城県 地学のガイド』コロナ社 1977年8月
- 2) a 佐島一也「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書II 中原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第155集 2000年3月
- 3) b 佐島一也・宮田和一「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書III 中原遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第156集 2000年3月
- 4) c 両田千秋・佐々木千鶴子・中根千鶴子・中根和宏「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IV 中原遺跡3」『茨城県教育財团文化財調査報告書』第170集 2001年3月
- 5) d 駒澤悦郎「東岡中原遺跡4 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VII』『茨城県教育財团文化財調査報告書』第254集 2005年3月
- 6) 茨城県つくば市教育委員会『つくば市道路分布調査報告書—谷田部地区・桜地区』2001年3月
- 7) a 佐藤孝雄「大内千年編『国定史跡上高津貝塚A地点ー史跡整備事業に伴う発掘調査報告書』」土浦市教育委員会 1994年3月
- 8) b 塩谷修編「国指定史跡上高津貝塚B地点ー史跡整備事業に伴う発掘調査報告書ー」土浦市教育委員会 2000年3月
- 9) c 佐藤孝雄・鈴木洋輔・鈴木洋輔「上高津貝塚C地点ー史跡整備事業に伴う発掘調査報告書」2006年3月
- 10) d 高橋信和・加藤雅美・小川邦男「常磐自動車道関係埋蔵文化財整備調査報告書II」『茨城県教育財团文化財調査報告X』1981年3月
- 11) e 三谷正・大塚雅昭「上野陣場遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財团文化財調査報告』第182集 2002年3月
- 12) f 三谷正・大塚雅昭・桜村裕「上野古屋敷遺跡I 中根・金田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IX」『茨城県教育財团文化財調査報告』第285集 2007年3月
- 13) g 川上千鶴子「長谷川聰・大塚雅昭『上野陣場遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書I』『茨城県教育財團文化財調査報告』第130集 1996年3月
- 14) h 桜村史編「桜村教育委員会『桜村桜』桜村教育委員会 1982年3月
- 15) i b註3) に同じ
- 16) j 白田正子「金田西遺跡 金田西坪B遺跡 九重東閼廬寺 中根・金田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VI』『茨城県教育財团文化財調査報告』第209集 2003年3月
- 17) k 註6 b) に同じ

参考文献

- 1) 茨城県教育文化振興課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 茨城県立博物館・茨城県地域分布調査報告書・茨城県立博物館・茨城県教育委員会・茨城考古学研究室 2001年3月
- 3) 茨城県史編纂委員会企画監修『茨城県資料考古資料編』先上編・縄文時代 1979年3月



第2図 上境旭台貝塚グリッド設定図(独立行政法人都市再生機構茨城地域支社 中根・金田台地現況調整土地図2500分の1)

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

上境旭台貝塚は、桜川右岸の低地から入り込む谷津の北岸で、標高24～27mの台地上に立地している。当遺跡の範囲は南北150m、東西200mであり、調査面積は7,800m²である。調査前の現況は畑地、山林、宅地であり、地表面の観察により調査区内の台地縁辺に沿って3か所に貝殻の散布が認められていた。

当遺跡は、今回の調査の過程で便宜上A～D区に分けている。これは、道路等の状況と調査順に従って呼称したものである。それぞれの区の調査面積は、A区が1,777m²、B・C・D区が6,023m²である。なお平成19年度において調査が終了した地区は、A区とC区の一部で、面積は2,878m²である。B・D区とC区の一部には、未調査部分が残る。

A区については、茨城県教育委員会が平成11・18年度に試掘調査を実施した部分に、第1～3号トレンチを設定し、土層堆積状況の観察と遺構分布状況の把握を行った。その調査過程で、貝塚1か所、竪穴住居跡2軒を確認したが、事業地内における開発計画の変更が行われたため、遺構の掘り込みは実施していない。遺構の詳細については不明であり、出土遺物も遺構確認時に一括で取り上げているため、土器については時期・部位等に従って分類を行い、実測図と解説を掲載する。

B・C・D区については表土除去の後、遺構確認作業及びトレンチを設定しての調査を行い、B・C・D区全体で、竪穴住居跡13軒、地点貝塚33か所（住居内地点貝塚、貝集中地点を含む）、土坑774基、溝跡4条、焼土遺構1か所、ピット群3か所が確認されている。そのうち調査が終了しているのは、C区の一部だけで、竪穴住居跡3軒（縄文時代）、陥れ穴1基、土坑93基（縄文時代15基、時期不明78基）、井戸跡1基、溝跡3条、焼土遺構1か所、ピット群2か所である。

遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に105箱出土している。主な遺物は縄文土器（深鉢・浅鉢・注口土器・台付鉢・皿形土器・異形台付土器・ミニチュア土器）、土製品（土偶・耳飾り・土版・土製円盤・海獣形土製品）、石器（石鏃・石錐・磨製石斧・打製石斧・石匙・敲石・凹石・磨石）、石製品（石棒・石剣）、骨角器（ヤス）、貝製品（貝輪）などである。

第2節 基本層序

C区は台地上、B区は台地縁辺から谷部にかけての調査であり、比高差が2m程あるため、C区西部のD3j8区にテストピット1、B区東部のF4g5区にテストピット2を設定し、基本土層（第3図）の観察を行つた。テストピット1の地表面の標高は27.0mで、表土から深さ2.8mまで掘り下げた。テストピット2は、標高の低い谷部に設定しており、地表面の標高は25.0mで表土から深さ1.9mまで掘り下げた。テストピット2では、テストピット1で確認された第4～12層は認められず、耕作土を除去するとすぐに第14層以下の常総粘土層が確認されている。

土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから19層に細分される。観察結果は、以下の通りである。

第1層は、耕作土層で、黒褐色で粘性・締まりとも弱く、層厚は23～40cmである。

第2層は、黒色でロームブロックを中量含み、粘性・締まりは普通で、層厚は10~32cmである。

第3層は黒褐色を呈するソフトローム層への漸移層で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含み、層厚は7~24cmである。

第4層は褐色を呈するソフトローム層で、粘性・締まりは普通で、層厚は18~42cmである。

第5層は暗褐色を呈するハードローム層で、黒色粒子を微量含んでおり第2黑色帯と考えられる。締まりが強く、層厚は15~35cmである。

第6層は褐色を呈するハードローム層で、締まりが強く、層厚は10~16cmである。

第7層は褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりは普通で、層厚は15~40cmである。

第8層は褐色を呈し、上層に細礫を含むハードローム層で、締まりは強い。層厚は16~40cmである。

第9層は褐色を呈する粘土層への漸移層で、粘性・締まりとともに強く、層厚は10~25cmである。

第10層は褐色を呈する粘土層への漸移層で、黒色粒子を微量含み、粘性・締まりとともに強く、層厚は20~32cmである。

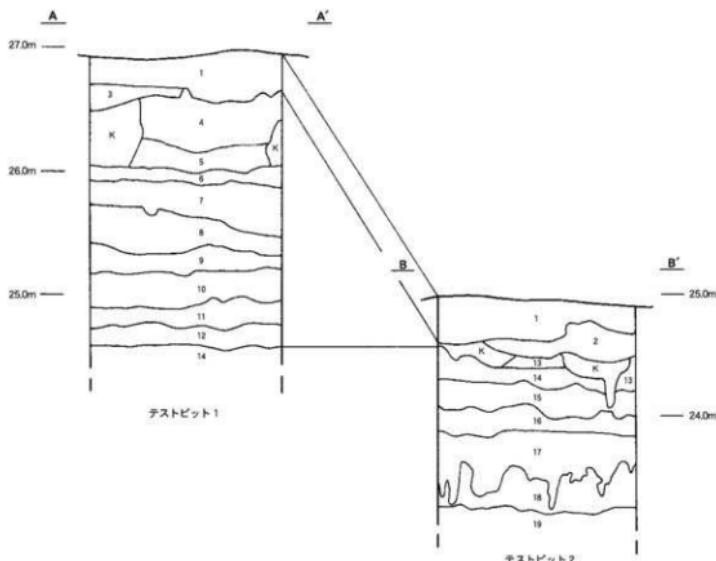
第11層は褐色を呈する粘土層への漸移層で、軽石粒子を微量含み、粘性・締まりとともに強く、層厚は5~26cmである。

第12層は黄橙色を呈する粘性の強い層で、層厚は16~20cmである。

第13層は黒褐色を呈する耕作土層で粘性は弱く、締まりは普通である。層厚は10cmである。

第14層は灰白色の粘土層である。ここから常総粘土層になると考えられる。

第15層は灰白色を呈する粘土層であり、軽石粒子を多量に含み、層厚は14~26cmである。



第3図 基本土層図

第16層は浅黄色を呈する下層への漸移層であり、粘性・縮まりともに弱く、層厚は12～21cmである。

第17層は浅黄色を呈する砂層であり、ガラス質粒子を微量含み、粘性は弱く、縮まりは強い。層厚は28～48cmである。

第18層はにぶい黄色を呈する砂層であり、ガラス質粒子を微量含み、下層には黒色砂粒を含む。粘性は弱く、縮まりは強い。層厚は8～35cmである。

第19層はにぶい黄色を呈する砂層であり、ガラス質粒子を微量含む。

遺構は、第4層上面で確認されている。

第3節 繩文土器の分類

次のような基準を用いて土器の分類を行った。主たる分類は深鉢形土器（以下深鉢）を用いている。

第Ⅰ群 前期の土器群

A類 黒浜式

第Ⅱ群 中期の土器群

A類 阿玉台式

B類 加曾利E式

第Ⅲ群 後期の土器群

A類 称名寺式

B類 堀之内式

C類 加曾利B式

C 1類 加曾利B 1式

C 2類 加曾利B 2式

C 3類 加曾利B 3式

C 4類 加曾利B式の粗製土器

D類 曾谷式

E類 安行1・2式

E 1類 安行1式

E 2類 安行2式

E 3類 安行1・2式の粗製土器

第Ⅳ群 晩期の土器群

A類 安行3 a～3 d式

A 1類 安行3 a式

A 2類 安行3 b式

A 3類 安行3 c式

A 4類 安行3 d式

A 5類 安行3 a～3 d式の粗製土器

B類 大洞式

B 1類 大洞B式

B 2類 大洞B C式

C類 前浦式

第Ⅴ群 その他の土器群

第4章 A区の調査

第1節 調査の概要

A区は標高25～26mの台地上に位置し、北側は桜川低地へ、東側は谷津へ向かって傾斜している。調査範囲は南北17～22m、東西40～65mの面積1,777m²である。

平成11・18年度に茨城県教育委員会は、貝塚の分布と遺構の有無を確認するため、調査区内に3か所のトレンチを設定して試掘調査を実施している。今回の調査では、貝塚の分層発掘を実施するため、その試掘トレンチを利用して土層の堆積状況の確認と遺物の取り上げを行った。なお、A区の調査は、事業地内における開発計画の変更が行われたため、トレンチの部分にとどめた。

今回の調査によって地点貝塚、堅穴住居跡、土坑などの遺構が確認されたが、その範囲や時期など詳細な情報については明確ではなく、ここでは各トレンチの土層や貝層の堆積状況と遺構の確認状況、出土した遺物について記述する。

遺物は、遺物コンテナ(60×40×20cm)に18箱出土している。主な遺物は、縄文土器(深鉢・浅鉢・鉢・注口土器・異形台付土器・壺形土器)、土製品(土偶・海獣形土製品・耳飾り・土器片錐・土製円盤)、石器(石匙・敲石・磨石・凹石)、動物遺存体(獣骨・鳥骨・魚骨・貝)などである。

第2節 調査区の状況と遺物

1 トレンチの状況

第1号トレンチ(第4図)

A区東部E 415～E 5 c2区に、幅1.5m、長さ18.5mのトレンチを南北方向に設定し、深さ50～140cmまで掘り込んだ。堆積する層は10層からなり、南から北に向かって傾斜して堆積している。

第1～4層は厚さ5～30cmでローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒色土、黒褐色土で、傾斜に沿って土砂が堆積した自然堆積層である。土器は縄文時代後期後葉から晩期前葉の土器片が出土しているが、小破片が多い。土層堆積状況と遺物出土状況から二次的な堆積によって形成された土層と考えられる。

第5・6層は厚さ20～30cmでローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、黒色土で混貝土層である。混貝率は低く、破碎率が高いこと及び堆積状況から斜面に形成された貝層の最上層と考えられる。遺物は全体に出土するが、特に南部に集中する傾向がみられる。土器は縄文時代後期後半の加曾利B式土器から安行1・2式土器までが確認され、加曾利B式土器が中心である。動物遺存体は貝・獣骨が確認されている。貝種はヤマトシジミが9割以上を占め、他にハマグリ、アカニシなどが極めて少量検出されている。動物種はイノシシ、シカが主体であり、上層は少なく、下層からは多量に検出され、最下層は遺存状態の良好なものが多い。第7・8層は厚さ4～34cmで、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、黒色土で混土貝層である。混貝率は高く、貝の破碎率は低い堆積状況を示している。土器は縄文時代後期の堀之内2式土器から安行1・2式土器までの土器が確認され、特に加曾利B式土器が多い。

第9・10層は厚さ10~42cmでロームブロック少量及び水分を多量に含んだ黒色土、黒褐色土であり、低湿地の土壤に類似している。遺物包含層であるが遺物の出土量は少量で、土器は縄文時代後期安行1・2式土器から晩期前浦式土器まで確認でき、中でも安行1・2式土器が多い。

第2号トレンチ（第4図）

A区中央部E 4 h2~E 4 a9区に、幅1.5m、長さ16.3mのトレンチを南北方向に設定し、深さ65~175cmまで掘り下げる。堆積する層は26層からなり、南から北に向かって傾斜して堆積している。第2・4・5・6・9・10層は前述した第1号トレンチと共通の土層である。

第11~14層は厚さ10~20cmで、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒色土、黒褐色土で混貝土層である。混貝率は低く、貝の破碎率は高いこと及び堆積状況から斜面に形成された貝層の最上層と考えられる。土器は縄文時代後期の加曾利B式土器から安行1式土器が確認されている。

第15~20層は厚さ10~20cmで、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む極暗褐色土、黒褐色土、褐色土、黒色土で混貝土層である。第11~14層に比べると混貝率が低く、破碎率も高い。貝を含む土がブロック状に重なって堆積している状況から人為堆積と考えられる。土器は縄文時代後期の堀之内2式土器から加曾利B式土器までが確認されており、加曾利B式土器が多い。またイノシシやシカなど獸骨類は、遺存状態の良好なものが多く出土している。

第21~23層は厚さ10~25cmで、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土で、混土貝層である。混貝率は高く、破碎率も低い堆積状況を示している。土器は縄文時代後期の堀之内2式土器から加曾利B式土器まで確認され、特に加曾利B式土器が多い。

第15~23層は堅穴住居跡覆土の可能性がある。第16~20層の混貝土層を中心に、南側に第21~23層、北側に第15・21層の混土貝層が堆積している。貝層は南から北へ緩く傾斜し、ブロック状に堆積して人為堆積の状況を示し、堅穴住居廃絶後に廃棄された貝の可能性が高い。土器は縄文時代後期堀之内2式土器から加曾利B式土器が出土し、加曾利B式土器が主体である。堅穴住居跡の時期は、堆積状況と出土土器から縄文時代後期中葉と考えられる。

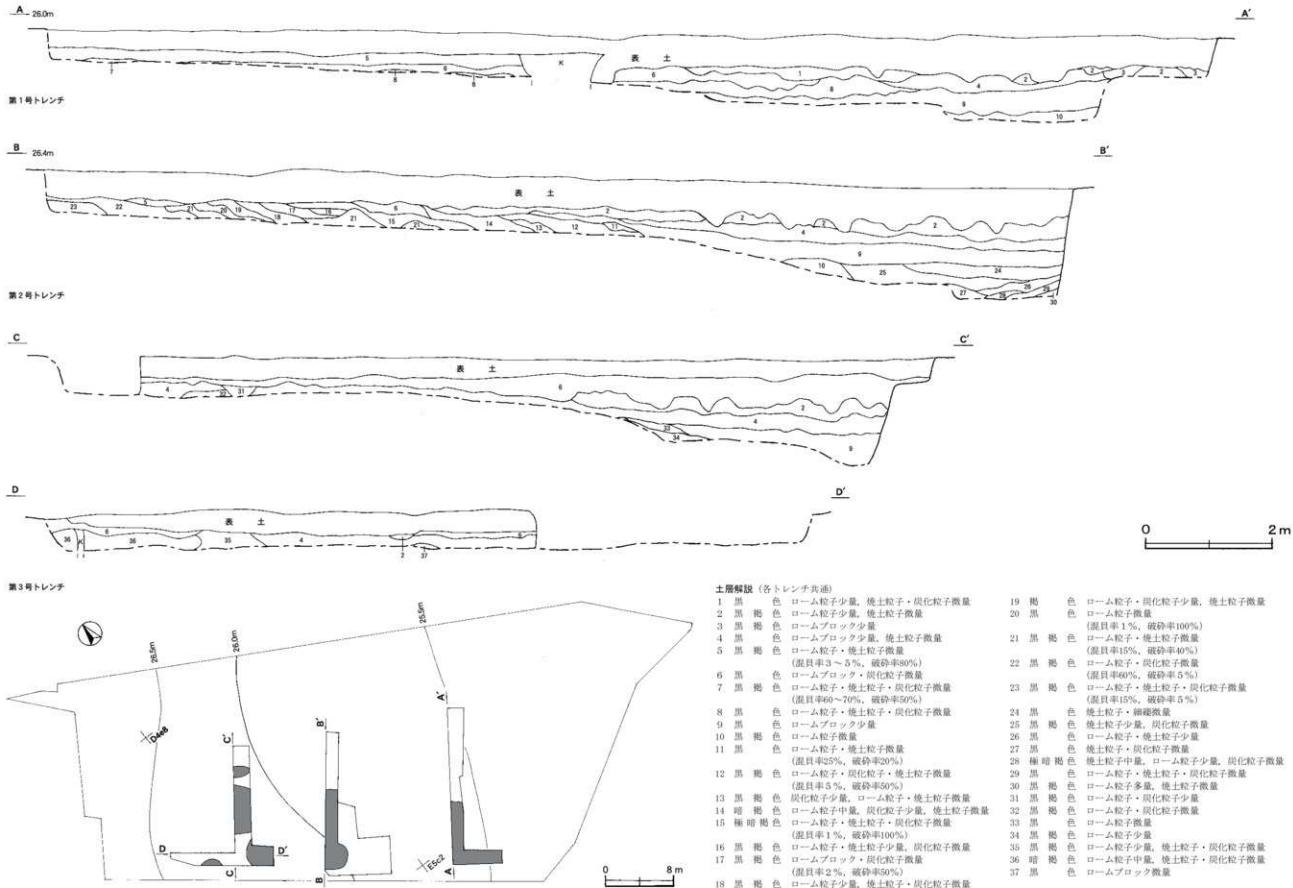
第24~30層も第10層を掘り込んだ堅穴住居跡覆土の可能性がある。土器は第27層からP 2が出土している。その他、安行1式土器から安行3a式土器が出土しており、安行1式土器が主体である。この住居跡の時期は、出土土器から縄文時代後期後葉と考えられる。

第3号トレンチ（第4図）

A区西部D 4 f9~D 4 i7区に、幅1.5m、長さ14.0mのトレンチを南北方向に設定し、深さ50~165cmまで掘り込んだ。堆積する層は11層からなり、南から北に向かって水平方向に堆積している。第2・4・6・9層は前述した第1号トレンチと共通の土層である。

第31層は第4層上面から掘り込まれた土坑覆土と考えられる。

第32~37層は厚さ2~28cmでロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、暗褐色土、黒色土の遺物包含層である。土器は縄文時代後期加曾利B式土器から安行1式土器が確認されており、加曾利B式土器が主体である。



第4図 A区第1～3号トレンチ実測図

2 遺物 (第5~17図, PL.7~9・12~14)

A区の調査では、中期から晩期の土器が出土しているが、後期から晩期の土器が主体で、前・中期の土器は数点であり、縄文時代後期中葉から晩期前葉の土器が多い。加曾利B式期から安行1・2式期は精製土器と粗製土器の重量はほぼ同じ（1.02倍）であるが、晩期安行3a～3d式期には粗製土器の出土は精製土器の5.5倍である。このことから、後期に比べて、晩期には粗製土器の製作が盛んに行われたと考えられる。

また、土製品6点（土偶1・土版1・海獣形土製品1・耳飾り2・土製円盤1）、石器・石製品20点（石匙1・磨製石斧5・磨石3・敲石1・石錐2・圓石2・輕石1・石棒4・石劍1）、剥片24点が出土している。前述したとおり、多くの遺物はすでに原位置を失っているため、各層毎の定量的な分析はできない。

本報告では、第3章第3節の縄文土器の分類に従って、各土器群について記していくことにする。また、TP番号のついている遺物の説明は、数字番号のみの表記である。土製品と石器については一覧表で記した。

A区出土土器の点数及び重量

| 時期 | 前 期 | | 中 期 | | 後 期 | | | | | | | | | |
|--------|-----|----|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|-------|----|
| | | | | | 称名寺式 | | | | 堀之内式 | | | | 加曾利B式 | |
| | 精 製 | | 粗 製 | | 精 製 | | 粗 製 | | 精 製 | | 粗 製 | | | |
| 部位 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 |
| 出土数 | | | 1 | 1 | 13 | 34 | 3 | 57 | 221 | 709 | 58 | 600 | | |
| 重量(kg) | | | 0.09 | 0.03 | 0.33 | 0.58 | 0.04 | 1.78 | 4.13 | 10.88 | 1.63 | 12.48 | | |

| 時期 | 後 期 | | | | | | | | | | | |
|--------|-----|------|-----|----|--------|------|------|------|------|-------|------------|----|
| | 曾谷式 | | | | 安行1・2式 | | | | 底部片 | 細片 | 総点数 総重量 | |
| | 精 製 | | 粗 製 | | 精 製 | | 粗 製 | | | | | |
| 部位 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 |
| 出土数 | | 1 | | | 161 | 101 | 74 | 186 | 131 | 2734 | 5076 | |
| 重量(kg) | | 0.04 | | | 3.67 | 2.01 | 1.75 | 4.09 | 5.51 | 26.56 | 75.60 | |

| 時期 | 晩 期 | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|----------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-----|------------|--|
| | 安行3a～3d式 | | | | 前浦式 | | | | 大洞式 | | 製塙土器 | 底部片 | 細片 | 総点数 総重量 | |
| | 精 製 | | 粗 製 | | 精 製 | | 粗 製 | | | | | | | | |
| 部位 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | |
| 出土数 | 76 | 83 | 333 | 544 | 16 | 13 | 81 | 58 | 713 | 87 | 8882 | 16886 | | | |
| 重量(kg) | 1.53 | 1.27 | 6.28 | 9.2 | 0.36 | 0.24 | 1.15 | 0.68 | 5.66 | 4.19 | 63.89 | 94.45 | | | |

第II群 中期の土器群

B類 加曾利E式 1は地文が単節縄文LRの縦位施文で、懸垂文がみられる。

第III群 後期の土器群

A類 称名寺式 2～5は称名寺2式である。3・5は刺突文が充填されている。2は小波状口縁、4は大きな突起をもつ口縁部である。

B類 堀之内式 6～9は堀之内1式で、数条の沈線文が施文されている。7は波頂部に円孔がある。10は堀之内2式で、地文は単節縄文LRで縦位に沈線区画が施されている。

C類 加曾利B式

C1類 加曾利B1式 11～19である。11は沈線間に縄文LRが充填施文されている。12・13には横位2条の隆起線がみられ。14・15・17・18は内面に沈線を施し、19は地文が単節縄文LRで波状文が施文されている。

C2類 加曾利B2式 P1, 20～31である。P1, 20～23は矢羽根状文系土器で、24～29は斜格子目文系

土器である。24～29は口辺部と胴部に斜格子目文を施し、30は口辺部に斜位の沈線文がみられる。31は無文である。

C 3 類 加曾利B式 32～53である。32～48には刻文帯や弧状の文様がみられる。32～40は波状口縁で、41～45は平口縁である。44～48には弧線文を施し、49・50には口縁に継の条線文が施文されている。51～53は口辺部片で、地文が単節繩文であり懸垂する2条の沈線文が施文されている。

C 4 類 加曾利B式の粗製土器 54～65・68～76である。地文には繩文あるいは撚糸文を施し、斜位あるいは弧状の沈線文を施すものが多い。54～62・65は指頭圧痕、63・64は爪形文が並ぶ紐線文系土器群である。68～76は繩文を地文とし、斜位の条線文が施文された胴部片である。

D 類 曽谷式 77・78・190は刻文帯や沈線文がみられる。

E 類 安行1・2式

E 1 類 安行1式 P 2, 80～84・86・88～91・95・96・164である。95は環状の貼付文、96には斜位の沈線文が施文されている。P 2は浅鉢である。164は繩文帯がみられる。

E 2 類 安行2式 85・98～113・115・117～126・204である。98～113・115・117～126は繩文帯に刻目をもつ貼付文がみられ、85・119～126・204は刻文帯をもつ土器である。

E 3 類 安行1・2式の粗製土器 66・67・127～150である。66・67・127～138は口縁部で、紐線文あるいは刻文帯を施す土器であり、弧状の条線文が施文されている。一部には懸垂あるいは入り組む沈線文をもつ土器もある（129・130・131）。137～145は紐線文をもたない土器で、弧状の条線文が施文されている。144は2条の懸垂文が施文され、146・150は無文である。147は撚糸文、148は繩文帯と条線文、149は継位の条線文が施されている。

第IV群 晩期の土器群

A 類 安行3a～3d式

A 1 類 安行3a式 P 3, 87・92・97・116・151～154・156～158・214である。151～154には三叉文、87・92・97・116・158・214は繩文帯が施されている。158は浅鉢と考えられる。

A 2 類 安行3b式 79・93・94・114・159～174・176～179・192である。79・93・159～166は単節繩文LR、94は単節繩文RLを地文とし、入組文や波状沈線文が施文されている。114は口唇部にB突起を貼り付け、沈線区画に単節繩文RLを充填施文している。167～173はいわゆる「姥山式」であり、細密沈線文が充填されている。192は鉢巻状の貼付文をもつ。174は弧状の鉢形土器、176・177は鉢、178・179は皿である。

A 3 類 安行3c式 180～189で、刺突文や刻目が施文されている。189は沈線文を施文する土器である。

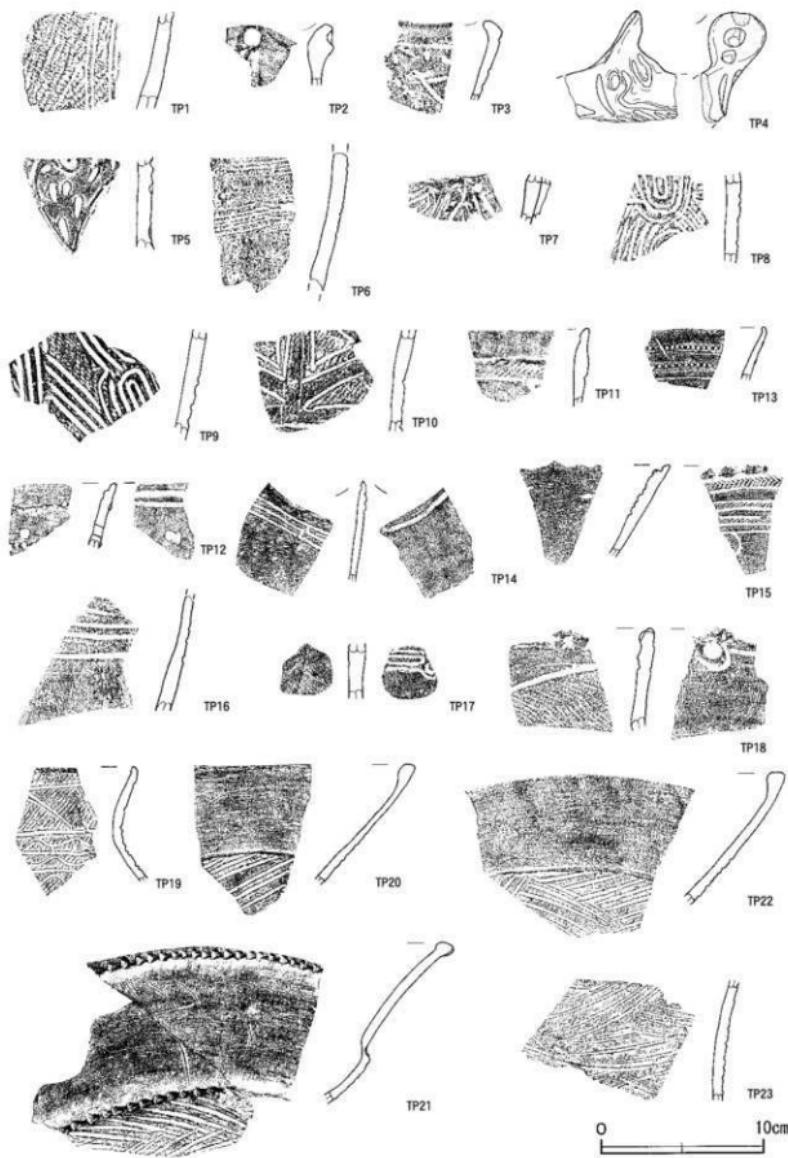
A 5 類 安行3a～3d式の粗製土器 193～200・216～221である。193～198は紐線文土器である。弧状の沈線文を地文とし、懸垂する沈線文を施文している。199・200・216～221は紐線文がみられない土器である。

B 類 大洞式 P 4・P 5, 155・175・191・201～203・205～212である。155は小波状口縁、P 5, 201～203は羊齒状文を施す土器である。175・191・205～211は雲形文、212は口縁部に繩文が施文されている。P 4は口縁部に二溝間の截痕が見られ、口唇部にB突起を貼り付けた皿で、大洞C 1式と考えられる。

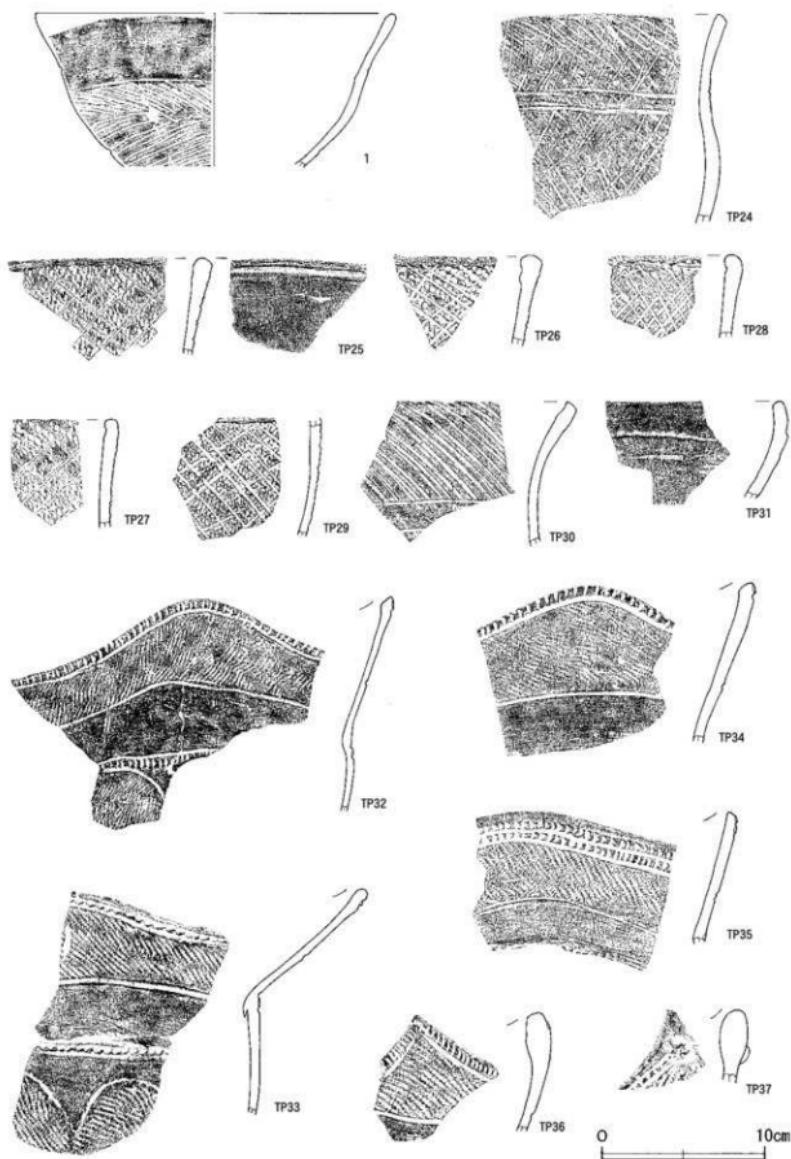
C 類 前浦式 213である。口唇部に小突起が貼付された波状口縁で、幅広の沈線文が施文されている。

第V群 その他の土器群

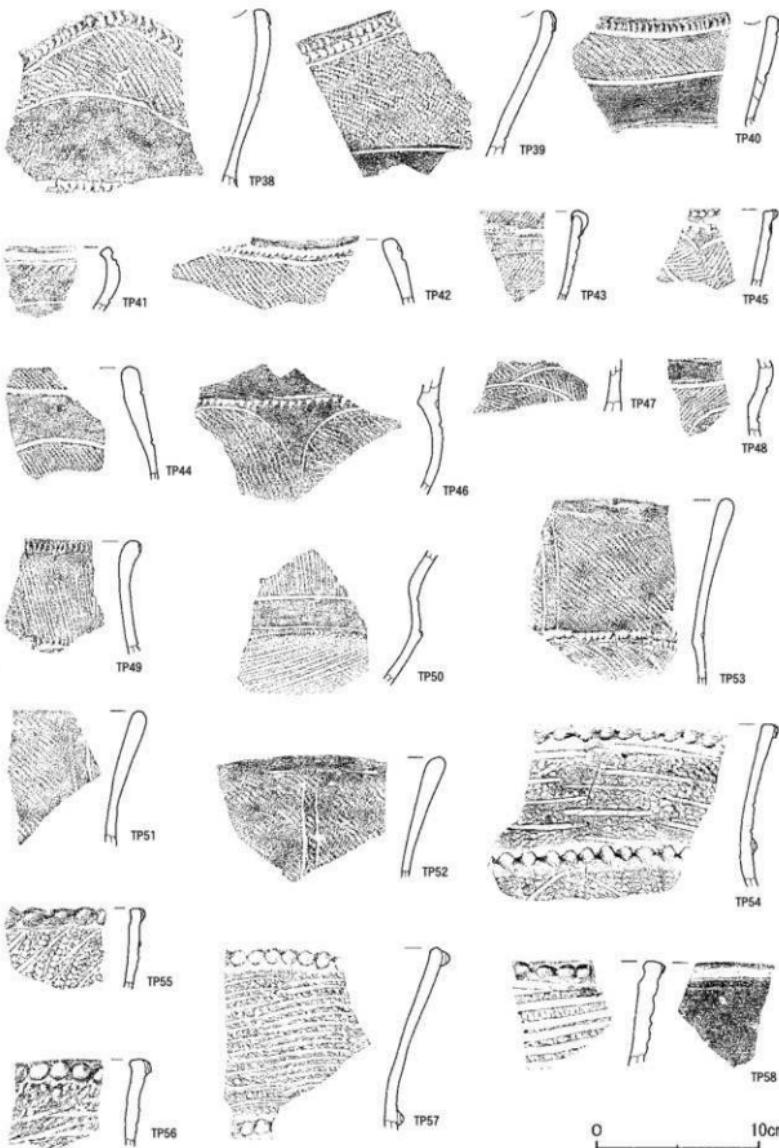
P 6・P 7・P 9, 215である。215は撚糸文が施されている。P 6は注口部片、P 7は無文のミニチュア土器である。P 9は、三方向に単節繩文が充填された沈線区画帯が延び、器形は三角形あるいは六角形状の浅鉢と考えられる。



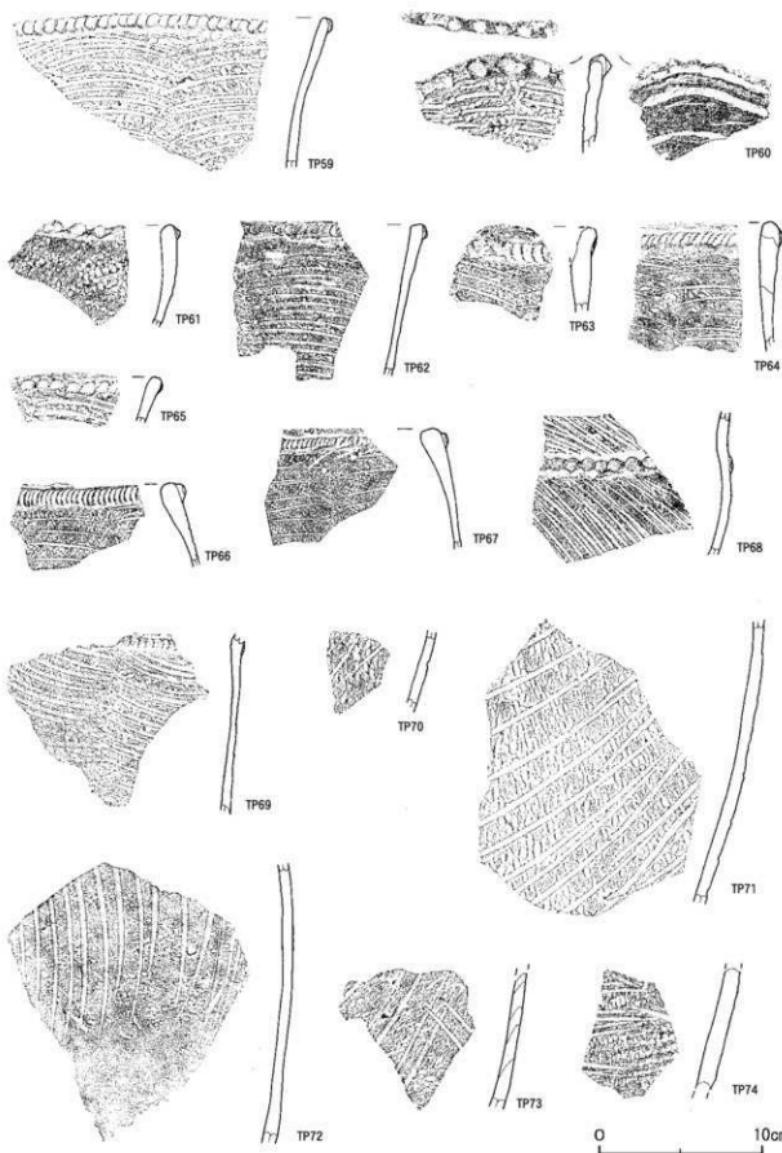
第5図 A区トレチ出土遺物実測図(1)



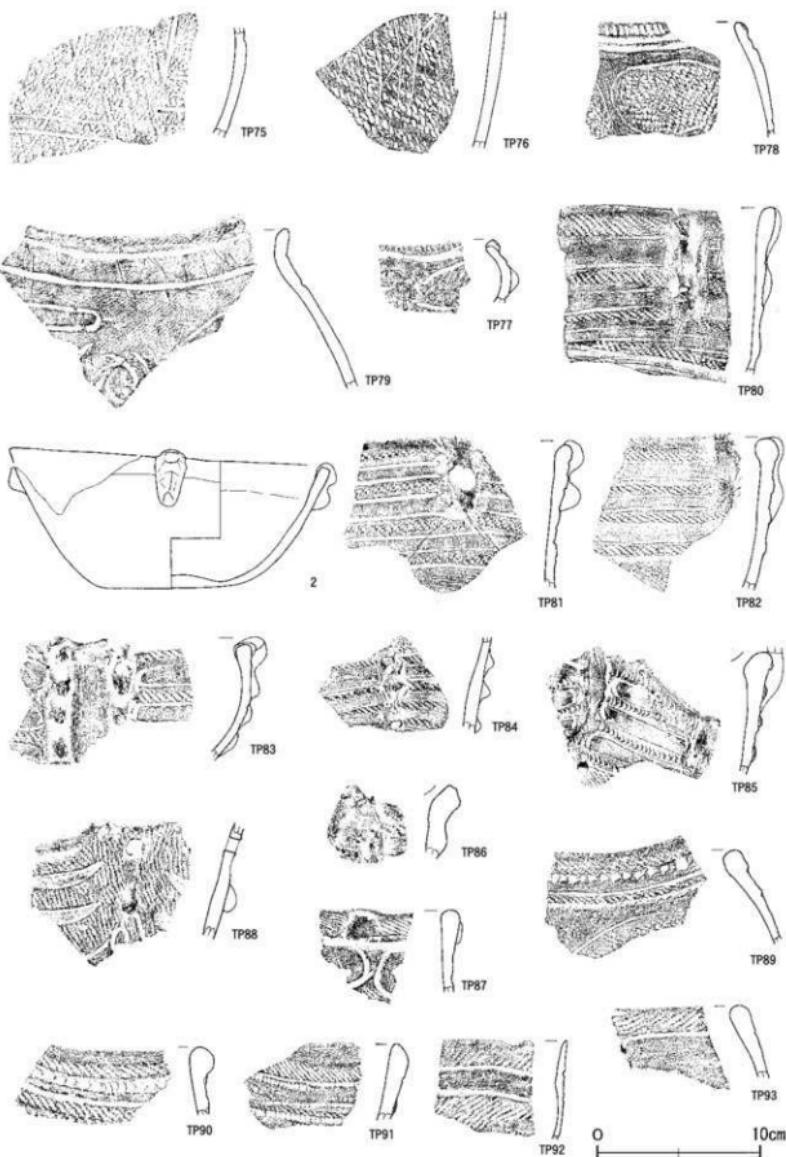
第6図 A区トレンチ出土遺物実測図(2)



第7図 A区トレンチ出土遺物実測図(3)



第8図 A区トレンチ出土遺物実測図(4)



第9図 A区トレンチ出土遺物実測図(5)

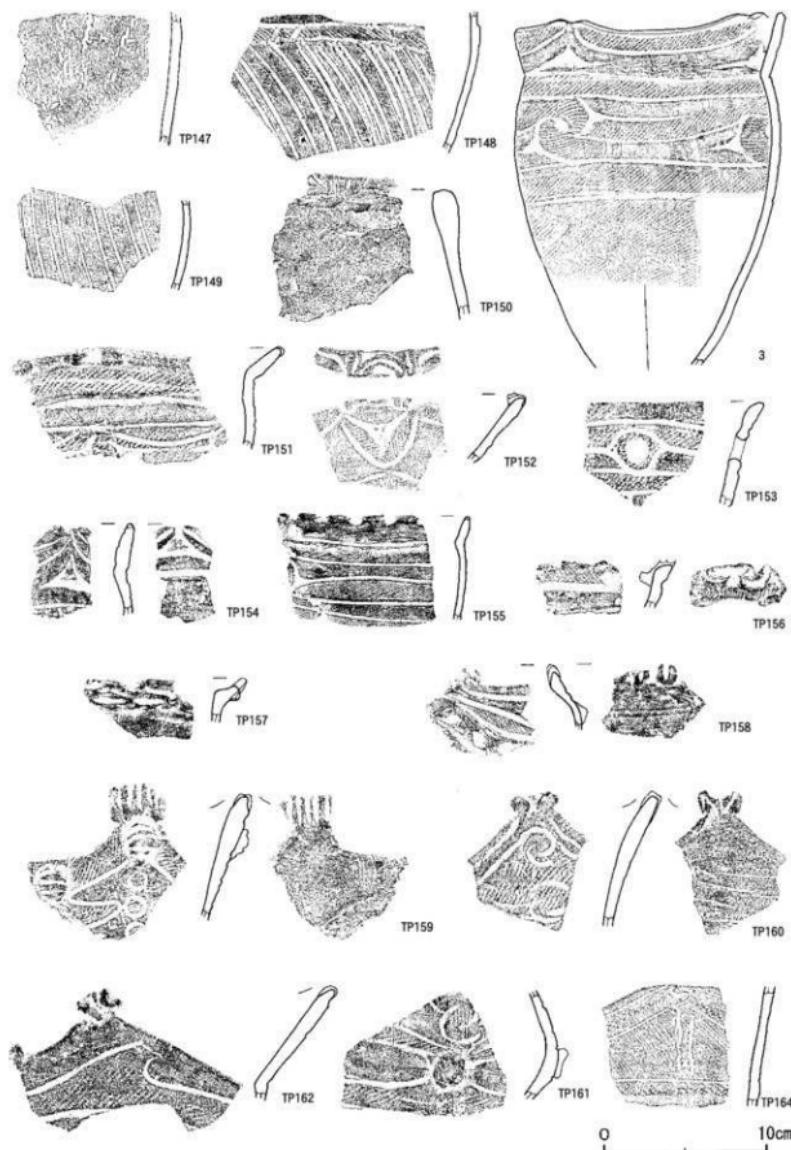


第10図 A区トレンチ出土遺物実測図(6)

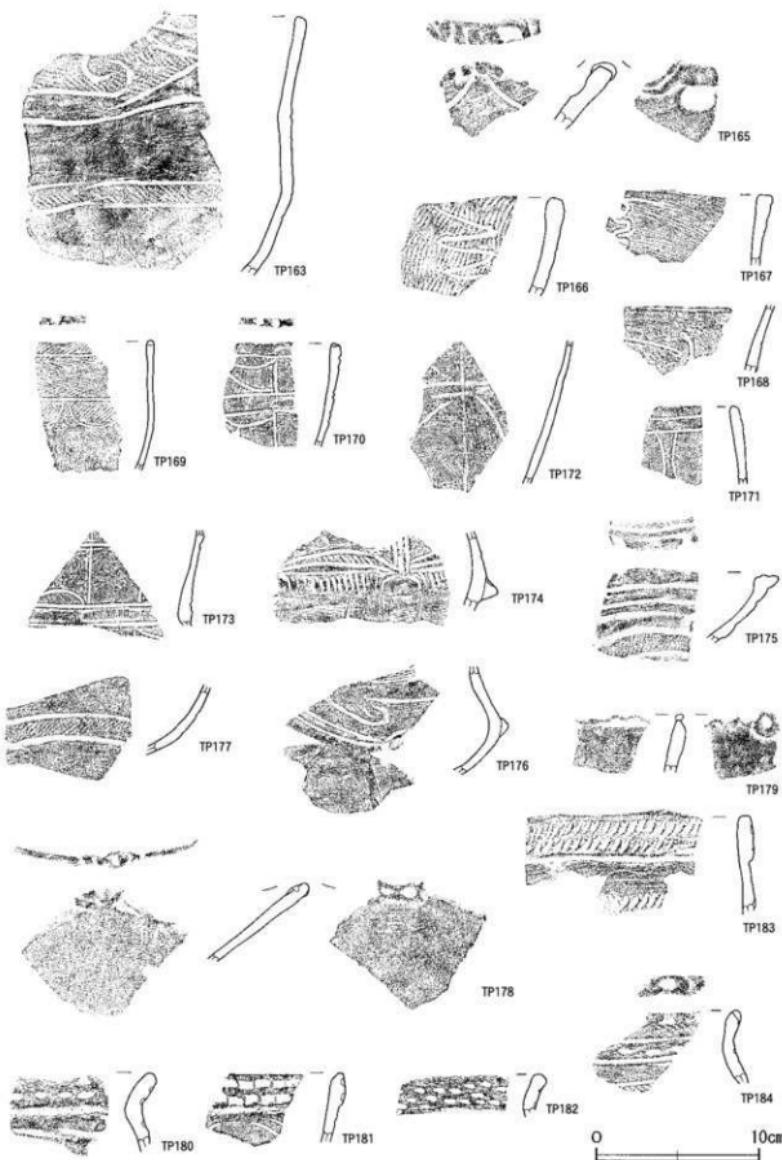


第11図 A区トレンチ出土遺物実測図(7)

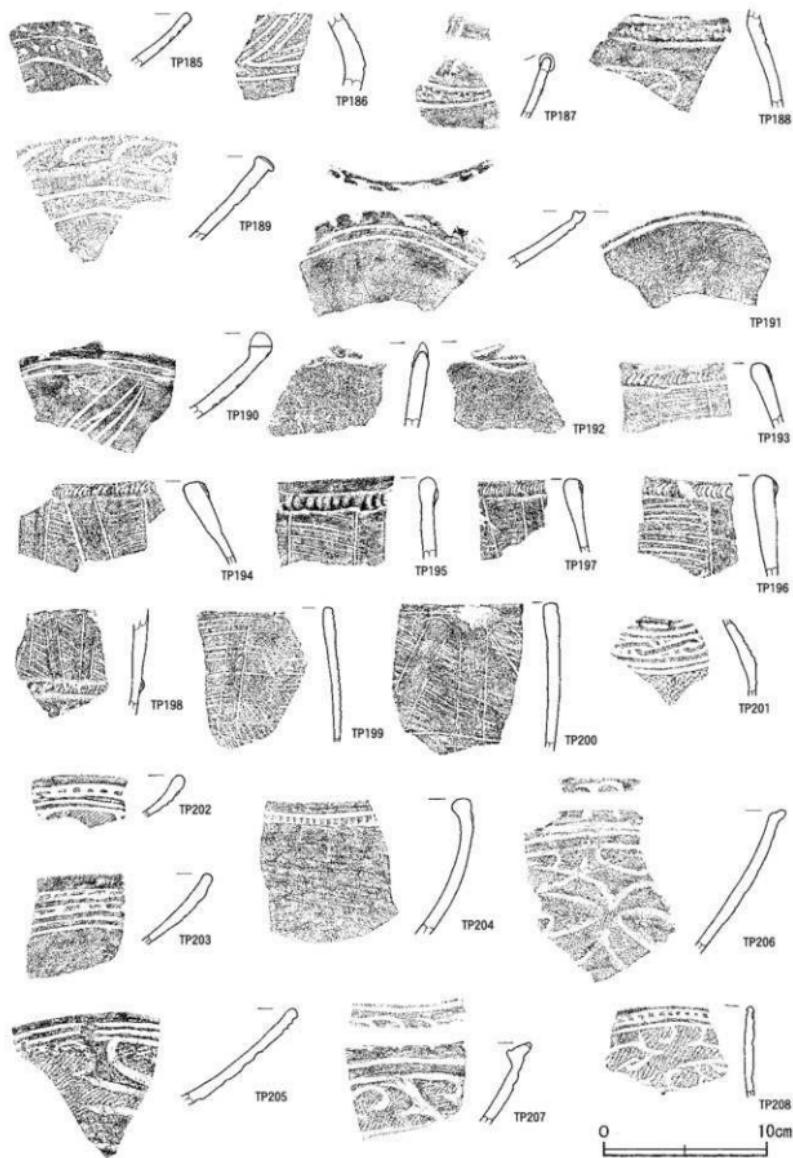
0 10cm



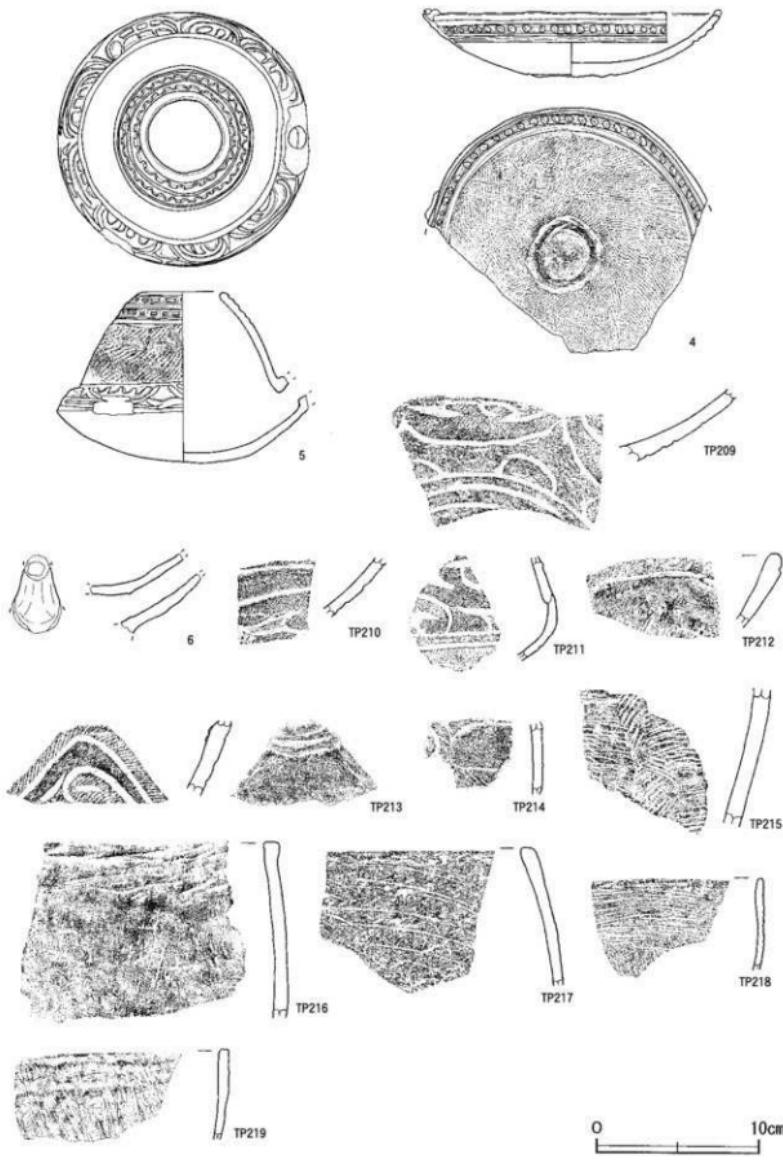
第12図 A区トレンチ出土遺物実測図(8)



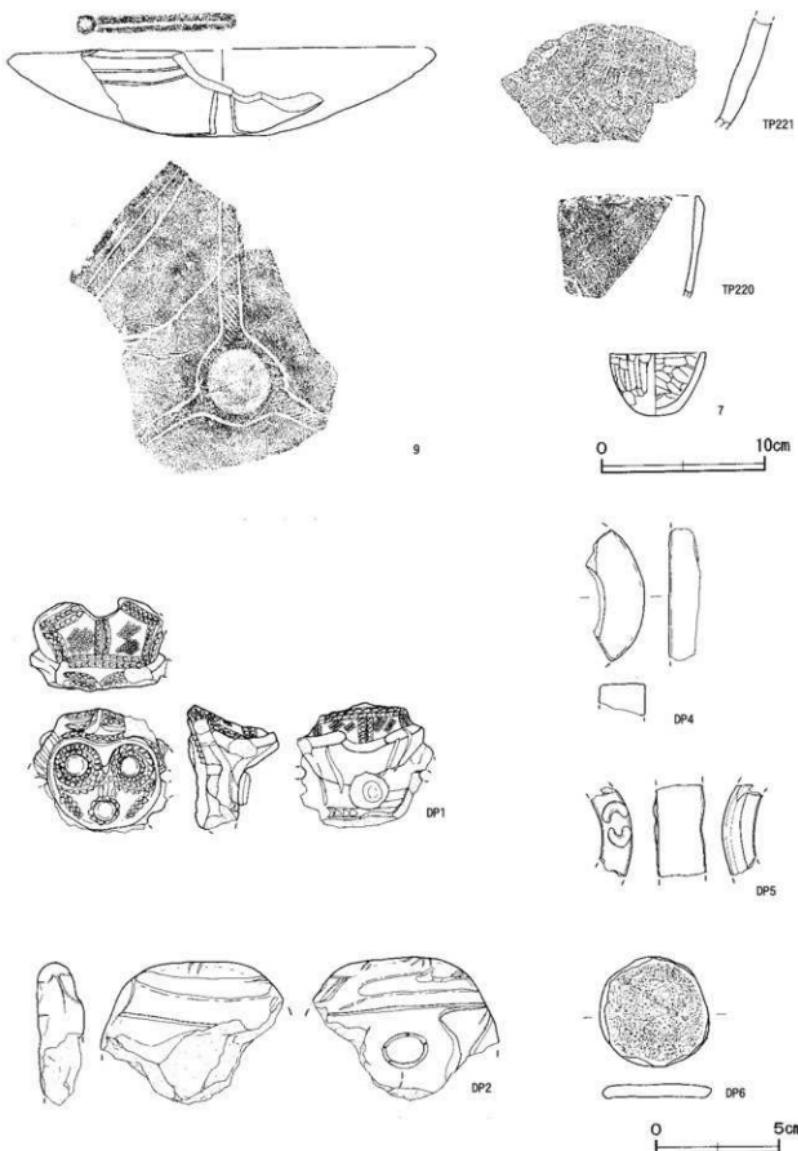
第13図 A区トレンチ出土遺物実測図(9)



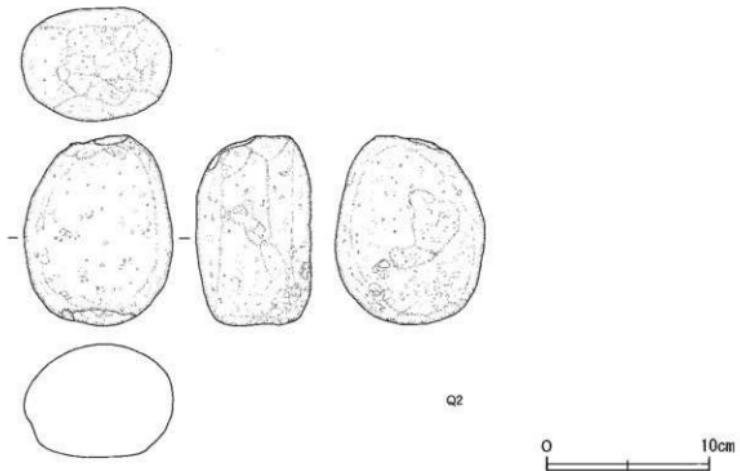
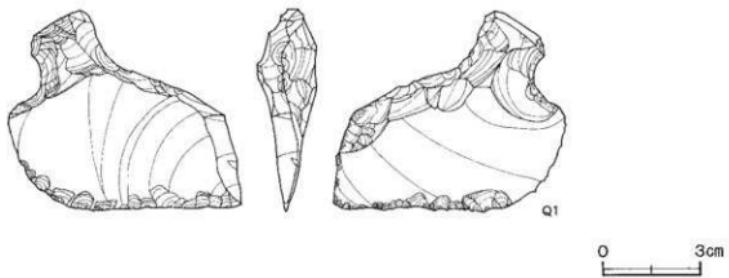
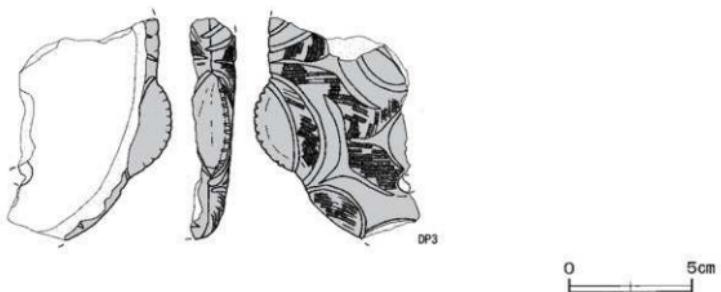
第14図 A区トレンチ出土遺物実測図(10)



第15図 A区トレンチ出土遺物実測図(11)



第16図 A区トレンチ出土遺物実測図(12)



第17図 A区トレンチ出土遺物実測図(13)

A区トレント出土土製品・石器観察表(第16・17図)

| 番号 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 胎土 | 特徴 | 出土位置 | 備考 |
|-----|------|-------|-------|-------|--------|----------------|---|---------|------|
| DP1 | 土偶 | (5.1) | (5.6) | 3.8 | (68.4) | 長石・石英・赤色 粘子 | 目・口・鼻を淮縄刺突で表現。頭頂部は平坦。後頭部にボタン状の附着文。木荀土偶。 | 第1号トレシナ | PL15 |
| DP2 | 土版 | (5.8) | (7.6) | 1.9 | (74.2) | 長石・石英・雲母 | 2条の沈擦を施文 | 第2号トレシナ | PL15 |
| DP3 | 織田土盤 | (9.0) | (6.8) | (1.9) | (69.9) | 長石・石英・雲母 | 中空 三叉文 無節縄文Lを充填施文 穿孔あり | 第2号トレシナ | PL15 |
| DP4 | 耳飾り | (5.4) | (2.3) | (1.3) | (15.3) | 長石・石英・雲母 | 厚手 無文 | 第1号トレシナ | |
| DP5 | 耳飾り | (3.7) | (1.7) | 2.1 | (8.5) | 長石・雲母 | 対向する瓢状の浮線文 | 第2号トレシナ | |
| DP6 | 土製円盤 | 4.5 | 4.5 | 0.7 | 15.7 | 長石・石英・雲母 | 周囲を研磨 無文 | 第2号トレシナ | PL16 |

| 番号 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 石質 | 特徴 | 出土位置 | 備考 |
|----|----|------|-----|-----|-------|------|-----------------|---------|------|
| Q1 | 石匙 | 6.1 | 7.2 | 1.8 | 50.7 | 硬質頁岩 | 横長石匙 線刃周辺部に押圧剥離 | 第2号トレシナ | PL16 |
| Q2 | 磨石 | 11.7 | 9.2 | 7.1 | 446.0 | 安山岩 | 底面に磨痕 | 第1号トレシナ | |

第3節 A区貝塚の様相

A区は、事業地内における開発計画の変更が行われたため、トレント部分の調査で終了したが、斜面貝層と考えられる貝層と遺物包含層が確認された。調査区南部に広がる貝塚は、小貝塚の集合体のように見えるが、貝層の貝種組成や混貝率から南から北へ形成された斜面貝層と推測される。この貝層は、桜川低地および谷津へ向かって傾斜した旧地形に沿って堆積している。文化譜の試掘によれば、東側谷津に向かう斜面部の貝塚の貝層は、厚さ2~3mの純貝層が確認され、その範囲は、東西15m、南北70mの規模という。また堆積状況から、貝層の下に住居跡覆土や土坑覆土の存在も確認されている。堅穴住居跡覆土はトレントでは2か所で確認されたが、覆土に貝層が見られることから、住居廃絶後の窪地に貝殻を廃棄した結果と考えられる。遺構の分布と貝層に集中する数多くの遺物が検出されていることから、他にも住居跡、土坑など遺構の存在が想定される。

遺物は、南側の土層から堀之内2式土器をはじめ加曾利B1~B3式土器、安行1・2式土器が確認され、加曾利B式土器が主体である。北側からは、加曾利B式をはじめ安行1・2式土器、安行3a~3d式土器、前浦式土器、大洞式土器が確認され、安行1・2式土器が主体である。

当貝塚の貝種組成は、縄文時代後期から晩期に内海の汽水域に形成される貝塚の特徴を表しているもので、貝類は汽水域に棲息するヤマトシジミが9割以上を占めている。その他、鹹水域に棲息するハマグリ・アカニシ・シオフキなどが確認できるが、その量は極めて少量である。歯骨類は南部の斜面貝層に集中した出土が認められる。動物種はイノシシ・シカが大半を占め、四肢骨は骨幹部に螺旋状の割れ口をもつ資料が目立った。斜面貝層の形成時期は、縄文時代後期前半から始まり、晩期の前半で終焉となる。貝層に包含する縄文土器は、標高の高い南側に後期前半の遺物が、標高の低い北側に後期終末から晩期の遺物が集中していることから、斜面貝層の堆積は南から北へ進んでいる。従って、後期前半堀之内2式期に斜面貝層の南側から堆積が始まり、加曾利B式、安行1・2式期に最盛期となり、安行3a・3b式期をもって終焉を迎えている。その後、貝層直上の遺物包含層では安行3式から前浦式期の遺物が確認できることから、貝塚形成の終焉後も旭台貝塚は集落として継続して利用されたものと考えられる。

A区は現状保存されるが、今後の学術的な調査により、詳細な遺跡内容等の情報分析に期待するものである。

第5章 B・C・D区の調査

第1節 B区の調査と遺物

B区は、標高25～26mの台地縁辺部に位置し、北側は桜川低地へ、東側は谷津へ向かって緩やかに傾斜している。南側の平坦な台地とは、谷津へ向かう小支谷を挟んで対峙している。調査範囲は南北20～64m、東西32～64mの約2,623m²で、確認調査によって貝層、堅穴住居跡、土坑などが確認されている。本区の調査は、まず貝層の堆積状況と範囲を確認することであり、トレンチ調査による土層観察と出土遺物の取り上げを行った。その後、表土を除去して遺構確認作業を実施したが、事業地内の開発計画の変更が行われたため、遺構調査は実施しておらず、その内容については不明である。ここでは、トレンチ調査によって確認された土層や貝層の堆積状況と遺物の出土状況について記し、遺構については、確認状況について記載する。

1 トレンチの状況

B区の調査では、南北方向に第1・5～7号トレンチ、東西方向に第2～4号トレンチを設定し、確認調査を行った。各トレンチで観察した土層は、同一と判断できる層は同一として番号をつけており、全体で第1～20層に分層される。また、第3・4・7・10層においては土色や含有物が共通であるが、貝ブロックのまとまりや混貝率、さらに貝の殻長や堆積方向を考慮して細分をしている。

第1号トレンチ（第18図）

B区西部F 3a9～G 3d9区に、幅1.5m、長さ52.2mのトレンチを南北方向に設定し、深さ20～250cmまで掘り込んだ。土層は北から南に傾斜する斜面に沿って、北側から流れ込んだ堆積状況を示している。

第1・2層は厚さ8～62cmで、傾斜に沿って堆積している耕作土である。

第3層は厚さ6～28cmでローム粒子微量、貝少量（混貝率10%）を含む黒褐色の混貝土層である。本層は26層に細分される。貝種はヤマトシジミが主体である。第3～5層でハマグリを検出した以外他の種は検出されていない。貝がブロック状に堆積しているように観察できるが、各層とも混貝率が低く貝の破碎率も高いことや土層中に中期から晩期までの土器が混在していることからも再堆積層と考えられる。

第4層は厚さ6～34cmで、焼土粒子・砂ブロック微量を含む黒色土である。本層は北側から約24.8mの地点で南北長約7mの混貝土層となっており、15層に細分される。貝種はヤマトシジミだけであり、他の貝は確認されていない。ほぼ傾斜に沿って堆積する状況を示しており、混貝率は1～5%程、土器片の時期も混在していることから、高位から流れ込んだ土による再堆積層と想定される。

第7層は厚さ8～32cmで、ローム粒子少量、砂ブロック・炭化粒子を微量含む暗褐色土である。本層は北側から約25mの地点で南北約7mの混貝土層となっており、6層に細分される。貝種はヤマトシジミだけであり、他の貝は確認されていない。ほぼ傾斜に沿って堆積する状況を示しており、混貝率は1～2%で、貝の破碎率が高く、高位から流れ込んだ土による再堆積層と想定される。

第10層は厚さ10～25cmで、砂ブロックを微量含む黒褐色土である。北側から約21.8mの地点で南北長3.4mの混貝土層となっており、10層に細分される。第10～3～8層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

第8・9・11・14・15層は厚さ5～42cmで砂ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含み黒褐色土で、堆積範囲が比較的広い。

北側の第9・15層を掘り込んでいる第18・19層は堅穴住居跡覆土と考えられる。第18層は粘土ブロックを含む混貝率30%、貝の破砕率5%の明褐灰色土であり、貝種はヤマトシジミだけである。第19層は焼土粒子を含む混貝率10%、貝の破砕率5%の黒褐色土であり、貝種はヤマトシジミ90%のほかハマグリ、オキシシジミが検出されている。土器は、加曾利B式から安行1・2式までが確認され、加曾利B式土器が主体である。第20層はローム粒子を少量含む褐色土で、地山の上にブロック状に堆積しており、住居跡に伴う周堤痕跡と考えられる。

トレントチ土層解説 (各トレントチ共通)

| | |
|--|--|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 (混貝率5%) | 10 黒褐色 砂ブロック微量 (混貝率0.5%) |
| 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 (混貝率1%) | 11 黒褐色 砂ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 (混貝率0.1%) |
| 3 黒褐色 ローム粒子微量 (混貝率10%) | 12 黒褐色 炭化物・焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 焼土粒子・砂ブロック微量 (混貝率1～5%) | 13 暗褐色 ローム粒子微量 |
| 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 (混貝率1%) | 14 黑褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 |
| 6 黑褐色 焼土粒子微量 (混貝率0.1%) | 15 黑褐色 砂粒微量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 7 暗褐色 ローム粒子少量、砂ブロック・炭化粒子微量 (混貝率1%) | 16 浅黄色 粘土粒子・砂粒中量 |
| 8 黑褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 (混貝率0.2%) | 17 暗褐色 粘土ブロック・砂粒少量 |
| 9 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 (混貝率0.2%) | 18 明褐色 粘土ブロック少量 (混貝率30%) |
| 19 黑褐色 焼土粒子少量 (混貝率10%) | 20 暗褐色 ローム粒子少量 |

第1号トレントチ 3層

| 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 | 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 |
|----------------|-------|-----|---------|------|----------|-----|-----|---------|------|
| 1 7ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 | 14 | 15ヤマトシジミ | 100 | 2～3 | 北斜位 | 平坦 |
| 2 7ヤマトシジミ | 100 | 2～3 | 平坦 | 15 | 15ヤマトシジミ | 100 | 3 | 垂直 | |
| 3 15ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 北斜位 | 16 | 7ヤマトシジミ | 100 | 3 | 垂直 | |
| 4 15ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 垂直 | 17 | 15ヤマトシジミ | 100 | 3 | 北斜位 平坦 | |
| 5 7ヤマトシジミ・ハマグリ | 80～20 | 3 | 平坦 | 18 | 7ヤマトシジミ | 100 | 1～2 | 南斜位 | |
| 6 7ヤマトシジミ | 100 | 3 | 北斜位 | 19 | 5ヤマトシジミ | 100 | 2 | 平坦 | |
| 7 10ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 北上斜位 | 20 | 15ヤマトシジミ | 100 | 3 | 北斜位 | |
| 8 15ヤマトシジミ | 100 | 3 | 南斜位 | 21 | 29ヤマトシジミ | 100 | 2～3 | 北斜位 | |
| 9 20ヤマトシジミ | 100 | 3 | 南斜位 | 22 | 29ヤマトシジミ | 100 | 3 | 北斜位 | |
| 10 5ヤマトシジミ | 100 | 1 | 垂直 | 23 | 16ヤマトシジミ | 100 | 3 | 北斜位 | |
| 11 2ヤマトシジミ | 100 | 2 | 北斜位 | 24 | 16ヤマトシジミ | 100 | 2 | 北斜位 | |
| 12 20ヤマトシジミ | 100 | 2～3 | 南斜位 平坦 | 25 | 29ヤマトシジミ | 100 | 3 | 南斜位 垂直 | |
| 13 20ヤマトシジミ | 100 | 3 | 南斜位 平坦 | 26 | 15ヤマトシジミ | 100 | 3 | 南斜位 | |

第1号トレントチ 4層

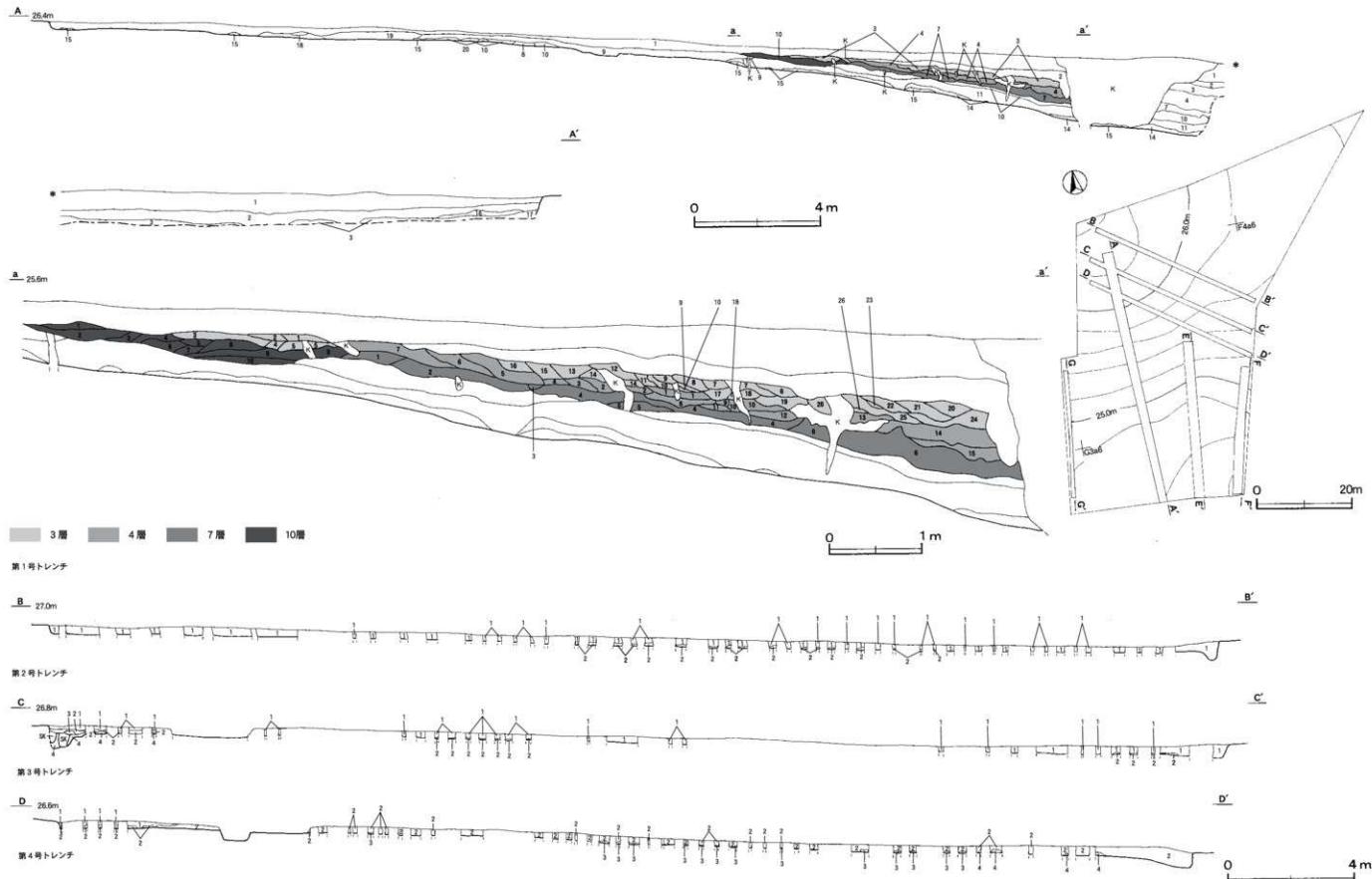
| 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 | 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 |
|-----------|-----|-----|---------|------|---------|-----|----|---------|------|
| 1 1ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 | 9 | 1ヤマトシジミ | 100 | 細片 | — | |
| 2 1ヤマトシジミ | 100 | 2～3 | 平坦 | 10 | 1ヤマトシジミ | 100 | 細片 | 北斜位 | |
| 3 1ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 北斜位 | 11 | 0ヤマトシジミ | — | — | — | |
| 4 0 | | | | 12 | 1ヤマトシジミ | 100 | 2 | 平坦 | |
| 5 1ヤマトシジミ | 100 | 細片 | — | 13 | 5ヤマトシジミ | 100 | 2 | 北斜位 平坦 | |
| 6 1ヤマトシジミ | 100 | 2 | 北斜位 | 14 | 2ヤマトシジミ | 100 | 1 | 北斜位 | |
| 7 2ヤマトシジミ | 100 | 2 | 平坦 | 15 | 1ヤマトシジミ | 100 | 細片 | — | |
| 8 1ヤマトシジミ | 100 | 細片 | — | | | | | | |

第1号トレントチ 7層

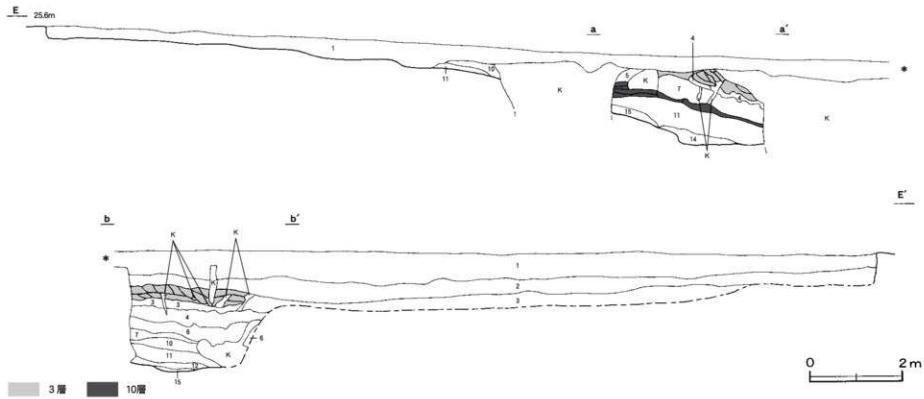
| 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 | 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 |
|-----------|-----|----|---------|------|----------|-----|----|---------|------|
| 1 1ヤマトシジミ | 100 | 細片 | 平坦 | 4 | 1ヤマトシジミ | 100 | 細片 | — | |
| 2 1ヤマトシジミ | 100 | 細片 | 北斜位 | 5 | 2ヤマトシジミ | 100 | 細片 | — | |
| 3 1ヤマトシジミ | 100 | 細片 | 平坦 垂直 | 6 | 11ヤマトシジミ | 100 | 細片 | 北斜位 平坦 | |

第1号トレントチ 10層

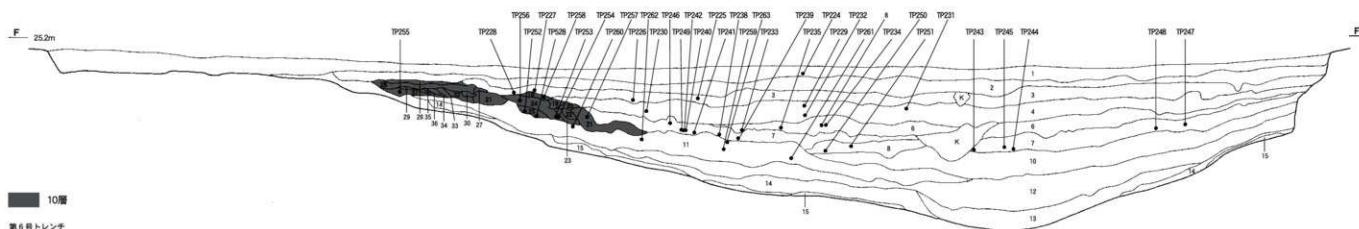
| 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 | 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 |
|-------------|-----|----|---------|------|----------|-----|-----|---------|------|
| 1 7ヤマトシジミ | 100 | 2 | 平坦 | 6 | 2ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 | |
| 2 1ヤマトシジミ | 100 | 細片 | — | 7 | 16ヤマトシジミ | 100 | 3 | 垂直 | 北斜位 |
| 3 15ヤマトシジミ | 100 | 3 | — | 8 | 15ヤマトシジミ | 100 | 2 | 北斜位 南斜位 | |
| 4 1～2ヤマトシジミ | 100 | 細片 | — | 9 | 20ヤマトシジミ | 100 | 2～3 | 平坦 | 北斜位 |
| 5 7ヤマトシジミ | 100 | 2 | 平坦 | 10 | 5ヤマトシジミ | 100 | 3 | 南斜位 | |



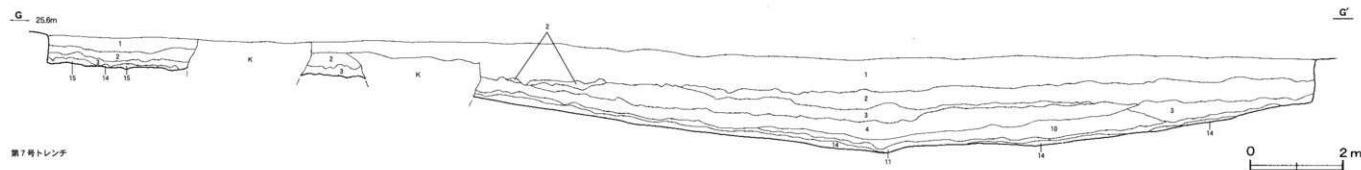
第18図 B区第1～4号トレンチ実測図



第5号トレンチ



第6号トレンチ



第7号トレンチ

第19図 B区第5～7号トレンチ実測図

第2号トレンチ（第18図）

B区北部のE 3 18～F 4 e6区に、幅1m、長さ37.0mのトレンチを東西方向に設定し、深さ20～60cmまで掘り込んだ。土層は2層に分層され、西から東に傾斜する地形に沿って堆積している。

第1・2層は、トレンチャーによって搅乱された耕作土で、1～5%程の貝を含み、層厚は2～10cmである。テストピット1の第4層に相当するソフトローム層上面まで掘り込んだが、遺構や遺物は検出されていない。

第3号トレンチ（第18図）

B区北部のF 3 a8～F 4 f5区に、幅1m、長さ37.0mのトレンチを東西方向に設定し、深さ15～70cmまで掘り込んだ。土層は4層に分層され、西から東に傾斜する地形に沿って堆積している。

第1・2層は第1号トレンチと共通の土層であり、第3層はローム粒子微量、貝少量（混貝率10%）を含む黒褐色土である。第4層は焼土粒子・砂ブロック微量を含む黒色土である。第2～4層にかけて掘り込まれた土坑が2基確認されている。

第4号トレンチ（第18図）

B区北部のF 3 b8～F 4 g5区に、幅1m、長さ36.0mのトレンチを東西方向に設定し、深さ10～50cmまで掘り込んだ。土層は4層に分層され、西から東に傾斜する地形に沿って堆積している。第1～4層は、第1号トレンチと共に土層である。テストピット1の第4層に相当するソフトローム層上面まで掘り込んだが、遺構や遺物は検出されていない。

第5号トレンチ（第19図）

B区西部のF 4 f2～G 4 d1区に、幅1.5m、長さ33.8mのトレンチ南北方向に設定し、深さ20～256cmまで掘り込んだ。土層は高位から流入した土砂による自然堆積の状況を示している。中央部南寄りの南北幅2.8m、深さ200cmの範囲が搅乱されており、堆積状況は一部不明である。

第1・2・4・11層は、第1号トレンチと共に土層である。第3層は厚さ10～34cmでローム粒子微量、貝少量（混貝率10%）を含む黒褐色の混貝土層である。本層は22層に細分される。貝種はヤマトシジミだけである。混貝率は1～15%で、貝の破碎率が高く、混貝土層内の貝のまとまりはみられない。第5層は、焼土粒子・炭化粒子・貝微量（混貝率1%）を含む暗褐色土である。

第6・7層は谷津部で平坦に堆積している。ローム粒子少量、砂ブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土や暗褐色土で、土器や貝は微量出土し、再堆積層と考えられる。

第10層は厚さ4～28cmで、砂ブロックを微量含む黒褐色土である。北から12.0mの地点で長さ3.2mの混貝土層があり、7層に細分される。貝種はヤマトシジミが主体である。第10～13層でハマグリが確認されているが、他の混貝土層で確認されているのはヤマトシジミだけである。また、第10～14・17層では歯骨が出土している。ほぼ傾斜に沿って堆積する状況を示しており、混貝率は20～30%、殻長は3～5cmであり、貝の破碎率は高い。第10層は高位から流れ込んだ再堆積層と考えられる。

第12層は谷津に傾斜する地形に沿って堆積している。混貝率が低く貝の破碎率も高いこと、また、土層中から遺物が出土していないことから自然堆積層と考えられる。

第14・15層は谷津に傾斜する地形に沿って堆積している。ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒を含むし

まりが強い黒色土や黒褐色土である。貝や遺物は含まれず、北と南から支谷へ向かう傾斜に沿って自然堆積している状況を示している。

第5号トレンチ 3層

| 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 | 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 |
|------|----------|-----|---------|---------|------|----------|-----|---------|---------|
| 27 | 5ヤマトシジミ | 100 | 1 | 平田 | 38 | 1ヤマトシジミ | 100 | 1 | 南斜位 |
| 28 | 1ヤマトシジミ | 100 | 1 | — | 79 | 2ヤマトシジミ | 100 | 2 | 北斜位 |
| 29 | 7ヤマトシジミ | 100 | 1 | — | 40 | 1ヤマトシジミ | 100 | 1 | — |
| 30 | 2ヤマトシジミ | 100 | 1 | 南斜位 北斜位 | 41 | 2ヤマトシジミ | 100 | 1 | 北斜位 |
| 31 | 5ヤマトシジミ | 100 | 1 | 南斜位 北斜位 | 42 | 15ヤマトシジミ | 100 | 1 | 北斜位 南斜位 |
| 32 | 8ヤマトシジミ | 100 | 1 | 北斜位 | 43 | 15ヤマトシジミ | 100 | 1 | 北斜位 平坦 |
| 33 | 3ヤマトシジミ | 100 | 1 | 北斜位 | 44 | 15ヤマトシジミ | 100 | 1 | 南斜位 北斜位 |
| 34 | 7ヤマトシジミ | 100 | 1 | 北斜位 | 45 | 16ヤマトシジミ | 100 | 1 | 平坦 北斜位 |
| 35 | 2ヤマトシジミ | 100 | 1 | 平坦 | 46 | 5ヤマトシジミ | 100 | 1 | 平坦 |
| 36 | 15ヤマトシジミ | 100 | 2 | 北斜位 平坦 | 47 | 2ヤマトシジミ | 100 | 1 | 平坦 |
| 37 | 2ヤマトシジミ | 100 | 1 | 北斜位 | 48 | 1ヤマトシジミ | 100 | 1 | — |

第5号トレンチ 10層

| 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 | 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 |
|------|---------------|------|---------|--------|------|-------------|-------|---------|---------|
| 11 | 20ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 | 15 | 30ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 北斜位 |
| 12 | 0 | 100 | — | — | 16 | 30ヤマトシジミ | 100 | 3 | 南斜位 北斜位 |
| 13 | 30ヤマトシジミ+ハマグリ | 99+1 | 3・5 | 平坦 北斜位 | 17 | 20歯骨+ヤマトシジミ | 80+20 | 5・繊片 | 平坦 |
| 14 | 3歯骨 | 100 | 5 | 北斜位 | | | | | |

第6号トレンチ (第19~21図)

B区東部のF 4 h 4~G 4 d3区に、幅1.5m、長さ27.0mのトレンチを南北方向に設定し、深さ32~340cmまで掘り込んだ。土層は13層に分層され、傾斜する地形に沿って南・北からの堆積状況を示している。第6号トレンチでは、B区における貝層の形成過程を観察するため、資料の採集を行った。調査方法は、コラムサンプルの定量的な貝層の採集である。サンプルは北から7.8mの地点で表土から25cm下の土層を、40×40cmで厚さ5cmごとに深さ75cmまで採取した。採取した土壌は1~15までサンプル番号をつけ、未分別のまま取り上げた。サンプルは乾燥した後、5mm、3mm、1mm目の篩および水洗選別器を使用し、水洗洗浄、分別、浮遊選別を行い、乾燥した後に重量を計測した。

第1~4層は、第1号トレンチと共に土層であるが、遺物、歯骨、貝が混在している。遺物は、第1層からTP224、第3層からTP225~TP228、第4層からTP229~TP232がそれぞれ出土しており、後期前葉から後期後葉までの土器が確認され、加曾利B式土器が主体である。

第6~8層は、谷津部でほぼ平坦に堆積している。土色が異なるが、ローム粒子を含む土質は共通で、遺物は縄文時代後期前葉から後期後葉までが出土している。第6層からはP 8、TP233~TP235が出土しており、晚期前葉の土器が主体となる。第7層でもTP238~TP249の晚期前葉の土器が主体である。第8層からはTP250・TP251が出土しており、後期後葉の土器が主体である。貝はヤマトシジミが微量出土しているが、破片であることから再堆積層と考えられる。

第10層は厚さ10~52cmで、砂ブロック微量、貝少量（混貝率0.5%）を含む黒褐色の混貝土層である。北側から谷津へ向けて傾斜して堆積している。本層には、北から7~12.8mに2層の混貝土層が認められる。設長の方向や貝のまとまりなどから20層に細分されるが、全体的に含まれる歯骨や貝は少ない。細分された一部の土層には、歯骨や貝がまったく含まれていないものがある。トレンチ北側は貝がブロック状に堆積しているが、南側は遺物の出土は微量である。北側の混貝土層（第10~26~37層）はヤマトシジミが主体であり、土器も出土している。南側の混貝土層（第10~18~25層）は、歯骨の出土量が多い。遺物はTP252~TP258・TP258で、縄文時代後期前葉から後期後葉までの土器が確認され、後期後半が主体である。混貝率は低く、貝の破碎率は高く、ローム粒子があまり含まれていない。また、土層中に中期から晚期までの土器が混在しており、再堆積層と考えられる。

第11層は厚さ16~60cmで、砂ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含み、また貝を微量含む黒褐色土である。北側から谷津に傾斜して堆積しており、自然堆積層と考えられる。遺物はTP259~TP263が出土している。

第12・14・15層は前述した第5号トレンチと共通の土層である。

第13層は層厚12~42cmのローム粒子を微量含む暗褐色土で、粘性は強く締まりは普通である。貝や遺物は検出されず、南・北から支谷に流れ込んだ堆積状況を示している。

第6号トレンチ 10層

| | 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 | 混貝率% | 組成 | % | 大きさ(cm) | 堆積方向 |
|----|------|--------|-----|---------|------|------|---------|-----|---------|------|
| 18 | 1 | 歯骨 | 100 | — | 平坦 | 28 | 2ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 |
| 19 | 0 | 歯骨 | 100 | — | 北斜位 | 29 | 2ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 |
| 20 | 1 | 歯骨 | 100 | — | 平坦 | 30 | 0 | — | — | — |
| 21 | 2 | 歯骨 | 100 | — | 平坦 | 31 | 1ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 |
| 22 | 0 | — | — | — | — | 32 | 1ヤマトシジミ | 100 | 細片 | — |
| 23 | 0 | — | — | — | — | 33 | 2ヤマトシジミ | 100 | 3 | 南斜位 |
| 24 | 2 | 歯骨 | 100 | — | 平坦 | 34 | 1ヤマトシジミ | 100 | 3 | 北斜位 |
| 25 | 0 | — | — | — | — | 35 | 1ヤマトシジミ | 100 | 2 | 北斜位 |
| 26 | 2 | ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 | 36 | 3ヤマトシジミ | 100 | 3 | 南斜位 |
| 27 | 0 | — | — | — | — | 37 | 1ヤマトシジミ | 100 | 3 | 平坦 |

第7号トレンチ (第19~70図)

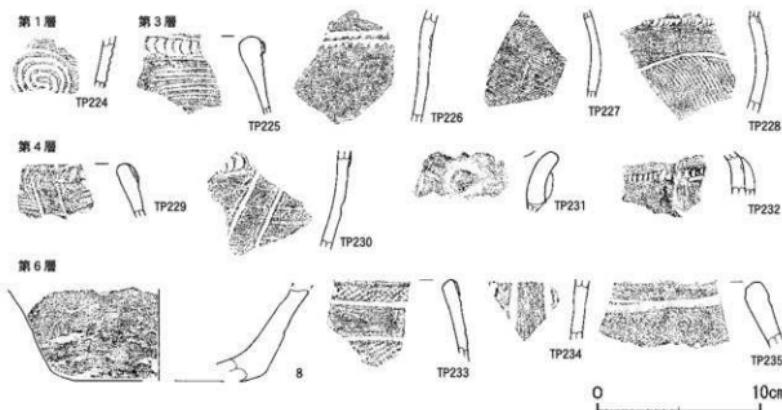
B区西部のF 3g6~G 4c5区に、幅1m、長さ26.5mのトレンチを南北方向に設定し、深さ62~198cmまで掘り込んだ。土層は傾斜する地形に沿って南・北から流れ込んで堆積した状況を呈している。

第1~4層は、第1号トレンチと共通の土層である。

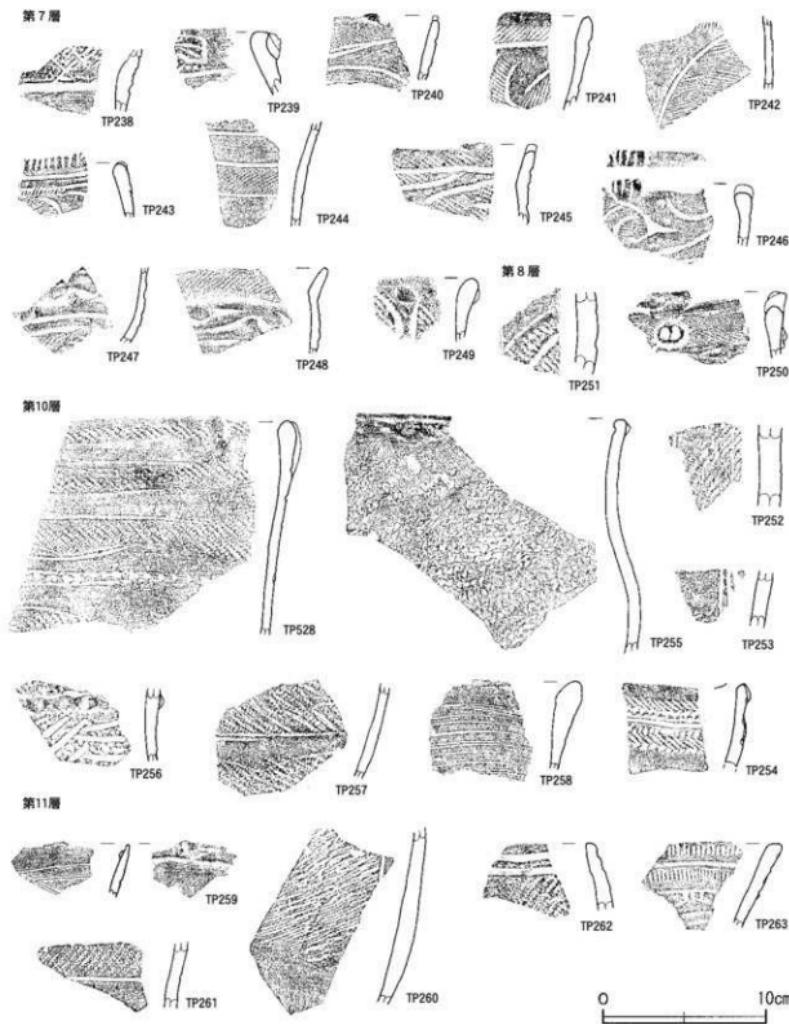
第10層は厚さ6~38cmで、砂ブロック微量、貝少量を含む黒褐色土である。混貝率は低く、破碎率も高いことや土層中から遺物が出土していないことなどから自然堆積層と考えられる。

第11層は厚さ3~14cmで、砂ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含み、また貝を微量含む黒褐色土で貝の破碎率は高い。支谷へ流れ込んだ堆積状況を示しており、遺物はQ11(第70図)の搔器だけが検出されている。

第14・15層は前述した第5号トレンチと共通の土層である。



第20図 B区第6号トレンチ出土遺物実測図(1)



第21図 B区第6号トレンチ出土遺物実測図(2)

B区第6号トレンチ出土遺物観察表(第20・21図)

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|----|------|----|----|-------|--------|----------------|----|----|-------|------|------|-----|
| H | 調文土器 | 深鉢 | | (5.7) | (13.4) | 長石・石英・赤色 粒子 | 橙 | 普通 | 無文 | 後期後半 | 第6層 | 10% |

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|-------|------|----|-------------------|--------|----|-----------------------------|--------------|------|----------|
| TP224 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | に赤い褐色 | 普通 | 高巻文 | 縄之内1 | 第1層 | |
| TP225 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 赤褐色 | 普通 | 口縁部に指頭押圧のある隆縁文 脊部 楕円の条縞文 | 安行2粗製 | 第3層 | |
| TP226 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・雲母 | に赤い赤褐色 | 普通 | 2条の刻目帯 | 後期後半 | 第3層 | |
| TP227 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 黒 | 普通 | 地文節縞文LR | 後期後半 | 第3層 | |
| TP228 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・雲母 | に赤い赤褐色 | 普通 | 刻日文 連弧文 消済文W | 安行1精製 | 第3層 | |
| TP229 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・赤色 粒子 | に赤い褐色 | 普通 | 口縁部に刻目のある絆縞文 | 安行2粗製 | 第4層 | |
| TP230 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い赤褐色 | 普通 | 扭繩文に刻日・斜位2条の沈線 | 安行2粗製 | 第4層 | |
| TP231 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 黒 | 普通 | 貼付文 | 安行1精製 | 第4層 | |
| TP232 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | 椎 | 普通 | 刻日文 貼付文 | 曾谷精製 | 第4層 | |
| TP233 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・赤色 粒子 | 椎 | 普通 | 帯縞文 沈線区画帯無文 | 曾谷精製 | 第6層 | |
| TP234 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い褐色 | 普通 | 2条の沈線文 刺突文 | 称名寺2 | 第6層 | |
| TP235 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | に赤い赤褐色 | 普通 | 沈線文 | 安行3a精製 | 第6層 | |
| TP236 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・雲母 | に赤い赤褐色 | 普通 | 地文節縞文LR 斜格子目文 | 加曾利B2 精製 | 第7層 | |
| TP237 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・雲母・赤色 粒子 | に赤い赤褐色 | 普通 | 地文節 削目のある貼付文 | 安行2粗製 | 第7層 | |
| TP240 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 明赤褐色 | 普通 | 弧状沈線文 消済文 | 安行3b精製 | 第7層 | |
| TP241 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | 赤褐色 | 普通 | 口唇部半輪縞文LR 消済文 沈線文 | 安行3a精製 | 第7層 | |
| TP242 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | に赤い褐色 | 普通 | 弧縞文 細密沈線文 | 安行3b精製 | 第7層 | |
| TP243 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・雲母・赤色 粒子 | に赤い赤褐色 | 普通 | 刻目文 弧縞文 細密沈線文 | 安行3b精製 | 第7層 | |
| TP244 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い褐色 | 普通 | 横位に3条の沈線 文 単節縞文LR | 後期末葉 | 第7層 | 東北系 塗付土器 |
| TP245 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | に赤い赤褐色 | 普通 | 口唇部に突起 沈線文 単節縞文LR | 安行3a精製 | 第7層 | |
| TP246 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | に赤い褐色 | 普通 | 口唇部に突起 入組三文 文 単節縞文 LR | 安行3a精製 | 第7層 | |
| TP247 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い褐色 | 普通 | 沈線文 单節縞文LR | 大洞B2 | 第7層 | |
| TP248 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 灰褐色 | 普通 | 三文文 单節縞文LR | 大洞B2 | 第7層 | |
| TP249 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 明赤褐色 | 普通 | 贴付文 单節縞文LR | 安行2精製 | 第7層 | |
| TP250 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・赤色 粒子 | 椎 | 普通 | 帯縞文 刻日のある貼付文 | 安行2精製 | 第8層 | |
| TP251 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 椎 | 普通 | 地文節縞文LR | 中期末～後 期初頭 | 第8層 | |
| TP252 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 椎 | 普通 | 地文節縞文W 沈線文 | 縄之内1 | 第10層 | |
| TP253 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い赤褐色 | 普通 | 豊魚文 | 縄之内1 | 第10層 | |
| TP254 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 黒 | 普通 | 帯縞文 | 安行1精製 | 第10層 | |
| TP255 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | 灰黄褐色 | 普通 | 地文節縞文LR | 加曾利B 粗製 | 第10層 | |
| TP256 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・赤色 粒子 | 暗赤褐色 | 普通 | 指頭押圧による刻目のある絆縞文 地文節縞文LR | 加曾利B 粗製 | 第10層 | |
| TP257 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 暗赤褐色 | 普通 | 单節縞文W 沈線区画帯無文 | 安行1精製 | 第10層 | |
| TP258 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 黒褐色 | 普通 | 横位の多縞文 | 後期粗製 | 第10層 | |
| TP259 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・雲母・赤色 粒子 | に赤い赤褐色 | 普通 | 帯縞文 沈線による区画帯 貼付文 | 安行1精製 | 第10層 | |
| TP260 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・赤色 粒子 | 概灰 | 普通 | 沈線文 口唇部内面に貼付文 | 縄之内2 | 第11層 | |
| TP261 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い赤褐色 | 普通 | 地文節縞文L | 後期初頭 | 第11層 | |
| TP262 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・赤色 粒子 | 黄灰 | 普通 | 单節縞文LR 填施文 安行1精製 | 加曾利B1 精製 | 第11層 | |
| TP263 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 椎 | 普通 | 单節縞文LR 填施文 横位2条の沈 線文 | 加曾利B1 精製 | 第11層 | 東北系 塗付土器 |
| | | | | | | 後期末葉 | 第11層 | | |

2 遺物 (第22~28図, PL.9 ~11・13・14)

縄文土器片28,120点が出土している。中期から晩期までの土器が出土しているが、後期中葉から晩期前葉の土器が主体である。他の区の出土量と比較するとB区では加曾利B式土器が多く、細片と底部片を除いた割合でみると、出土点数の43.6%、重量の45.3%を加曾利B式土器が占めている。破片資料 (TP番号) は、数字番号のみの表記とする。

B区出土土器の点数及び重量

| 時期 | 前 期 | | 中 期 | | 後 期 | | | | | | | |
|--------|-------|----|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|
| | | | | | 称名寺式 | | 堀之内式 | | 加曾利B式 | | | |
| | 粗・精の別 | | 精 製 | | 粗 製 | | 精 製 | | 粗 製 | | 精 製 | |
| 部位 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 |
| 出土数 | | | 1 | 65 | 9 | 31 | 8 | 53 | 533 | 1011 | 954 | 2684 |
| 重量(kg) | | | 0.03 | 2.29 | 0.15 | 0.68 | 0.23 | 1.42 | 8.61 | 18.28 | 18.90 | 46.16 |

| 時期 | 後 期 | | | | | | | | | | | 底面部 | 細片 | 総点数 総重量 | | | |
|--------|------|------|-----|----|-------|--------|-------|-------|------|-------|-----|-----|--------|------------|--|--|--|
| | 曾谷式 | | | | | 安行1・2式 | | | | | | | | | | | |
| | 精 製 | | 粗 製 | | | 精 製 | | 粗 製 | | | | | | | | | |
| 部位 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | | | | | |
| 出土数 | 1 | 150 | | | 709 | 227 | 1259 | 1541 | 301 | 8139 | | | 17676 | | | | |
| 重量(kg) | 0.03 | 2.72 | | | 14.57 | 4.39 | 21.80 | 25.37 | 9.28 | 50.61 | | | 225.52 | | | | |

| 時期 | 晩 期 | | | | | | | | | | | 無文土器 | 底面部 | 細片 | 総点数 総重量 | | | | |
|--------|----------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|----|------------|--|--|--|--|
| | 安行3a～3d式 | | | | | 前油式 | | | | | 大洞式 | | | | | | | | |
| | 精 製 | | 粗 製 | | | 精 製 | | 粗 製 | | | | | | | | | | | |
| 部位 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | | | | | | | |
| 出土数 | 215 | 100 | 126 | 1889 | 8 | 19 | 6 | 1 | 290 | 273 | 7517 | | 10444 | | | | | | |
| 重量(kg) | 4.04 | 1.96 | 2.87 | 24.19 | 0.24 | 0.36 | 0.14 | 0.01 | 3.38 | 7.86 | 39.45 | | 84.50 | | | | | | |

第II群 中期の土器群

A類 阿玉台式 265は突起をもち、隣線文を施している。

B類 加曾利E式 264は加曾利E 1式で、眼鏡状把手である。266は加曾利E 3式で、地文が単節繩文RLで3条の沈線文が施される。

第III群 後期の土器群

A類 称名寺式 268は称名寺1式で、沈線文、磨消繩文が施される。267・269～272は称名寺2式である。

2条の沈線文を施し、沈線間に刺突文を施すものと、無文のものがある。269は口縁部に沈線文を施している。271・272は刺突文を施し、270は隆帯下に沈線による文様を施している。

B類 堀之内式 274～278は堀之内1式で、沈線による文様をもつ。310は注口土器の吊り手である。

C類 加曾利B式

C1類 加曾利B 1式 280・281・304・306・307・311である。口縁部外面あるいは内面に横位の4～6条の沈線文を施すものが多い。281は充填繩文が施される。280は沈線間にL字文を施している。307は浅鉢、306は皿、311は注口土器の吊り手である。

C2類 加曾利B 2式 P11, 282・283・285である。斜位に沈線文が施され、282・283の矢羽根状沈線文と285の斜格子目文を施したものがある。P11は隆帯上に刻目を施された鉢である。

C3類 加曾利B 3式 P10, 286～290・294～297・299～302・367である。口唇部に刻文帯をもち、口辺部に沈線文、磨消繩文を施し、胴部に弧状の沈線文を施すものがある。286～288は刻文帯に沈線文を施す。286・287は充填繩文、288は斜位の沈線文を施す。289は刻文帯に単節繩文RLを施している。290・295は横位の沈線文、294は羽状繩文を施している。P10, 296・297・299～301は胴部に連弧文がある。

C4類 加曾利B式の粗製土器 312～317・320・322・324・325・353である。地文に繩文を施し、口縁

部に1～2条の指頭押圧をもつ隆線、刻文帯、紐線文を施すものがある。また縦・斜状の沈線文を施すものもある。312～317・322・353は紐線文を施す。312～315は内面に沈線、316・317・353は弧状や斜位の条線文を施している。320は刻文帯と斜位の条線文を施している。322・324・325は地文が繩文で斜位の条線文を施す。

D類 曾谷式 P22・305・308・323・326・327・329～331である。口唇部に刻文帯、口辺部に下向の連弧文を施すものがある。329・330は刻文帯、326は連弧文、329は胸部に沈線文が施されている。323・331は粗製土器で条線文を施している。305・308は浅鉢、P22は口辺部に沈線文を施された鉢である。

E類 安行1・2式

E1類 安行1式 P12～P16、291・292・303・318・319・332～337である。3～5条の繩文帯に無文の貼付文を施すものが多い。P12の浅鉢や333～335は繩文帯と貼付文、291は入組文を施す。318・319・332は刻文帯をもつ。292・303は東北系の土器である。P13は沈線施文後、単節繩文を充填施文された台付鉢である。

E2類 安行2式 P20、284・338～348・366である。繩文帯と刻目のある貼付文を施すものが多い。284は貼付文と矢羽状沈線文が施されている。338～345・347は繩文帯と刻目のある貼付文、341は沈線による入組文、346は繩文帯に連続刺突文が沿って施されている。366は蛇行沈線文と稻妻状文様を施されている。P20、348は異形台付土器である。

E3類 安行1・2式の粗製土器 273・321・349～352・354～360・378である。刻文帯あるいは紐線文を施すものや粘土紐による隆帶がないものがある。また、胸部に縦・斜位の条線文、直線・弧状・「ト」状・蕨手状の沈線文を施すものがある。321・349～351は刻文帯があり、349・350は横・斜位の条線文、355・378は弧状の沈線文をもつ。352・354～357・359・360・378は紐線文と弧状の条線文を施し、356・357・359は縦位の沈線文を施す。358は紐線文がなく、弧状の条線文と縦位の沈線文を施す。

第IV群 晩期の土器群

A類 安行3a～3d式

A1類 安行3a式 293・298・361～363・365である。361は三叉文が施され、293・362・363・365は2条の沈線間に筋の細かい繩文が施文されている。

A2類 安行3b式 279・364・368・370・373・376である。沈線間に筋の細かい繩文を施文し、沈線による入組文や入組三叉文を施す。また、区画文間に細密沈線文を施すものもある。364は入組文を施す。368・370は細密沈線文を施すいわゆる「姥山式」である。373は沈線による連弧文が施文されている。

A3類 安行3c式 369・372である。369は口縁部に貼付文、胸部に弧線文と玉抱き三叉文を施す。372は沈線文に沿って刺突文が施文されている。

A5類 安行3a～3d式の粗製土器 P21・P23、379～381・383である。379～381は弧状の条線文、383は無文である。P21・P23は底部片で、P21は網代痕がある。

B類 大洞式

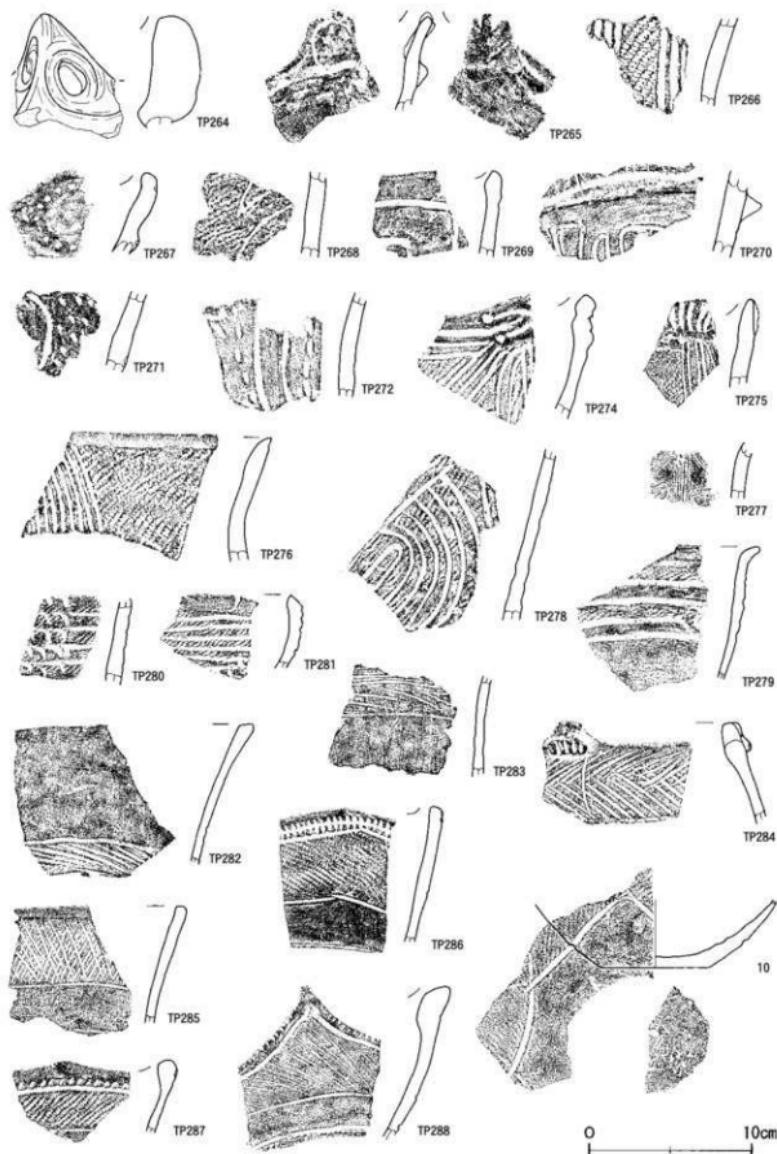
B1類 大洞B式 328は入組文を施文している。

B2類 大洞BC式 P18とP19は雲形文を施した注口土器と壺形土器である。375・382は雲形文を施す。

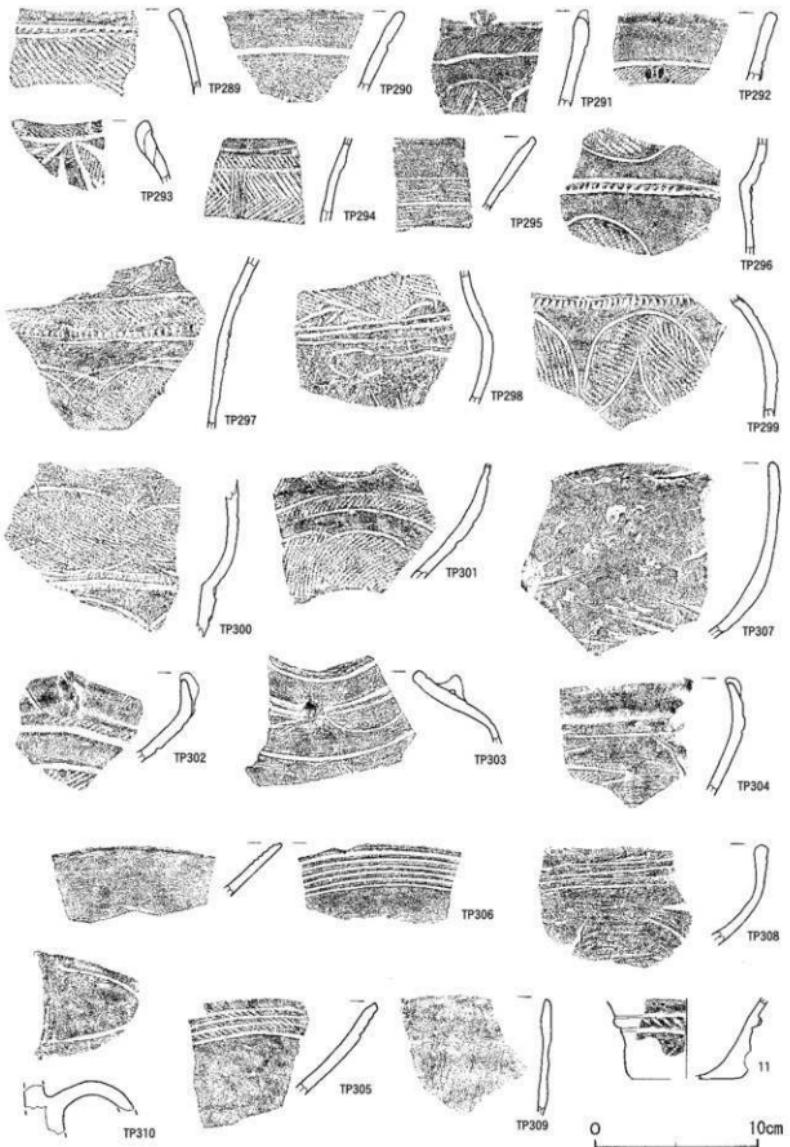
C類 前浦式 371・374・377である。371は口縁部に刺突文を施す壺形土器、374は口縁部に刻目をもち、雲形文を施す。377は波状口縁で幅広の沈線文をもつ。

第V群 その他の土器群

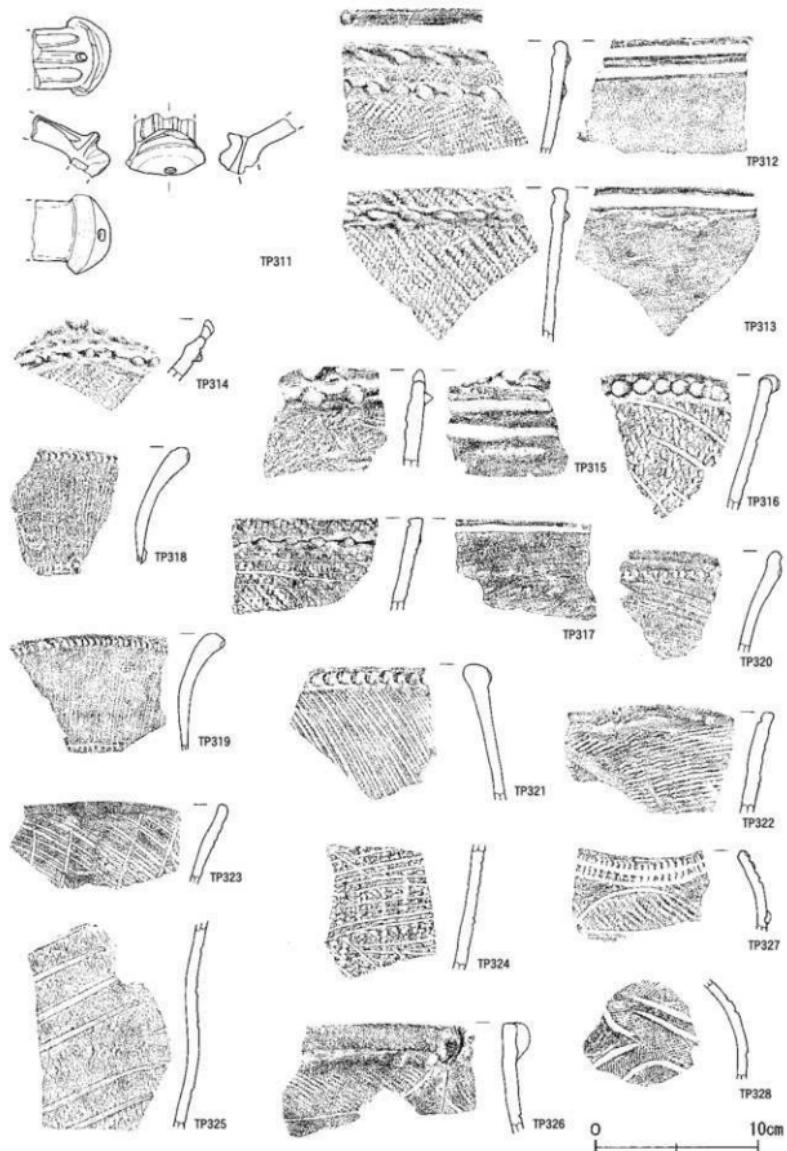
309はミニチュア土器である。384は無文の製塙土器である。



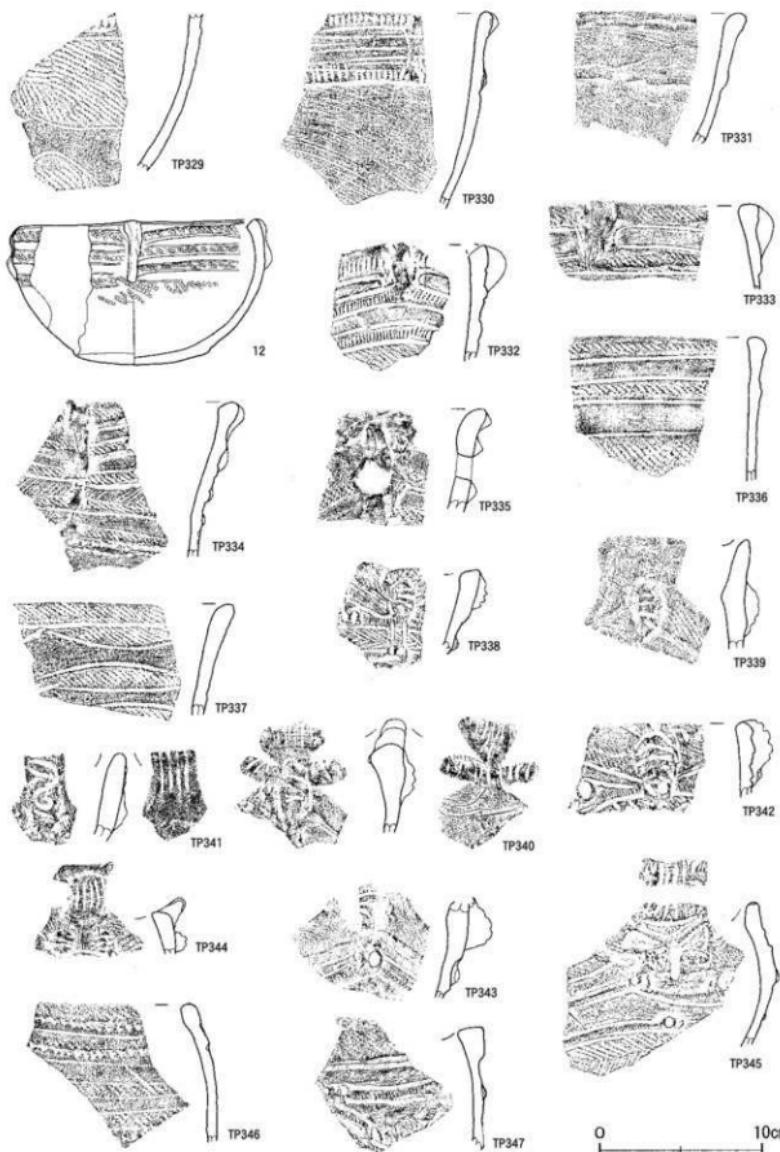
第22図 B区トレンチ出土遺物実測図(1)



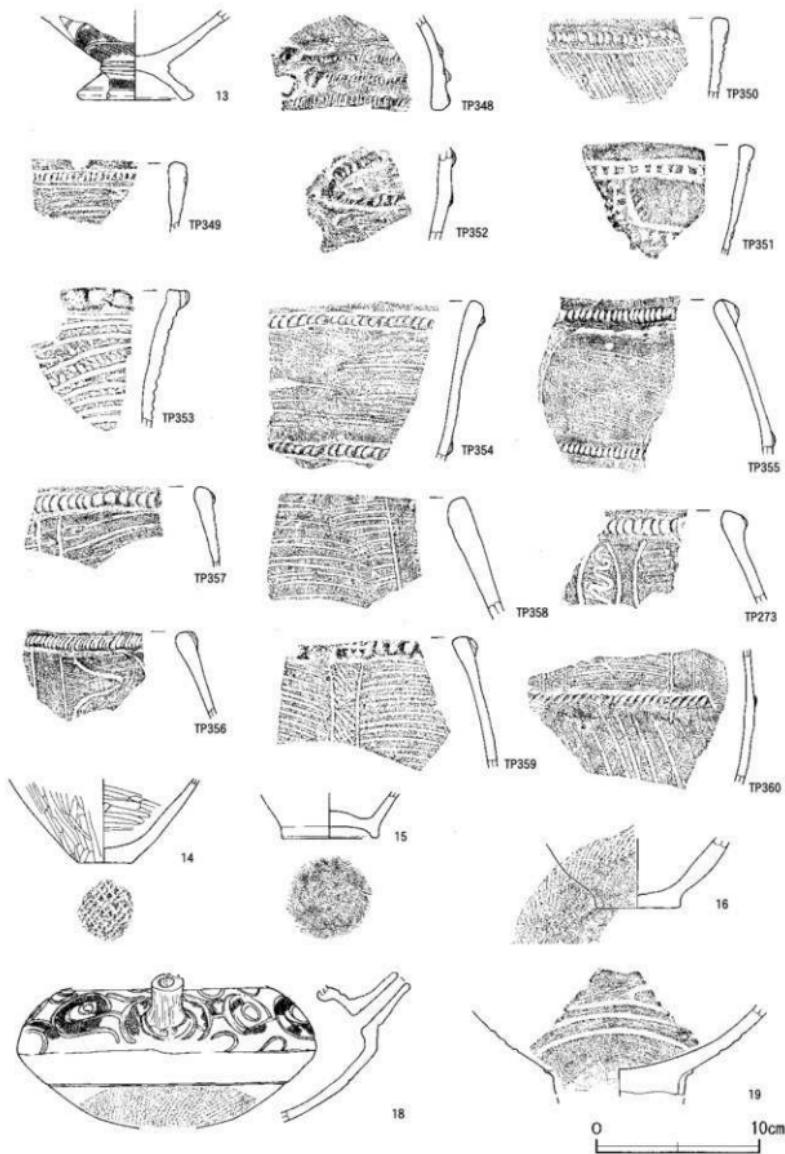
第23図 B区トレンチ出土遺物実測図(2)



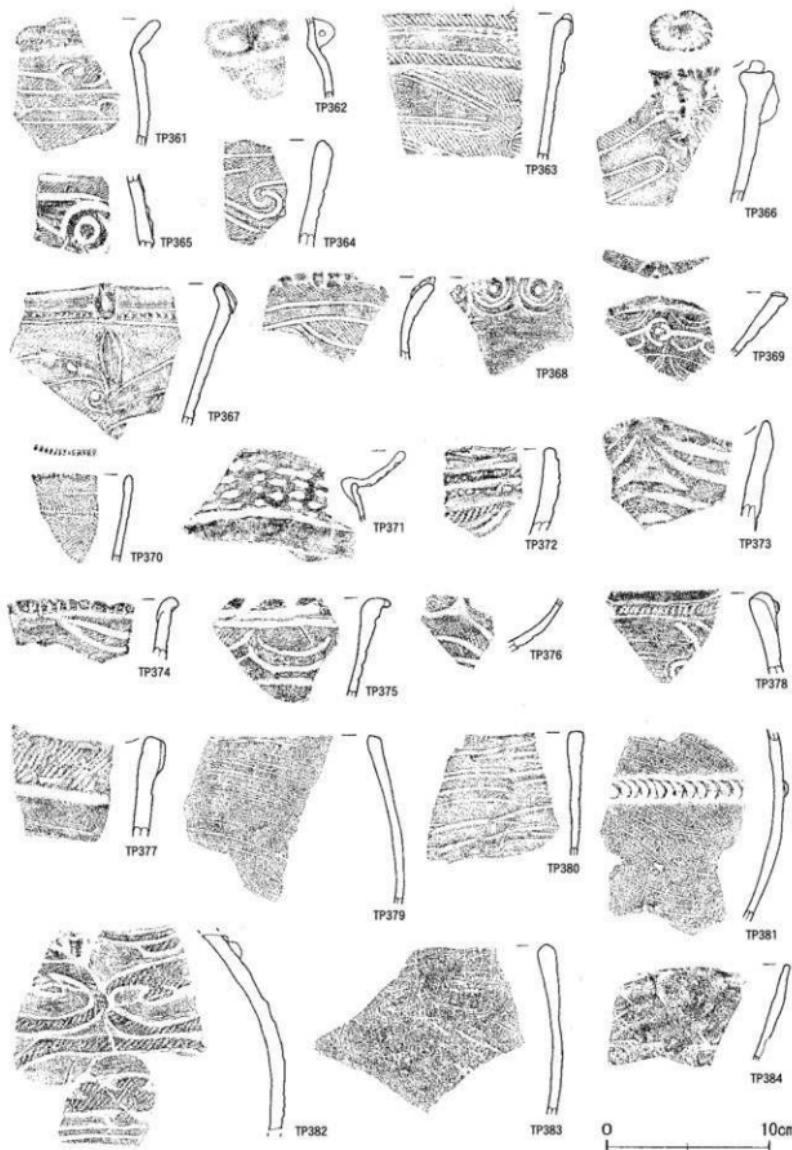
第24図 B区トレンチ出土遺物実測図(3)



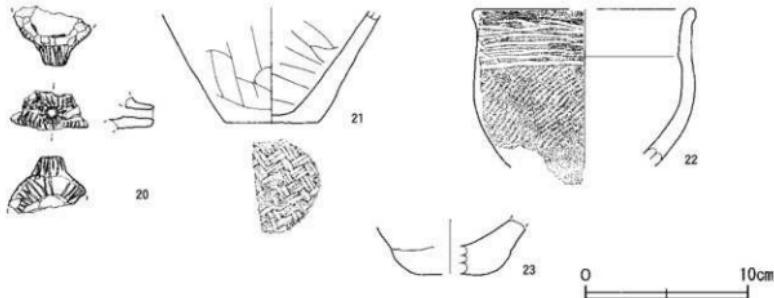
第25図 B区トレンチ出土遺物実測図(4)



第26図 B区トレンチ出土遺物実測図(5)



第27図 B区トレンチ出土遺物実測図(6)



第28図 B区トレンチ出土遺物実測図(7)

第2節 C区の遺構と遺物

C区は標高26mの台地上に位置し、北側は桜川低地へ、南側はB区の小支谷に向かって、ゆるやかに傾斜をしている。遺構確認作業によって、堅穴住居跡、土坑などが確認されたが、調査が完了したのはC区の西側部分だけであり、完了面積1,101m²である。ここでは、調査が完了した遺構と遺物について記述し、未調査部分の遺構確認状況については全体図に掲載する。

1 繩文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡3軒、陥し穴1基、土坑15基である。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第1号住居跡（第29図）

位置 調査区北部D 4 b1区、標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝、第43号土坑に掘り込まれている。第2号ピット群のP 4・P 6と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 南東部は調査区域外に延びているため、南北軸5.88m、東西軸は1.90mだけが確認された。平面形は楕円形と推測され、南北軸方向はN-38°-Eである。壁高は24~36cmで、緩やかに立ち上がっている。

床 中央部に向かってやや傾斜しているが、特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 5か所。P 1~P 5は深さ11~22cmで、本跡に伴うピットと考えられるが、明確ではない。

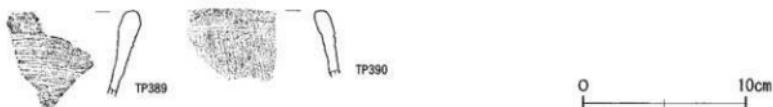
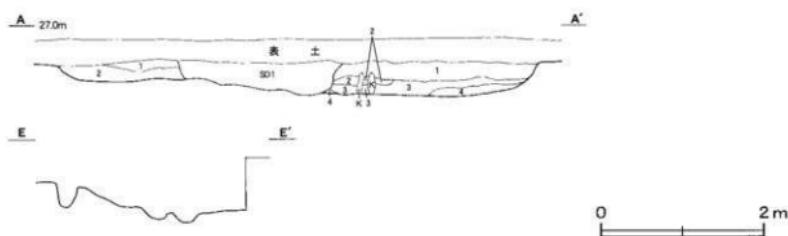
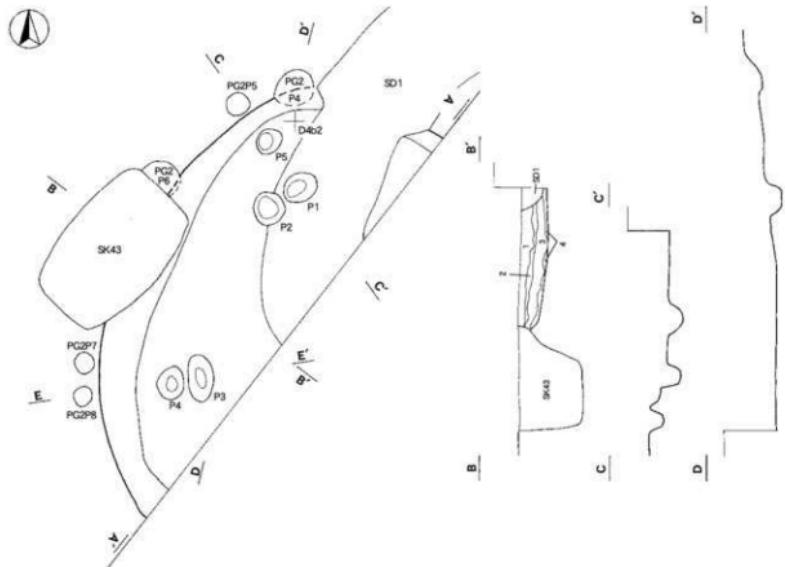
覆土 4層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人が堆積である。

土層解説

| | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1 黒 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒 色 ロームブロック少量。焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 青 暗 色 ロームブロック微量。炭化粒子微量 | 4 暗 暗 色 ロームブロック微量 |

遺物出土状況 繩文土器片117点（第III群A類4点・C類3点・C 4類49点・E 1類7点、後期細片54点）が覆土中から出土している。土器片はほとんどが細片である。

所見 時期は、C 4類土器が主体に出土していることから繩文時代後期後半と考えられる。



第29図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第29図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|-------|------|----|----------|-------|----|-----------------------|------------|------|----|
| TP385 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | にぶい褐色 | 普通 | 口縁部に陰線の貼付文・懸垂する沈線文 | 称名寺2 | 覆土中 | |
| TP386 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | にぶい褐色 | 普通 | 弧状の沈線・單態調文LRの充填施文 | 加賀利B 焼成 | 覆土中 | |
| TP387 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 明赤褐色 | 普通 | 横位の沈線・口唇部に単態調文LRの充填施文 | 加賀利B 焼成 | 覆土中 | |
| TP388 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 明麗 | 普通 | 2条の沈線・單態調文LRの充填施文 | 加賀利B 焼成 | 覆土中 | |
| TP389 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 黒褐色 | 普通 | 口縁部に弧状の条線文 | 加賀利B 焼成 | 覆土中 | |
| TP390 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 明赤褐色 | 普通 | 口縁部に陰位の条線文 | 太平洋1 相模 | 覆土中 | |

第2A号住居跡（第30・31図）

位置 調査区中央部D 3 g6区、標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2B号住居、第1号井戸、第2号溝、第88・94・95・98・99号土坑に掘り込まれている。第86号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 壁が検出されなかったため、規模及び形状は不明である。覆土の一部と土器埋設ビット、柱穴と考えられるビットが確認されたことから住居跡と判断した。柱穴の配置から平面形は円形もしくは橢円形と推測されるが、明確ではない。

床 残存部は、ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ビット 第2B号住居と含めて、51か所確認された。P1～P5は深さ51～105cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。また、P1・P4・P5からは、後期前葉の土器が出土しており、土器埋設ビット出土土器と同時期のものと考えられる。その他、P16・P20・P23・P26・P29・P30・P39・P40・P47からも後期前葉の土器が出土しており、本跡に帰属するビットの可能性があるが、明確ではない。

土器埋設ビット 北東部の床面を38cm掘り込んで、胸部下半を欠く深鉢が正位で埋設されていた。第94・95号土坑に掘り込まれており、南北径45cm、東西径58cmだけが確認されている。平面形は橢円形と推測される。

土層解説

1 暗褐色 色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 色 ロームブロック少量、燒土粒子微量

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。第2層が堆積した時点で、第88・94・95・98号土坑に掘り込まれており、これらの土坑が埋没した後に、第1層が堆積したものと考えられる。

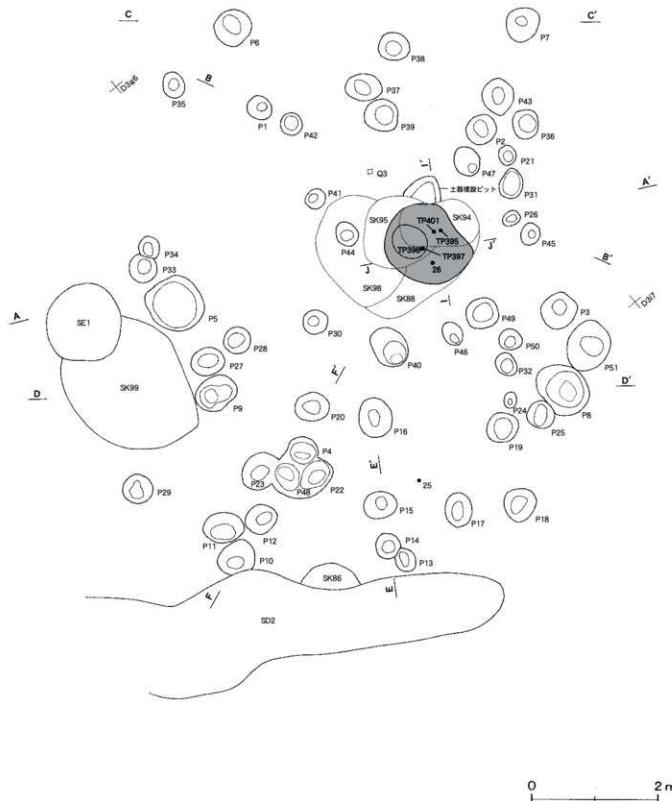
土層解説

1 黒褐色 色 ローム粒子微量 2 褐色 ローム粒子中量

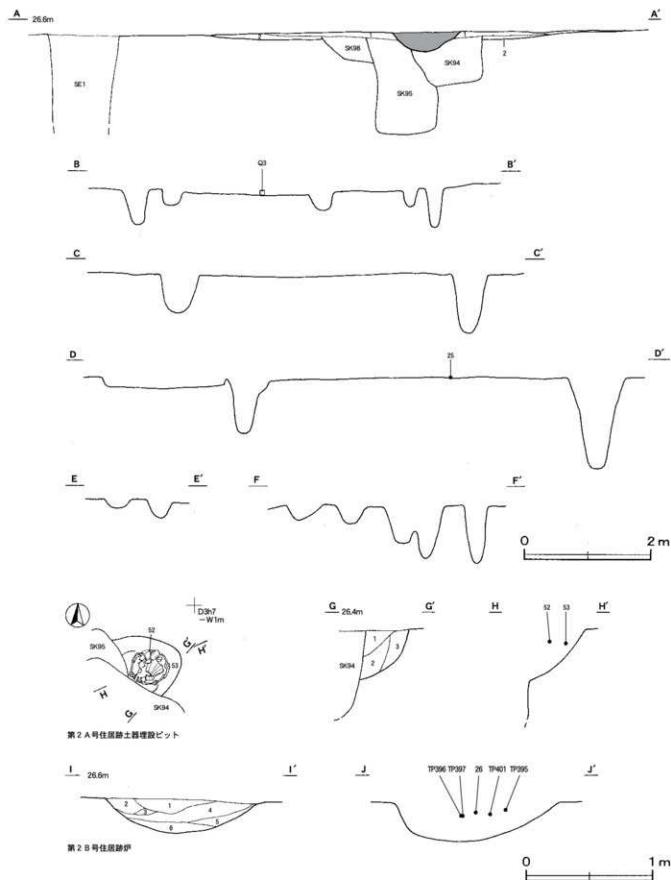
遺物出土状況 第2B号住居と含めて、縄文土器片789点（第II群1点、第III群A類225点・B類5点・C類2点・E類550点、第IV群A類4点、第V群2点）、石器3点（石皿・磨石・圓石）、剥片26点が出土している。53は土器埋設ビットから正位で出土しており、52の深鉢は53の内側から出土した破片が接合したものである。

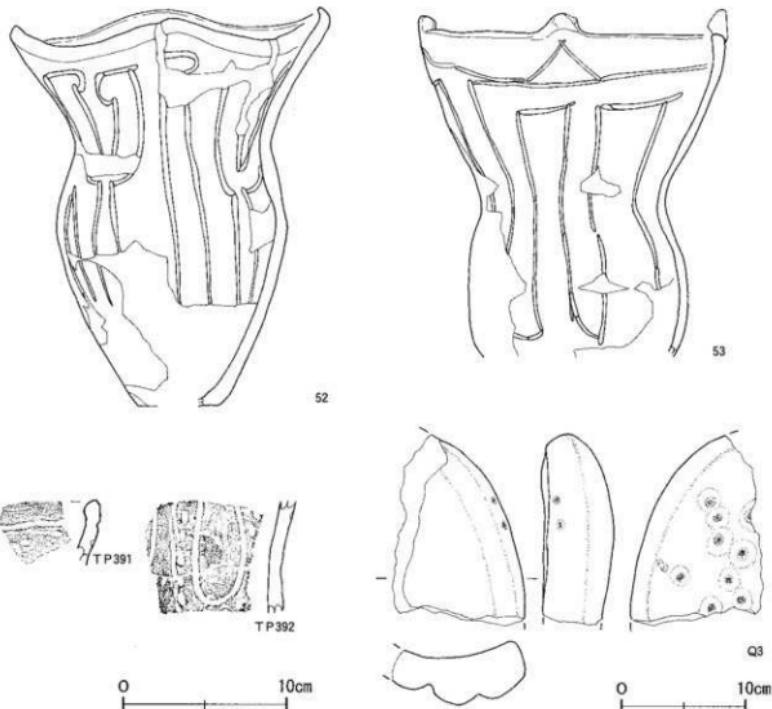
またTP391・TP392は、P5の覆土中から出土している。Q3は、床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期前葉（称名寺式期）と考えられる。



第30図 第2 A・2 B号住居跡実測図





第31図 第2 A号住居跡出土遺物実測図

第2 A号住居跡出土遺物観察表（第31図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎 土 | 色調 | 焼成 | 文 様 の 特 徴 | 時期 | 出土位置 | 備 考 |
|----|------|----|--------|--------|-------|-------------------|-------|----|------------------------|-------------|-------------|------|
| 52 | 縄文土器 | 深鉢 | [24.6] | 32.2 | [6.6] | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | にぶい褐色 | 普通 | L字・矢印状文の沈線の施文 地文は無文 | 冉毛寺2 ピット | 土器埋設 60% | PL12 |
| 53 | 縄文土器 | 深鉢 | 25.0 | (27.9) | — | 長石・石英・雲母 ・無機 | 黒褐色 | 普通 | L字状の沈線の施文 地文は 無文 | 冉毛寺2 ピット | 土器埋設 70% | PL12 |

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎 土 | 色調 | 焼成 | 文 様 の 特 徴 | 時期 | 出土位置 | 備 考 |
|-------|------|----|-------------------|-----|----|---------------|-------------|--------|-----|
| TP391 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | 黒褐色 | 普通 | 口縁部横位の沈線文 刺突文 | 冉毛寺2 ピット | P31覆土中 | |
| TP392 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | 灰褐色 | 普通 | 沈線文 刺突文 | 冉毛寺2 ピット | P31覆土中 | |

| 番号 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 石 質 | 特 徴 | 出土位置 | 備 考 |
|----|------|--------|--------|-----|---------|-----|-------------|------|------|
| Q3 | 圓石石皿 | (15.4) | (10.7) | 5.7 | (792.0) | 安山岩 | 裏に数個の深い凹みあり | 床面 | PL17 |

第2 B号住居跡（第30・32図）

位置 調査区中央部D 3 g6区、標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2 A号住居跡と第88・94・95・98号土坑の埋没後に、本跡が構築されている。第1号井戸、第2

号溝、第99号土坑に掘り込まれている。第86号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 確認面が床面であったため、壁は確認されていない。炉と柱穴の配置から住居跡と判断した。平面形は楕円形、もしくは南西側に張り出しているP10～P15を出入り口部と想定すれば柄鏡形と推測されるが、正確な規模及び形状は不明である。

炉 中央部のやや東に位置している。長径140cm、短径124cmの不整楕円形で、床面を32cm埋り込んだ地床炉である。

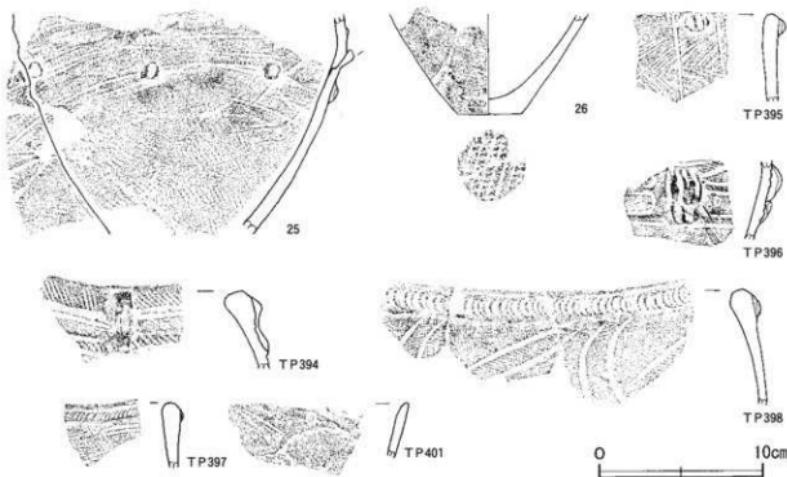
炉土層解説

| | | | | | | | |
|---|---|-----|-------------------------|---|---|----|-----------------------|
| 1 | 暗 | 褐色 | 燒土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 5 | 暗 | 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 黒 | 褐色 | ローム粒子少量、燒土粒子微量 | 6 | 黒 | 褐色 | 燒土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 | 暗 | 褐色 | 燒土ブロック・ローム粒子中量 | | | | |
| 4 | 暗 | 赤褐色 | ロームブロック・燒土ブロック中量、炭化粒子微量 | | | | |

ピット P6～P9は深さ56～143cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P10～P15は深さ14～31cmで、規模と配置から、出入り口施設に伴うピットと考えられるが、明確ではない。P11からは後期後葉の土器が出土しており、その他、P27・P33・P44からも後期後葉の土器が出土していることから、本跡に帰属するピットの可能性も考えられるが、明確ではない。

遺物出土状況 25は床面と判断した確認面から出土している。26・TP395～TP398・TP401は炉の覆土から出土しており、時期決定の指標となる土器である。

所見 本跡は、確認面が床面であり、ほぼ同位置で第2A号住居跡と重複している。本跡の覆土は認められず、土層の切り合いで第2A号住居跡との重複関係は判断できないが、出土土器に時期差があることから、住居2軒の重複と判断した。本跡の時期は、出土土器から縄文時代後期後葉（安行2式期）と考えられる。



第32図 第2B号住居跡出土遺物実測図

第2B号住居跡出土遺物観察表(第32図)

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|----|------|-----|----|--------|-----|----------|------|----|-----------------------------|-----------|------|----------|
| 25 | 縄文土器 | 口上器 | — | (13.7) | — | 長石・石英・雲母 | 褐色 | 普通 | 胸部刻目のある後部3条 貼り縁 胸部下部斜面縞文 | 平安後 中期 | 床面 | 20% PL12 |
| 26 | 縄文土器 | 深鉢 | — | (6.1) | 4.0 | 長石・石英・雲母 | 明赤褐色 | 普通 | 胸部下部無文 底部網代模 | 平安後 中期 | 伊賀土中 | 10% |

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | | | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|------|------|----|-------------------|------|----|----------------|----------|-------------|------------|------|----|
| | | | | | | 地文 | 縞文 | 貼付文 | | | |
| TP34 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | 明赤褐色 | 普通 | 帯縞文 | 貼付文 | | 平安後 中期 | 伊賀土中 | |
| TP35 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 暗赤褐色 | 普通 | 地文矢羽根状沈線 平行沈線文 | 刻目のある貼付文 | | 平安後 中期 | 伊賀土中 | |
| TP36 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 相 | 普通 | 縞文帯 | 刻目のある貼付文 | | 平安後 中期 | 伊賀土中 | |
| TP37 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・雲母 | 明赤褐色 | 普通 | 縞文帯 | 横位の条縞文 | 斜位の平行沈線文 | 後期安 行前期 | 伊賀土中 | |
| TP38 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 明赤褐色 | 普通 | 縞文帯 | 地文単節縞文 | 弧状の2条の沈線を施文 | 後期安 行前期 | 伊賀土中 | |
| TP39 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 相 | 普通 | 無文 | | | 後期安 行中期 | 伊賀土中 | |
| TP40 | 縄文土器 | 深鉢 | 相 | 無文 | | | | | 後期安 行中期 | 伊賀土中 | |

表2 縄文時代堅穴住居跡一覧表

| 番号 | 位置 | 主軸方向 | 平面形 | 規 模 (m) (長軸×短軸) | 壁高 (cm) | 床面 | 壁構 | 内 部 施 設 | | | 覆土 | 主な出土遺物 | 時期 | 備 考 (古→新) | |
|-----|--------|---------|-------|--------------------|------------|----|----|---------|-----|-----|----|--------|------------------------|--------------|------------------------------------|
| | | | | | | | | 主柱穴 | 出入口 | ピット | | | | | |
| 1 | D 4 b1 | N-38°-E | [椭円形] | (5.88)×(1.90) | 24~36 | 平坦 | - | - | - | 5 | - | 人為 | 縄文土器 | 後期 後半 | 木綿→SK3,30 SK24+PEとの 新旧關係(不明) |
| 2 A | D 3 g6 | - | [椭円形] | - | - | 平坦 | - | 5 | - | | - | - | 縄文土器・石 ・黒色・圓 ・石片 | 後期 前葉 | SK3→SK35 SK34, S1 |
| 2 B | D 3 g6 | - | [椭円形] | - | - | 平坦 | - | 4 | - | | 1 | - | 縄文土器・刺 ・片 | 後期 後葉 | SK3→SK35 SK34, S1 |

(2) 陥し穴

第1号陥し穴(SK5)(第33・34図)

位置 調査区北部C 3 j0区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.86m、短軸1.58mの隅丸長方形で、長軸方向はN-3°-Wである。深さは82cmで、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

ピット 1か所。P 1は径11cmの円形で、深さは14cm

である。逆茂木を立てた痕跡と考えられる。

覆土 9層に分層される。第1・2層はレンズ状の堆

積状況を示す自然堆積、第3~9層はブロック状の堆

積状況を示す人为堆積である。

土層解説

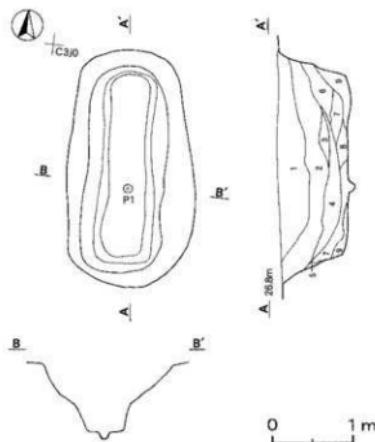
- 黒 色 ロームブロック微量
- 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 暗 褐 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 暗 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 褐 色 ローム粒子中量
- 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 褐 色 ロームブロック中量
- 褐 色 ローム粒子多量

遺物出土状況 縄文土器片38点(第III群A類13点・B

類10点・E 1類5点・E 3類10点)が覆土中から出土

している。土器片はほとんどが細片である。

所見 時期は、形状から縄文時代と考えられる。



第33図 第1号陥し穴実測図



第34図 第1号陥し穴出土遺物実測図

第1号陥し穴出土遺物観察表（第34図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|-------|------|----|----------|------|----|---------------|-----------|------|----|
| TP409 | 調文土器 | 深鉢 | 長石・石英・墨母 | 明赤褐色 | 普通 | 2条の沈線文 円形の刺突文 | 聖之内1 | 覆土中 | |
| TP410 | 調文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 明赤褐色 | 普通 | 調文帯 | 安行1 中期 | 覆土中 | |
| TP411 | 調文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 明赤褐色 | 普通 | 調文帯 沈線による区画 | 安行1 中期 | 覆土中 | |

(3) 土坑

ここでは、平面形や断面形等形状に特徴の見られる土坑と完形に近い土器や獸骨・貝等が出土しているなど出土遺物に特徴のある土坑15基について記述する。

第10号土坑（第35図）

位置 調査区北部D 3 b0区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径1.08mの円形で、深さは34cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。



第35図 第10号土坑実測図

| 土層解説 | | |
|------|---|--------------|
| 1 | 暗 | 褐色 ロームブロック少量 |
| 2 | 暗 | 褐色 ローム粒子中量 |
| 3 | 褐 | 褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 第2層からヤマトシジミ（49.4g）がブロック状にまとまって検出されている。その他の遺物は確認されなかった。

所見 本跡の埋没過程でヤマトシジミが投棄されたものと考えられる。時期は、出土土器がないため明確にできないが、調文時代と考えられる。

第18号土坑（第36図）

位置 調査区北部D 3 d0区、標高26mの台地平坦部に位置している。

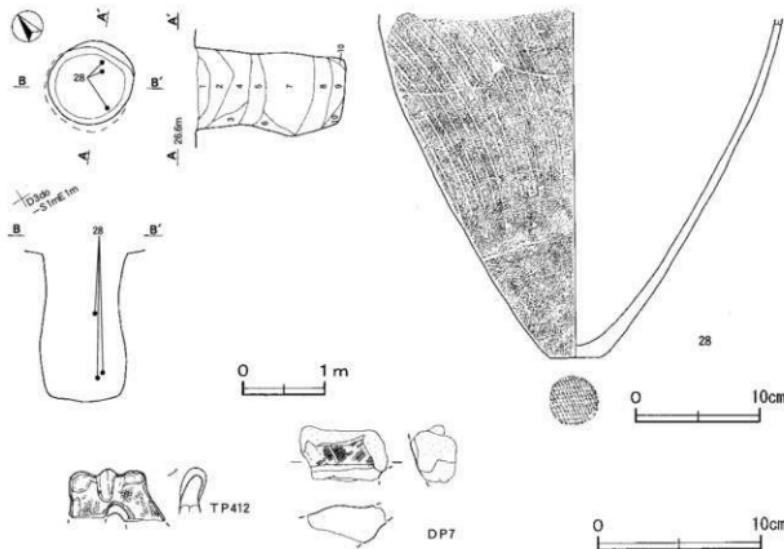
規模と形状 径1.08mの円形で、深さは184cmである。底面は平坦で、壁は直立しているが、下位から中位にかけて若干内傾している。

覆土 10層に分層される。上層は、焼土粒子を含む、やや締まった覆土である。中層から下層は、粘土ブロックや黒色土ブロックを含む、締まりの弱い覆土である。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

| 土層解説 | |
|------|-------------------------|
| 1 | 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 ロームブロック少量。焼土粒子微量 |
| 3 | にじみ黄褐色 ロームブロック中量 |
| 4 | 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 ローム粒子微量 |
| 6 | 褐色 ロームブロック中量。粘土粒子少量 |
| 7 | 暗褐色 黒色土ブロック・ローム粒子微量 |
| 8 | 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 9 | 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 10 | 暗褐色 ローム粒子中量。粘土ブロック少量 |

遺物出土状況 繩文土器片148点（第III群E1類3点・E3類145点）、土製品1点（土偶）が、覆土中層から下層にかけて出土している。28の深鉢は、覆土下層と中層から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡の廃絶後、埋め戻される過程で土器が廃棄されたと考えられる。また覆土下層と中層の土器片が接合関係にあることから、短期間に埋め戻されたものと推測される。時期は、出土土器から縄文時代後期後葉（安行1・2式期）と考えられる。



第36図 第18号土坑・出土遺物実測図

第18号土坑出土遺物観察表（第36図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|----|------|----|----|--------|-----|----------|------|----|------------------------|-----------|--------|----------|
| 28 | 縄文土器 | 深鉢 | — | (28.0) | 4.0 | 長石・石英・雲母 | にぶい橙 | 普通 | 斜位の垂繩文 単部繩文LR 底部網代板 | 安行1 粗製 | 覆土中・下層 | 40% PL12 |

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|-------|------|----|-------|-----|----|-------------------|-----------|------|----|
| TP412 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・雲母 | 灰褐色 | 普通 | 口縁部に貼付文 地紋部單面繩文LR | 安行1 精製 | 覆土中 | |

| 番号 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 胎土 | 特徴 | 出土位置 | 備考 |
|-----|----|-------|-------|-------|--------|-------|--------------------|------|----|
| DP7 | 土偶 | (3.5) | (5.4) | (2.8) | (35.2) | 長石・石英 | 沈線の施文 縄文LRの施文 木茎土偶 | 覆土中 | |

第50号土坑（第37図）

位置 調査区南部E3e3区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.24m、短径0.74mの長楕円形で、長径方向はN-59°-Eである。深さは22cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

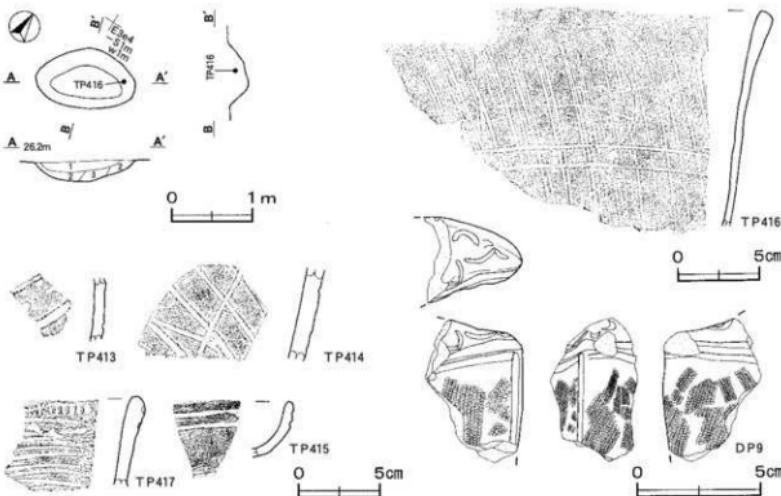
土層解説

1 埋 地 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 埋 地 色 ローム粒子・焼土粒子微量

3 埋 地 ローム粒子少量

遺物出土状況 繩文土器片48点（第III群A類17点・B類1点・C類4点・C4類25点・E3類1点）、土製品1点（土偶）が出土している。TP416は、東壁際の覆土中層から出土しており、同位置から同一個体と考えられる土器片が出土しているが、接合しないため、図示できたのは一部である。TP413・TP414は本跡の埋没過程で混入したものと考えられる。また、DP9は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期後半と考えられる。



第37図 第50号土坑・出土遺物実測図

第50号土坑出土遺物観察表（第37図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎 土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | | 時期 | 出土位置 | 備 考 |
|-------|------|----|----------|--------|----|----------------------|--|--------|-------|-------|
| | | | | | | | | | | |
| TP413 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 灰褐色 | 普通 | 2条の沈線 連続刺突の施文 | | 弥名寺 | 覆土中 | |
| TP414 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い黄褐色 | 普通 | 交叉した斜位の沈線の施文 | | 彌之内 | 覆土中 | |
| TP415 | 縄文土器 | 浅鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い赤褐色 | 普通 | 横位2条の沈線を施文 単態縄文LRの施文 | | 加曾利 | 覆土中 | |
| TP416 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 褐色 | 普通 | 継位の条線文 横位2条の沈線 | | 加曾利 | 覆土中下層 | PL.11 |
| TP417 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い赤褐色 | 普通 | 横位の条線文 | | 後期安行粗製 | 覆土中 | |

| 番号 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 胎 土 | 特 徵 | | 出土位置 | 備 考 |
|-----|----|-------|-------|-------|--------|---------|-------------------|--|------|-----|
| | | | | | | | | | | |
| DP9 | 土偶 | (5.8) | (4.0) | (3.5) | (55.6) | 長石・赤色粒子 | 沈線の施文 縄文粗の施文 木薙土偶 | | 覆土中 | |

第53号土坑（第38図）

位置 調査区の北部D 3 g8区、標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第52号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北径1.16m、東西径0.46mだけが確認されており、平面形は梢円形と推測される。円筒状に掘り込まれており、深さは200cmで、底面は平坦である。壁は直立している。

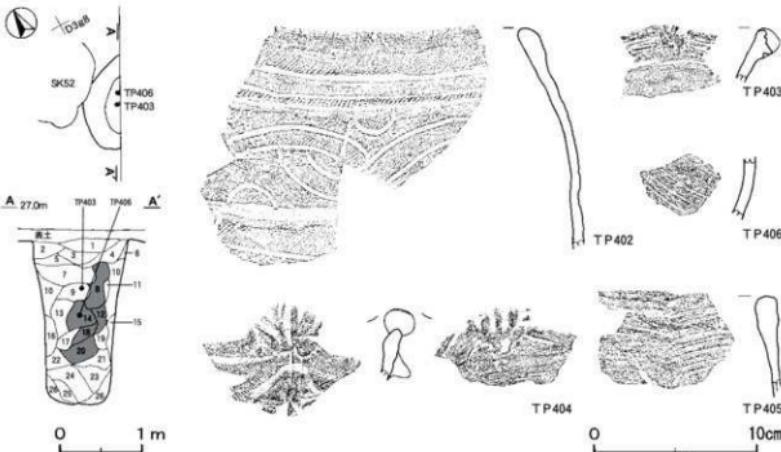
覆土 26層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

| | | | |
|----------|---------------------------|------------|----------------------------|
| 1 黒 開 色 | 燒土ブロック・ローム粒子微量 | 14 黒 開 色 | 混貝土層、炭化粒子少量、ロームブロック・燒土粒子微量 |
| 2 増 開 色 | ローム粒子・燒土粒子微量 | 15 櫻 色 | ローム粒子多量 |
| 3 黒 開 色 | 燒土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量 | 16 にら・黄櫻色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 4 黒 開 色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 17 黒 開 色 | 燒土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量 |
| 5 増 櫻 色 | 燒土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 18 黒 開 色 | 混貝土層、ロームブロック・燒土ブロック・炭化物少量 |
| 6 黒 開 色 | ローム粒子微量 | 19 增 櫻 色 | ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 增 櫻 色 | ロームブロック・炭化物中量、燒土ブロック少量 | 20 增 櫻 色 | 炭化粒子微量 |
| 8 黒 開 色 | 混貝土層、ロームブロック少量、炭化物・燒土粒子微量 | 21 黒 開 色 | 炭化物中量、ロームブロック少量 |
| 9 黒 開 色 | ローム粒子中量、炭化物少量、燒土粒子微量 | 22 增 櫻 色 | 炭化物中量、ロームブロック・燒土粒子少量 |
| 10 增 櫻 色 | ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 23 櫻 色 | ローム粒子中量、炭化物少量 |
| 11 櫻 色 | ロームブロック多量 | 24 灰 黄 櫻 色 | ロームブロック中量、炭化物少量 |
| 12 黒 櫻 色 | 混貝土層、ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 25 灰 黄 櫻 色 | 炭化物中量、ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 13 增 櫻 色 | ロームブロック中量、燒土ブロック少量、炭化粒子微量 | 26 櫻 色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 繩文土器片194点（第III群C類6点・C 4類71点・E類2点・E 3類79点、第IV群A類2点・A 5類34点）、剥片3点が出土している。第8・12・14・18・20層からは貝が検出されており、貝種はヤマトシジミ（96.1%）がほとんどで、その他ハマグリ（3.8%）・ヒタチトリメンカワニナ・オオタニシ・ヒダリマキマイマイが若干検出されている。その他、シカ・イノシシ等の歯骨片も検出されている。TP403は第9層から、TP406は第14層の混貝土層から出土している。

所見 本跡の埋没過程で貝や歯骨が投棄されたものと考えられる。出土土器は加曾利B式土器から安行3 b式土器までが出土しているが、土坑内貝層の形成時期は、TP406が伴うことから縄文時代晚期前葉と考えられる。



第38図 第53号土坑・出土遺物実測図

第53号土坑出土遺物観察表（第38図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|-------|------|----|----------------|------|----|-----------|----------------------|------------|--------|-------|
| | | | | | | 縄文帯 | 2条の沈織による入組文・甲部縄文LRの光 | | | |
| TP402 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 黒褐色 | 普通 | 縄文帯 | 2条の沈織による入組文・甲部縄文LRの光 | 加賀利 | 覆土中 | PL.11 |
| TP403 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・赤色 粒子 | 橙 | 普通 | 区画状の沈織を施文 | 貼付文 | 安行1 精製 | 覆土第9層 | |
| TP404 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 灰褐色 | 普通 | 縄文帯に貼付文 | 突起に割目の施文 | 安行2 精製 | 覆土中 | |
| TP405 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・赤色 粒子 | にぶい褐 | 普通 | 弧状の条織文 | | 後期安 行粗製 | 覆土中 | |
| TP406 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 橙 | 普通 | 斜位の条織文 | | 後期安 行粗製 | 覆土第14層 | |

第54号土坑（第39～42図）

位置 調査区中央部D 3 16区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.12m、短径1.78mの楕円形で、深さは352cmである。長径方向はN-22°-Eで、底面は皿状を呈し、中央部がさらに43cm掘り込まれている。壁は中位まで直立し、上位は外傾して立ち上がっている。

北西部に深さ98cmの円筒状の掘り込みを確認したが、土坑に付属するかどうかは不明である。

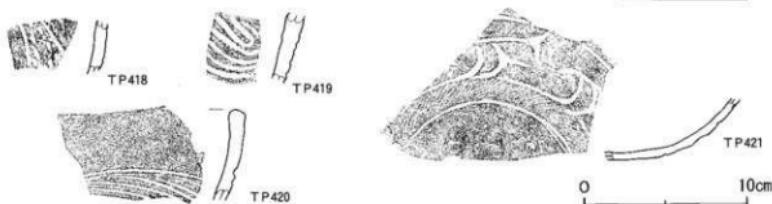
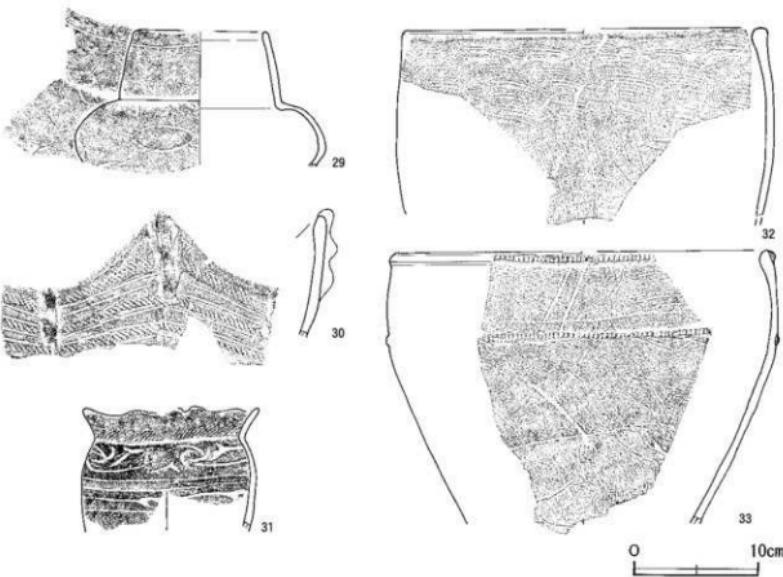
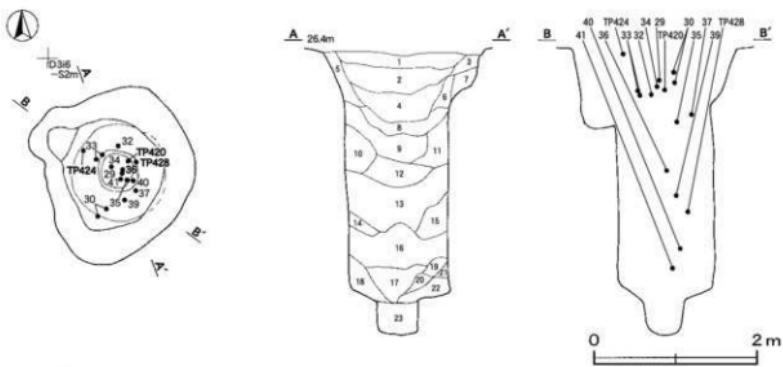
覆土 23層に分層される。上層と比較して、中層から下層は焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子が多く含む締まりの弱い覆土である。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

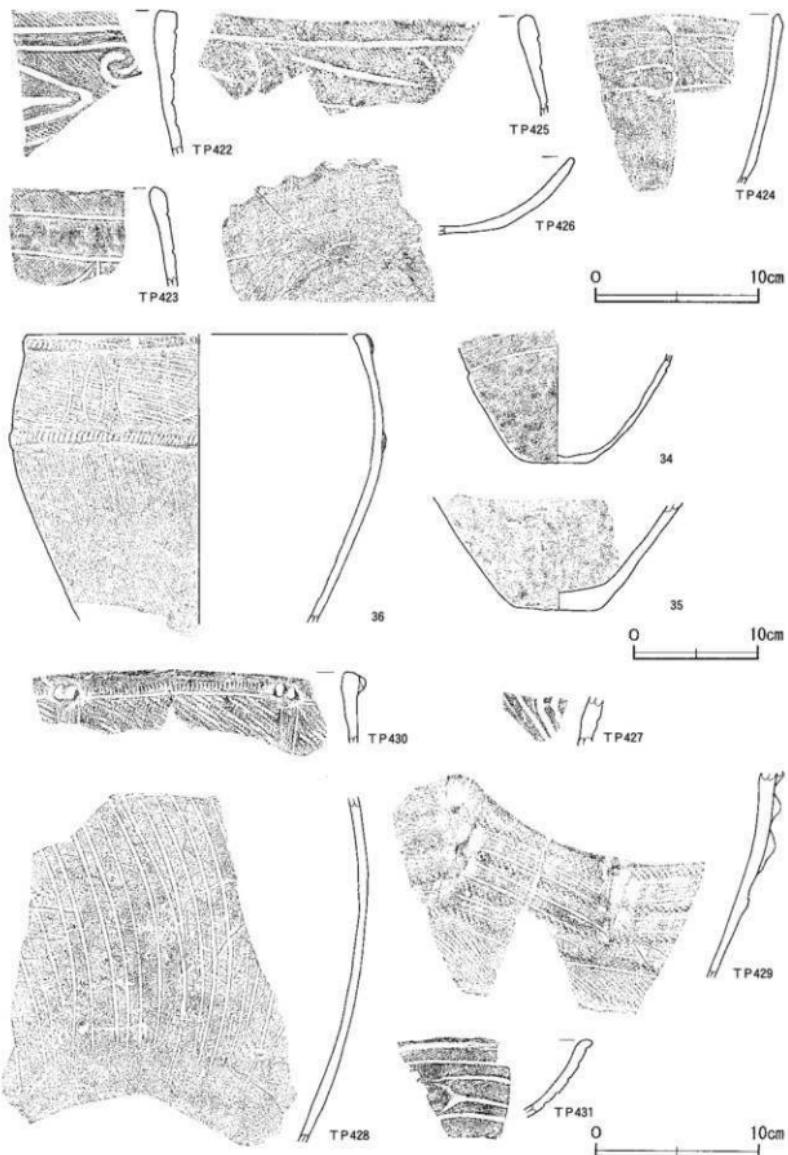
| | | | |
|--------|---------------------------|-----------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 14 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 15 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、黒色土ブロック微量 | 16 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 | 17 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 18 灰黄色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック多量 | | |
| 7 暗褐色 | ローム粒子少量 | 19 にぶい黃褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 20 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 9 暗褐色 | ローム粒子少量 | 21 灰黄褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 10 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |
| 11 暗褐色 | ローム粒子中量 | 22 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 12 暗褐色 | 炭化物・粘土ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 23 黑褐色 | 粘土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 13 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片1,753点（第III群A類2点・B類2点・C類188点・C4類119点・E類140点・E3類109点、第IV群A類22点・A5類56点、第V群233点、後期底部片3点、後期細片847点、晚期底部片12点、晚期細片20点）、石器1点（磨石）、剝片3点が出土している。その他、第1・2・8・9・12・20層からはイノシシ・シカ等の獣骨も出土している。29～34、TP418～TP426は覆土上層から出土している。接合しない破片が多く、廃棄されたような状態で出土している。35～37、TP427～TP431は覆土中層から出土している。37はほぼ完形の浅鉢であり、第8層から正位で出土している。39～41、TP432は覆土下層から出土している。40はほぼ完形の注口土器であり、第16層から斜位で出土している。TP433は、底面付近の第23層から出土している。

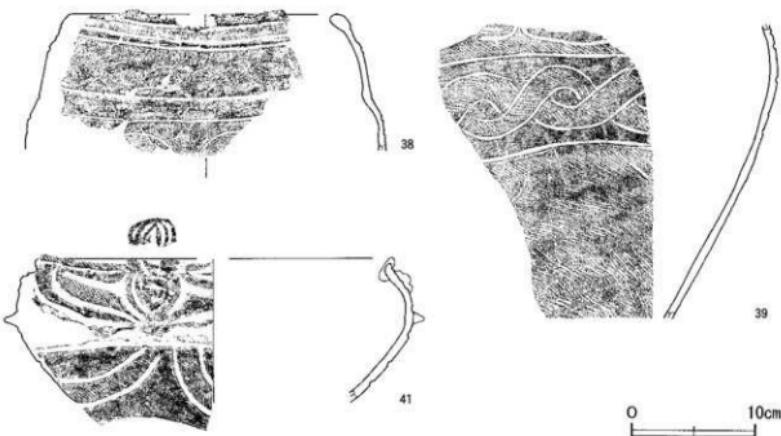
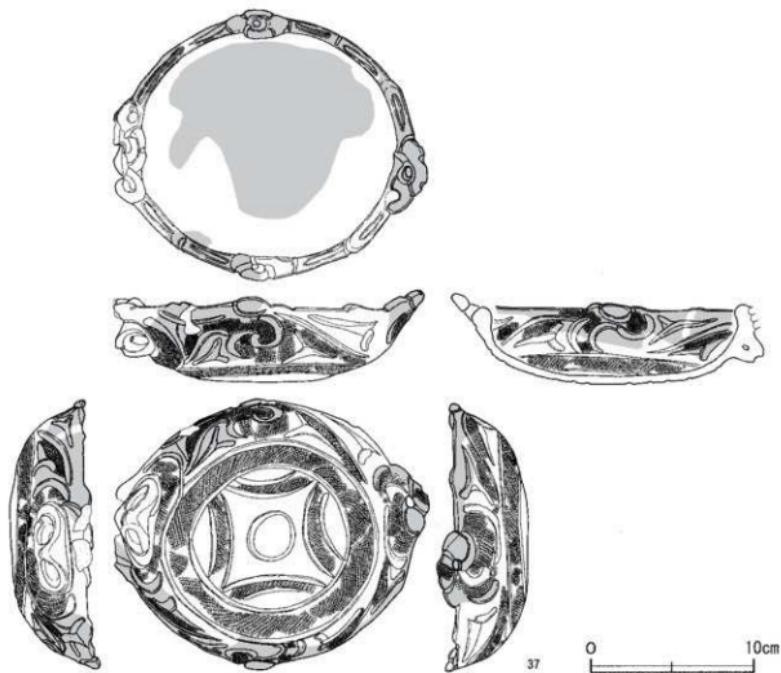
所見 覆土上層の出土土器は、後期前葉から晚期初頭のものが混在しており、本跡の埋没過程で廃棄されたものと考えられる。中層から下層にかけて37・40の完形に近い土器が出土していることから、これらは本跡に埋納された土器の可能性がある。時期は、出土土器から縄文時代後期後葉から晚期初頭と考えられる。



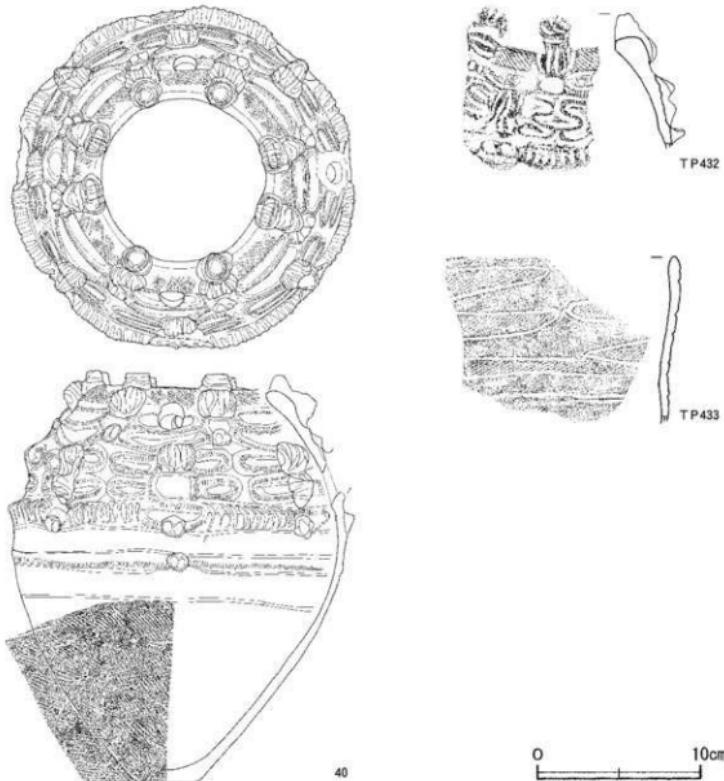
第39図 第54号土坑・出土遺物実測図



第40図 第54号土坑出土遺物実測図(1)



第41図 第54号土坑出土遺物実測図(2)



第42図 第54号土坑出土遺物実測図(3)

第54号土坑出土遺物観察表(第39~42図)

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|----|------|-----|--------|--------|-----|-------------------|--------|----------|-----------------------------------|-------------|------|----------|
| 29 | 調文土器 | 柱上器 | [10.6] | (10.7) | — | 長石・石英 | 褐灰 | 普通 | 波状の沈線の施文 地文は單 層繩文LR | 加賀利 行粗繩 | 覆土上層 | 40% PL14 |
| 30 | 調文土器 | 深鉢 | — | (10.5) | — | 長石・石英・赤色 粒子 | 褐 | 普通 | 波状口縁 調文帯 貼付文 横縞文 | 安行 行粗繩 | 覆土上層 | 10% |
| 31 | 調文土器 | 深鉢 | [14.1] | (9.9) | — | 長石・石英・雲母 | 灰褐色 | 普通 | 小波状の口縁 調文帯 三爻文 人組文 単節繩文(ほく)の施文 | 安行3a 行粗繩 | 覆土上層 | 30% PL14 |
| 32 | 調文土器 | 深鉢 | [28.4] | (15.1) | — | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | にぶい褐 | 普通 | 日印部横位の条繩文 脊部繩 文の施文 | 後期安 行粗繩 | 覆土上層 | 10% |
| 33 | 調文土器 | 深鉢 | [31.0] | (22.1) | — | 長石・石英・赤色 粒子 | 褐 | 普通 | 単縦文 単横文(ほく)の施文 直位の施文 | 後期安 行粗繩 | 覆土上層 | 30% |
| 34 | 調文土器 | 深鉢 | — | (9.8) | 5.7 | 長石・石英 | 黄灰 | 普通 | 波状2条の施文 単節繩文LR の施文 | 加賀利 行粗繩 | 覆土上層 | 20% PL14 |
| 35 | 調文土器 | 深鉢 | — | (9.0) | 6.9 | 長石・石英・雲母 | にじむ赤褐色 | 普通 | 無文 | 後期安 行粗繩 | 覆土上層 | 15% |
| 36 | 調文土器 | 深鉢 | [27.2] | (23.3) | — | 長石・石英 | にじむ黄褐色 | 普通 | 絹織文 弧状・斜位の条繩文 の施文 | 後期安 行粗繩 | 覆土中層 | 20% PL12 |
| 37 | 調文土器 | 浅鉢 | (18.3) | 5.6 | 5.9 | 長石・石英・雲母 | 黒褐色 | 普通 | 三爻文 入組文 弧繩文 单節繩文 ほくの施文 動植物形の施文 | 安行3a 行粗繩 | 覆土中層 | 90% PL14 |
| 38 | 調文土器 | 深鉢 | [22.0] | (11.1) | — | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | にぶい褐 | 機位・弧状の施文 | 後期安 行粗繩 | 覆土下層 | 10% | |
| 39 | 調文土器 | 深鉢 | — | (23.8) | — | 長石・石英・赤色 粒子 | にぶい褐 | 普通 | 2条の人組文 单節繩文の施文 | 安行1 行粗繩 | 覆土下層 | 20% |
| 40 | 調文土器 | 柱上器 | 11.1 | 25.2 | 3.2 | 長石・石英 | 褐灰 | 普通 | 絹織文 顎目をもつ貼付文 单節繩文に区画する施文 | 安行2 行粗繩 | 覆土下層 | 90% PL12 |
| 41 | 調文土器 | 浅鉢 | [28.7] | (11.7) | — | 長石・雲母・赤色 粒子 | 暗赤褐色 | 普通 | 云文文 2条の施文 单節繩 文の施文 | 安行3a 行粗繩 | 覆土下層 | 20% PL13 |

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|-------|------|----|----------------|-------------|----|-------------------------------|-------------|------|-------|
| TP418 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | に赤い黒斑 | 普通 | 沈線の施文 連続斜突の充填施文 | 称名寺 | 覆土上層 | |
| TP419 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 褐 | 普通 | 数条の沈線の施文 | 堀之内 | 覆土上層 | |
| TP420 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 褐色 | 普通 | 矢羽根状沈線文 | 加賀村 B群4号 | 覆土上層 | |
| TP421 | 縄文土器 | 浅鉢 | 長石・石英・雲母 | 灰黄褐色 | 普通 | 縄文帯 三叉・弧状の沈線の施文 単節縄文LRの充填施文 | 安行3B 精製 | 覆土上層 | PL.11 |
| TP422 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石 | 褐色 | 普通 | 地文は單節縄文RL 入組文 | 安行3B 精製 | 覆土上層 | |
| TP423 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い黒斑 | 普通 | 細密沈線文 | 安行3C 精製 | 覆土上層 | |
| TP424 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・白色 粒子 | に赤い黒斑 粒子 | 普通 | 横化り线条の沈線と部状の沈線の施文 | 安行3C 精製 | 覆土上層 | |
| TP425 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 浅黄褐色 | 普通 | 弧状・斜位の沈線文 単節縄文LRの充填施文 | 安行3D 精製 | 覆土上層 | |
| TP426 | 縄文土器 | 浅鉢 | 長石・石英 | 橙 | 普通 | V字状口縁 | 晩期 | 覆土上層 | |
| TP427 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石 | 橙 | 普通 | 数条の沈線の施文 | 堀之内 | 覆土中層 | |
| TP428 | 縄文土器 | 深鉢 | 石英 | に赤い黒斑 | 普通 | 斜位の条線文 | 加賀村 B群4号 | 覆土中層 | |
| TP429 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い黒斑 | 普通 | 4条の縄文帯 貼付文 斜位の沈線文 | 安行1 精製 | 覆土中層 | PL.11 |
| TP430 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | に赤い黒斑 | 普通 | 縄文帯 塵文單節縄文RL 貼付文 繋接する2条の沈線の施文 | 安行2 精製 | 覆土中層 | PL.11 |
| TP431 | 縄文土器 | 浅鉢 | 長石・石英 | に赤い黒斑 | 普通 | 縄文帯 三叉文 単節縄文LRの充填施文 | 安行2 精製 | 覆土中層 | |
| TP432 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 黑褐色 | 普通 | 縄文帯 刻目をもつ貼付文 M字状の細かい縦線文の施文 | 安行3D 精製 | 覆土下層 | |
| TP433 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 明赤褐色 | 普通 | 粗面状の沈線の施文 単節縄文LRの充填施文 | 安行3E 精製 | 覆土下層 | PL.11 |

第62号土坑 (第43・44図)

位置 調査区中央部D 3 j4区、標高26mの台地平垣部に位置している。

規模と形状 径1.30mの円形で、深さは172cmである。底面は平坦で、壁は直立している。

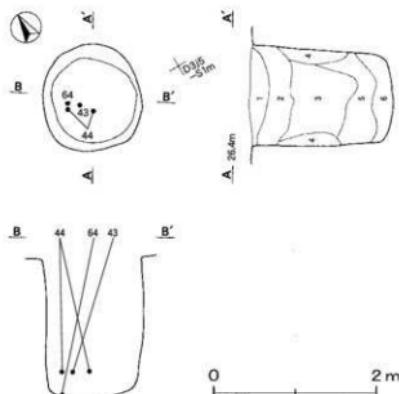
覆土 6層に分層される。上層と比較して、中層から下層は、炭化物や粘土粒子を多く含み、縮まりの弱い覆土である。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人が堆積である。

土層解説

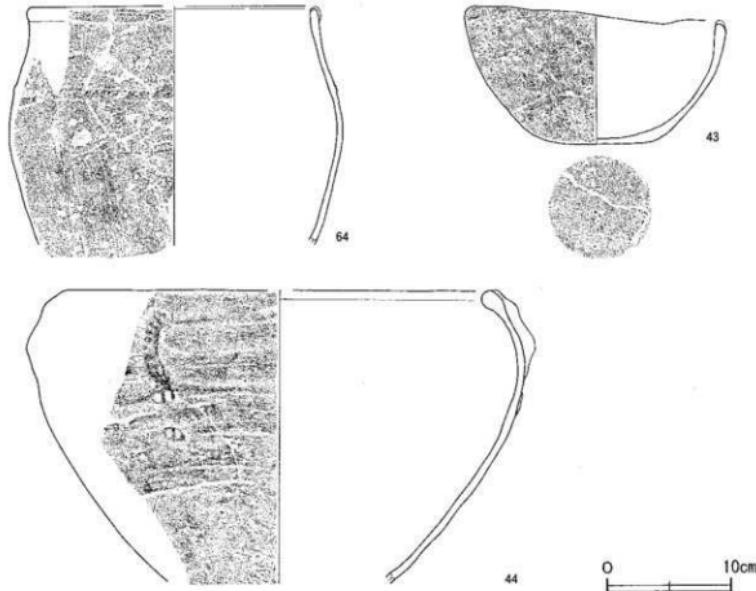
- | | | | | | | | |
|---|---|----|----------------|---|---|----|----------------------|
| 1 | 暗 | 褐色 | ローム粒子少量 | 4 | 褐 | 色 | ロームブロック中量 |
| 2 | 黒 | 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 5 | 黒 | 褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量 |
| 3 | 黒 | 褐色 | ロームブロック中量 | 6 | 暗 | 褐色 | ロームブロック・炭化物少量、粘土粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片255点(第三群A類4点・C類8点・C 4類12点・E 1類7点・E 3類28点、後期底部片4点、後期細片177点、第V群15点)が出土している。64は底面、43は正位で覆土下層から、それぞれ出土している。覆土上層では遺物の集中がみられるが、小破片が多いことから、廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期後葉(安行1・2式期)と考えられる。本跡の廃絶後、埋没過程で土器が廃棄されたと考えられる。



第43図 第62号土坑実測図



第44図 第62号土坑出土遺物実測図

第62号土坑出土遺物観察表（第44図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎 土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備 考 |
|----|------|----|---------------|--------|-----|----------------|----|----|--------------------|------------|------|-------------|
| 43 | 調文土器 | 浅鉢 | 20.0 | 11.2 | 8.5 | 長石・石英・赤色 粒子 | 褐 | 普通 | 無文 | 後期安 行粗製 | 覆土下層 | 85% PL13 |
| 44 | 調文土器 | 浅鉢 | (36.3) (23.8) | | | 長石・石英・雲母 | 褐 | 普通 | 印織文 の施文 | 後期安 行粗製 | 覆土下層 | 30% |
| 64 | 調文土器 | 深鉢 | (23.0) | (19.2) | — | 長石 | 褐 | 普通 | 印織文 底面荒れのため調整不明 | 後期安 行粗製 | 底面 | 20% 一次焼成 |

第68号土坑（第45図）

位置 調査区中央部E-3a5区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径1.28mの円形で、深さは160cmである。底面は平坦で、壁は中位まで直立し、上位は外傾して立ち上がっている。

覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

| | | | | | |
|---|-------|-----------|---|-------|------------------|
| 1 | 培 地 色 | ロームブロック少量 | 5 | 黒 地 色 | ロームブロック少量 |
| 2 | 褐 色 | ロームブロック中量 | 6 | 黒 地 色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 3 | 黑 色 | ローム粒子少量 | 7 | 黒 地 色 | ロームブロック中量 |
| 4 | 暗 褐 色 | ロームブロック中量 | | | |

遺物出土状況 調文土器片348点（第III群A類99点・C類3点・E類31点・E-3類212点、第IV群A類1点・A-5類2点）、石器1点（磨石）、剥片1点が覆土中から出土している。覆土中層から下層にかけて45、TP441・TP443～TP445、Q-4が出土しており、時期決定の指標となる土器である。TP437～TP440は本跡の埋没過程で混入したものと考えられる。また、第5層から腐朽した獸骨が出土したが、シカの頭蓋骨であることが確認された。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期から晩期前葉と考えられる。本跡の廃絶後、埋没過程で土器や獣骨が廃棄されたと考えられる。



第45図 第68号土坑・出土遺物実測図

第68号土坑出土遺物観察表（第45図）

| 番号 | 種別 | 部種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|----|------|----|----|-------|-----|----------|----|----|-------|----|------|-----|
| 45 | 縄文土器 | 鉢 | — | (7.9) | 3.6 | 長石・石英・雲母 | 褐色 | 普通 | 無文 | 後期 | 覆土下層 | 30% |

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|-------|------|----|----------------|-------|----|-----------------------|---------------|------|----|
| TP437 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 灰白 | 普通 | 沈線文 列点文 | 称名寺 | 覆土下層 | |
| TP438 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | にぶい褐色 | 普通 | 割文帯 地文は撚糸文 斜位の条線文 | 加賀利 B粗製 | 覆土中 | |
| TP439 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・雲母 | にぶい青緑 | 普通 | 地文は撚糸文 織位の条線文 | 加賀利 B粗製 | 覆土上層 | |
| TP440 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | にぶい褐色 | 普通 | 地文は單節繩文 織位の条線文 | 加賀利 B粗製 | 覆土下層 | |
| TP441 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | にぶい褐色 | 普通 | 地文帯 区画帯に斜位の沈線文 貼付文 | 安行 1 精製 | 覆土中層 | |
| TP442 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 黒褐色 | 普通 | 貼付文 単節繩文 RL | 安行 2 精製 | 覆土上層 | |
| TP443 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 褐色 | 普通 | 繩文帯に2条の弧状の沈線文 口唇部に貼付文 | 安行3b 精製 | 覆土中層 | |
| TP444 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 灰褐色 | 普通 | 斜位の条線文 | 晚期安行 粗製 | 覆土下層 | |
| TP445 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・赤色 粘土 | 褐色 | 普通 | 口縁は弧状 脇部は斜位の条線文 | 晚期安行 粗製 | 覆土中層 | |

| 番号 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 石質 | 特徴 | 出土位置 | 備考 |
|----|----|-----|-----|-----|-------|-----|-------|------|------|
| Q4 | 磨石 | 7.9 | 6.8 | 3.8 | 238.0 | 安山岩 | 側面を使用 | 覆土下層 | PL17 |

第69号土坑（第46・47図）

位置 調査区中央部E 3e4区、標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号ピット群のP26と重複しているが、新旧関係は不明である。

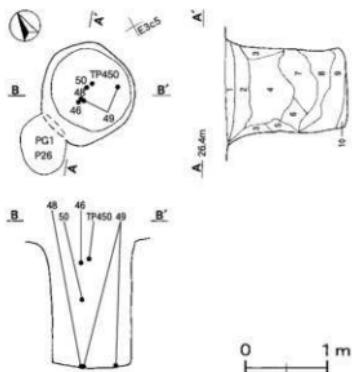
規模と形状 長径1.28m、短径1.15mの楕円形で、長径方向はN-41°-Eである。深さは152cmで、底面は平坦である。壁は直立している。

覆土 10層に分層される。各層に焼土粒子や炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

底面には、灰が薄く堆積した状況が確認されている。

土層解説

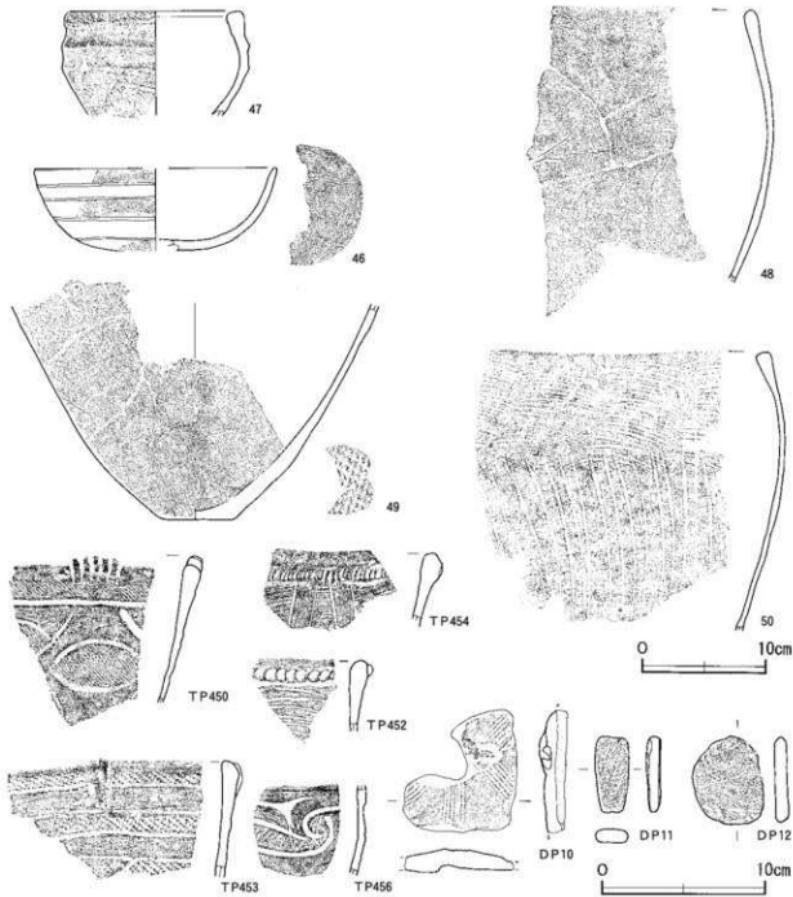
| | | | | | | | |
|---|-----|----|-----------------------|----|-----|----|-------------------|
| 1 | 暗褐色 | 褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 | 暗褐色 | 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 7 | 暗褐色 | 褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 | 褐色 | 褐色 | ロームブロック中量 | 8 | 暗褐色 | 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 | 褐色 | 褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 | 褐色 | 褐色 | ローム粒子中量 | 10 | 灰褐色 | 褐色 | 灰中量、炭化物・ローム粒子少量 |



第46図 第69号土坑実測図

遺物出土状況 縄文土器片622点（第II群B類2点、第III群A類2点・B類3点・C類64点・C4類217点・E類57点・E3類173点、第IV群A類3点・A5類100点、晚期底部片1点）、土製品3点（土器片錐・土器円盤・不明土製品）、剥片2点が出土している。覆土上層では大形破片が多量に出土している。48・49は底面から出土しており、時期決定の指標となる土器である。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期後葉から晩期前葉と考えられる。覆土上層から中層にかけて出土した土器は、時期の異なるものが混在しており、本跡の埋没過程で混入したものと考えられる。



第47図 第69号土坑出土遺物実測図

第69号土坑出土遺物観察表（第47図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 高さ | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|----|------|----|---------|---------|-----|-------------------|------|----|---------------------------|------------|------|-----------|
| 46 | 調文土器 | 浅鉢 | [19, 6] | (6, 8) | — | 長石・石英・雲母 | 赤褐色 | 普通 | 側面2条の網文帯と底部に單行網文1行の施文 | 加賀和 栗原型 | 覆土上層 | 30% Pl.13 |
| 47 | 調文土器 | 浅鉢 | 14.0 | (8, 4) | — | 長石・石英・雲母 | 褐色 | 普通 | 3条の網文帯と2条の沈線間 に單行網文を施文 | 云子型 | 覆土下層 | 50% Pl.14 |
| 48 | 調文土器 | 深鉢 | — | (22, 2) | — | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | 褐色 | 普通 | 無文 | 後期安 行網文 | 底面 | 20% |
| 49 | 調文土器 | 深鉢 | — | (17, 6) | 5.8 | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | 褐色 | 普通 | 無文 底部に網文底 | 後期安 行網文 | 底面 | 20% |
| 50 | 調文土器 | 深鉢 | — | (22, 6) | — | 長石・石英・赤色 粒子 | 明赤褐色 | 普通 | 弧状・斜位の朱羅文 | 後期安 行網文 | 覆土中層 | 10% |

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|-------|------|----|-------------------|----|----|--------------------------------|------------|------------|------|
| TP450 | 調文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | 褐色 | 普通 | 対向する弧状の沈線 単筋羅文1列の充填施文 部に貼付文 | 口唇 E3期型 | 加賀和 栗原型 | 覆土上層 |

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎 土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | | 時期 | 出土位置 | 備 考 |
|-------|------|----|----------|--------|----|------------------------|------|-------------|------|-----|
| | | | | | | 縄文土器 | 縄文土器 | | | |
| TP452 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 明赤褐色 | 普通 | 縦線文 弧状の条線文 | | 加曾利 B組製 | 覆土中 | |
| TP453 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | にぶい赤褐色 | 普通 | 縄文帯に貼付文 | | 安行 1 精製 | 覆土中 | |
| TP454 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 橙 | 普通 | 縦線文 弧状の条線文 斜位に2条の沈線の施文 | | 後期安 行B組製 | 覆土下層 | |
| TP456 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 黒褐色 | 普通 | 三叉文 入組文 単節縄文LRの充填施文 | | 安行 3b 精製 | 覆土中 | |

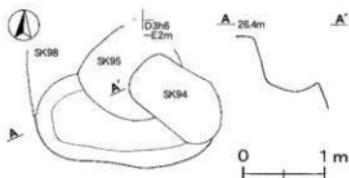
| 番号 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 胎 土 | 特 徴 | | 出土位置 | 備 考 |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|----------------|------------------------|-----------|------|-----|
| | | | | | | | 放射状に6~7条の集合沈線 竹管による刺突文 | 出土器の可塑性あり | | |
| DP10 | P9土器部 | (7.6) | (7.1) | (1.8) | 660.6 | 長石・赤色粒子 | | | 覆土中 | |
| DP11 | 土器片 | 4.7 | 2.2 | 0.9 | 10.8 | 長石・赤色粒子 | 長方形 上下に刻みあり | | 覆土中 | |
| DP12 | 土器片 | 5.4 | 4.4 | 0.9 | 24.3 | 長石・石英・赤色 粒子 | 周縁部を研磨 | | 覆土中 | |

第88号土坑（第48図）

位置 調査区中央部D 3 a6区、標高26mの台地平坦部に位置している。

確認状況 第2B号住居の床下に、本跡を含め4基の土坑と第2A号住居跡が確認されている。

重複関係 第2A号住居跡を堀り込み、第94・95・98号土坑に掘り込まれている。本跡の埋没後に第2B号住



第48図 第88号土坑実測図

居の床が構築されている。

規模と形状 南北径1.02m、東西径1.52mだけが確認されており、平面形は楕円形と推測される。深さは65cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっていている。

所見 時期は、出土土器がないため明確ではないが、重複関係から縄文時代後期と考えられる。

第93号土坑（第49図）

位置 調査区中央部E 3 a6区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.57m、短径0.50mの楕円形で、長径方向はN-49°-Eである。深さは56cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっていている。

覆土 5層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

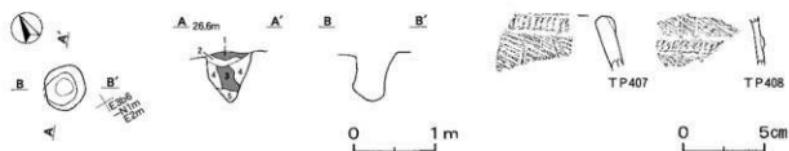
土層解説

- 1 黒褐色 泥質土層、ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 單褐色 泥質土層、ロームブロック少量

- 4 單褐色 ロームブロック中量
- 5 單褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 第1・3層からヤマトシジミ2140.0gが出土している。その他、縄文土器片10点（第III群B類1点・E 2類2点、第IV群A 5類2点、後期細片5点）が覆土中から出土している。

所見 本跡の埋没過程で貝が投棄されたものと考えられる。時期は、出土土器から縄文時代後期と考えられる。



第49図 第93号土坑・出土遺物実測図

第93号土坑出土遺物観察表（第49図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|-------|------|----|----------------|--------|----|---------------------------|------------|------|----|
| TP407 | 縄文土器 | 深鉢 | 灰石・石英・赤色 粒子 | に赤い黄褐色 | 普通 | 縄文文 地文斜位の条線文 懸垂する2条の沈縄を施文 | 神賀法 行削法 | 覆土中 | |
| TP408 | 縄文土器 | 深鉢 | 灰石・石英・赤色 粒子 | に赤い黄褐色 | 普通 | 縄文文 地文斜位の条線文 懸垂する2条の沈縄を施文 | 神賀法 行削法 | 覆土中 | |

第94号土坑（第50図）

位置 調査区中央部D 3 h6区，標高26mの台地平坦部に位置している。

確認状況 第2B号住居の床下に，本跡を含め4基の土坑と第2A号住居跡が確認されている。

重複関係 第2A号住居跡，第88・95号土坑を堀り込み，本跡の埋没後に第2B号住居の床が構築されている。

規模と形状 長径1.26m，短径0.72mの楕円長方形で，長径方向はN-53°-Wである。深さは70cmで，底面は平坦である。壁は若干外傾して立ち上がっている。

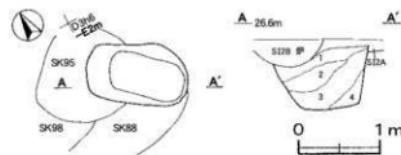
覆土 4層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 埋 細 色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 埋 細 色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
- 3 埋 細 色 ローム粒子中量，焼土粒子微量
- 4 埋 細 色 ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片1点が出土している。

所見 時期は，出土土器が細片のため明確ではないが，重複関係から縄文時代後期と考えられる。



第50図 第94号土坑実測図

第95号土坑（第51図）

位置 調査区中央部D 3 h6区，標高26mの台地平坦部に位置している。

確認状況 第2B号住居の床下に，本跡を含め4基の土坑と第2A号住居跡が確認されている。

重複関係 第2A号住居跡，第88・98号土坑を堀り込み，第94号土坑に掘り込まれている。本跡の埋没後に第2B号住居の床が構築されている。

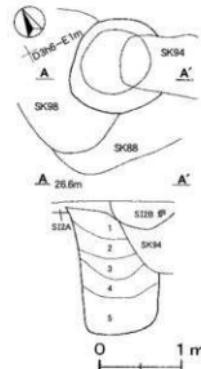
規模と形状 径1.20mの円形で，深さは152cmである。円筒状に掘り込まれており，底面は皿状で，壁は直立している。

覆土 5層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒 細 色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 黒 細 色 ロームブロック少量
- 3 黒 細 色 ロームブロック少量
- 4 埋 細 色 ローム粒子少量
- 5 埋 細 色 ロームブロック微量

所見 時期は，出土土器がないため明確ではないが，重複関係と形状から，縄文時代後期と考えられる。



第51図 第95号土坑実測図

第96号土坑（第52図）

位置 調査区中央部E 3 a5区，標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径1.20mの円形で、深さは72cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直立している。

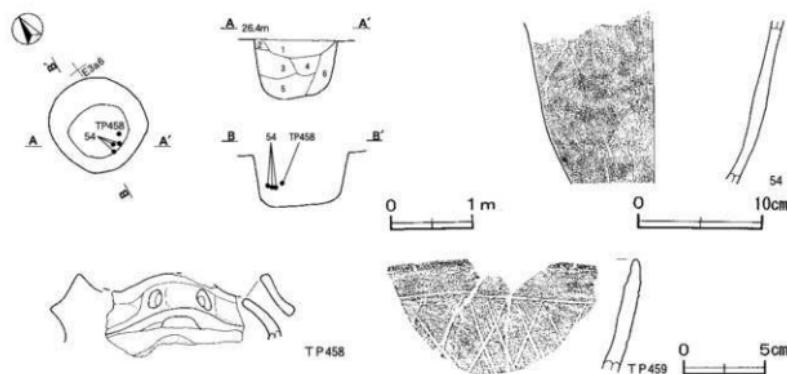
覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

| | | | | | |
|-----|----|---------------------|-----|----|----------------|
| 1 砂 | 褐色 | ロームブロック・地土粒子・炭化粒子微量 | 4 砂 | 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 砂 | 褐色 | ロームブロック中量 | 5 砂 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 砂 | 褐色 | ロームブロック少量 | 6 砂 | 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 繩文土器片31点（第II群B類1点、第III群B類1点・E3類1点、後期細片28点）が出土している。覆土中層に土器片の集中が見られるが、小破片が多い。54の深鉢は覆土中層から出土している。TP458・TP459は、本跡の埋没過程で混入したものと考えられる。

所見 本跡の埋没過程で土器が廃棄されたと考えられる。時期は、出土土器から縄文時代後期と考えられる。



第52図 第96号土坑・出土遺物実測図

第96号土坑出土遺物観察表（第52図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 胎 土 | 色調 | 焼成 | 文 様 の 特 徴 | 時期 | 出土位置 | 備 考 |
|----|------|----|----|--------|----|-------------------|----|----|-----------|------------|------|-----|
| 54 | 縄文土器 | 深鉢 | — | (13.1) | — | 長石・石英・雲母 ・赤色粒子 | 褐 | 普通 | 無文 | 後期安 淳組製 | 覆土中層 | 10% |

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎 土 | 色調 | 焼成 | 文 様 の 特 徴 | 時期 | 出土位置 | 備 考 |
|-------|------|----|-------------------|----|---------|------------|------|------|------|
| TP458 | 縄文土器 | 把手 | 長石・石英・雲母 に赤い非陶 | 普通 | 刺突をもつ把手 | 加賀利 | E4 | 覆土中層 | |
| TP459 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 褐 | 普通 | 交叉する斜位の沈線文 | 雅之内1 | 覆土中 | PL11 |

第97号土坑（第53図）

位置 調査区中央部E 3 a6区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.35m、短径1.06mの楕円形で、長径方向はN-52°-Wである。深さは63cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

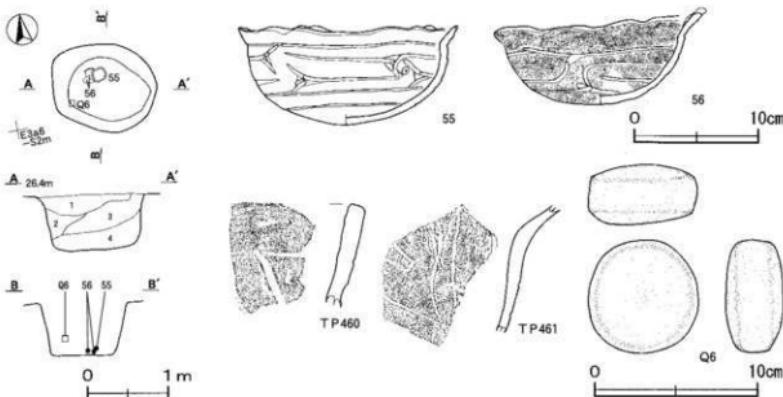
土層解説

| | | | | | |
|-----|----|----------------|-----|----|-----------|
| 1 砂 | 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 砂 | 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 砂 | 褐色 | ロームブロック少量 | 4 砂 | 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 繩文土器片23点（第III群A類18点、第IV群A1類2点・A2類2点・A3類1点）、石器1点

(磨石) が出土している。55・56は、底面に近い覆土下層から重なって出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代晩期初頭（安行3a式期）と考えられる。



第53図 第97号土坑・出土遺物実測図

第97号土坑出土遺物観察表（第53図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器画 | 底径 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|----|------|----|------|-----|----|-------------------|-------|----|--------------------|------------|------|-----------|
| 55 | 縄文土器 | 浅鉢 | 17.7 | 8.1 | — | 長石・石英・赤色 粒子・縦理 | にぶい黄褐 | 普通 | 横位の沈線文 玉抱き三叉文 | 安行3a 稍製 | 覆土下層 | 100% PL13 |
| 56 | 縄文土器 | 深鉢 | 16.8 | 7.8 | — | 長石・石英 | 橙 | 普通 | 大網三叉文 単部圓文 LKの充填施文 | 安行3a 稍製 | 覆土下層 | 95% PL13 |

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|-------|------|----|----------|-----|----|--------|-----|------|----|
| TP460 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 明赤褐 | 普通 | L字状の沈線 | 称名寺 | 覆土中 | |
| TP461 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 褐灰 | 普通 | 沈線文 | 称名寺 | 覆土中 | |

| 番号 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 石質 | 特徴 | 出土位置 | 備考 |
|----|----|-----|-----|-----|-------|-----|-------|------|----|
| Q6 | 磨石 | 7.0 | 6.8 | 3.7 | 251.0 | 安山岩 | 側面を使用 | 覆土中層 | |

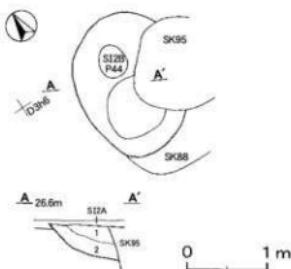
第98号土坑（第54図）

位置 調査区中央部D 3h6区、標高26mの台地平坦部に位置している。

確認状況 第2B号住居の床下に、本跡を含め4基の土坑と第2A号住居跡が確認されている。

重複関係 第2A号住居跡、第88号土坑を掘り込み、第95号土坑、第2B号住居のP44に掘り込まれている。本跡の埋没後に第2B号住居の床が構築されている。

規模と形状 長径1.72m、短径0.70mだけが確認されており、平面形は梢円形で、長径方向はN-14°-Eである。深さは36cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。



第54図 第98号土坑実測図

覆土 2層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ローム粒子中量

所見 時期は、出土土器がないため明確ではないが、重複関係から、縄文時代後期と考えられる。

表3 縄文時代土坑一覧表

| 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規模 | | | 壁面 | 底面 | 覆土 | 主な出土遺物 | 備考 重複関係(古→新) |
|----|--------|---------|-------|-----------------|--------|-----|----|----|-------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| | | | | 長径(cm)×短径(cm) | 深さ(cm) | | | | | | |
| 10 | D 3 b0 | — | 円形 | — | 1.08 | 34 | 外傾 | 平坦 | 人為 | ヤマトシジミ | |
| 18 | D 3 d0 | — | 円形 | — | 1.08 | 184 | 直立 | 平坦 | 人為 | 縄文土器・土偶 | |
| 50 | E 3 e5 | N-59°-E | 長椭円形 | 1.24 × 0.74 | 22 | 緩斜 | 皿状 | 人為 | 縄文土器・土偶 | | |
| 53 | D 3 g8 | — | 【椭円形】 | (1.16) × (0.46) | 200 | 直立 | 平坦 | 人為 | ヤマトシジミ・縄文土器・剣片 | 本跡→SK52 | |
| 54 | D 3 i6 | N-22°-E | 椭円形 | 2.12 × 1.78 | 352 | 直立 | 皿状 | 人為 | 縄文土器・磨石・剣片・獸骨 | | |
| 62 | D 3 j4 | — | 円形 | — | 1.30 | 172 | 直立 | 平坦 | 人為 | 縄文土器 | |
| 68 | E 3 a5 | — | 円形 | — | 1.28 | 160 | 直立 | 平坦 | 人為 | 縄文土器・磨石・利刀・鹿骨(頭蓋骨) | |
| 69 | E 3 c4 | N-41°-E | 椭円形 | 1.28 × 1.15 | 152 | 直立 | 平坦 | 人為 | 縄文土器・土器片疊・土器円盤・利刀 | PGH26との新旧関係不明 | |
| 88 | D 3 h6 | — | 【椭円形】 | (1.52) × (1.02) | 65 | 外傾 | 平坦 | — | — | S12A→本跡→SK98→SK95→SK94→S12B | |
| 93 | E 3 e6 | N-49°-E | 椭円形 | 0.57 × 0.50 | 56 | 外傾 | 皿状 | 人為 | ヤマトシジミ・縄文土器 | | |
| 94 | D 3 h6 | N-53°-W | 調丸長方形 | 1.26 × 0.72 | 70 | 直立 | 平坦 | 人為 | 縄文土器 | S12A→SK88→SK95→本跡→S12B | |
| 95 | D 3 h6 | — | 円形 | — | 1.20 | 152 | 直立 | 皿状 | 人為 | — | S12A→SK88→SK95→本跡→SK94→S12B |
| 96 | E 3 a5 | — | 円形 | — | 1.20 | 72 | 直立 | 平坦 | 人為 | 縄文土器 | |
| 97 | E 3 a6 | N-52°-W | 椭円形 | 1.35 × 1.06 | 63 | 外傾 | 平坦 | 人為 | 縄文土器・磨石 | | |
| 98 | D 3 h6 | N-14°-E | 【椭円形】 | 1.72 × (0.70) | 36 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | — | S12A→SK88→本跡→SK95→S12B | |

(4) 遺構出土遺物 (第55~57図, PL13)

縄文土器片14,365点が出土している。縄文時代前期から晩期前半の土器が確認されており、主体となるのは、後期後葉の安行1・2式土器、晩期前葉の安行3a・3b式土器である。精製・粗製土器はほぼ全々である。また、TP番号についている遺物の説明は、数字番号のみの表記とする。

C区出土土器の点数及び重量

| 時期 | 前 期 | | | | 中 期 | | | | 後 期 | | | |
|--------|------|------|-------|-----|-----|------|-----|------|-------|------|------|------|
| | | | | | | | | | 称名寺式 | | 堀之内式 | |
| | 土器型式 | | 粗・精の別 | | 粗 | | 精 | | 加曾利B式 | | 精 製 | |
| 部位 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 |
| 出土数 | 4 | 16 | 1 | 35 | 22 | 42 | 23 | 79 | 36 | 40 | 71 | 131 |
| 重量(kg) | 0.03 | 0.24 | 0.01 | 1.4 | 6.9 | 1.67 | 1.8 | 2.12 | 1.32 | 1.98 | 1.35 | 2.82 |

| 時期 | 後 期 | | | | | | | |
|--------|------|------|------|------|--------|--------|--------|------|
| | 曾谷式 | | | | 安行1・2式 | | | |
| | 精 製 | | 粗 製 | | 精 製 | | 粗 製 | |
| 部位 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 |
| 出土数 | 11 | 32 | 1 | 8 | 166 | 194 | 117 | 54 |
| 重量(kg) | 0.12 | 0.39 | 0.02 | 0.24 | 4.57 | 1.77 | 4.78 | 2.53 |
| | | | | | 7.65 | 100.85 | 138.56 | |

| 時期 | 後 期 | | | | | | | |
|--------|----------|-----|------|------|------|-------|-------|------|
| | 安行3a～3d式 | | | | 前浦式 | | | |
| | 精 製 | | 粗 製 | | 精 製 | | 粗 製 | |
| 部位 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 |
| 出土数 | 125 | 149 | 64 | 33 | 4 | 10 | 2 | 53 |
| 重量(kg) | 3.76 | 2.2 | 3.14 | 1.79 | 0.02 | 0.16 | 0.02 | 1.03 |
| | | | | | 6.55 | 27.76 | 46.43 | |

第Ⅰ群 前期の土器群

A類 黒浜式 462・464は胎土に纖維を含む。462は単節縄文 RL, 464は単節縄文LRとRLの羽状縄文が施文されている。

第Ⅲ群 後期の土器群

A類 称名寺式 465・466は称名寺1式である。L字文が施文され、磨消縄文がみられる。467・468・470・472は称名寺2式で、沈線区画文を施し、470にはJ字文が施されている。

B類 堀之内式 473・474・476は堀之内1式である。473は口縁部に懸垂する隆線、胴部に交叉する斜位の沈線が施文される。474は地文が単節縄文LR、数条の沈線が施文されている。476は交叉する斜位の沈線が施文されている。477は堀之内2式で、磨消縄文（単節縄文LR）で2条の沈線が施文されている。

C類 加曾利B式

C1類 加曾利B1式 P57, 479・480である。P57は横位に数条の沈線が施文される。479・480は地文が単節縄文LRで、横位の沈線に交叉する蛇行沈線文などがみられる。

C2類 加曾利B2式 481である。地文は斜位の条線文で、頭部に横位2条の沈線が施文されている。

C3類 加曾利B3式 482～484である。口唇部に連続刺突あるいは刻文帯を有し、弧線あるいは連弧文が描かれている。482・484は沈線による波状区画がみられる。

C4類 加曾利B式の粗製土器 485～487である。485は口辺部に刻目と縦位の条線文、紐線文が施文されている。486は紐線文がみられ、地文が撚糸文で斜位の条線文が施文されている。487は地文が単節縄文RLで斜位の沈線が施文されている。

E類 安行1・2式

E1類 安行1式 489～492である。3条の縄文帯あるいは刻文帯に無文の貼付がみられる。492は波状口縁に円孔が認められる。

E2類 安行2式 P59, 493～495である。縄文帯と刻目のある貼付文をもつものが多い。493は連続刺突文が沿った縄文帯がみられる。494は刻目のある突起を有し、P59は異形台付土器である。

E3類 安行1・2式の粗製土器 496は連続刺突が施文され、弧状に条線文が施文されている。

第IV群 晩期の土器群

A類 安行3a～3d式

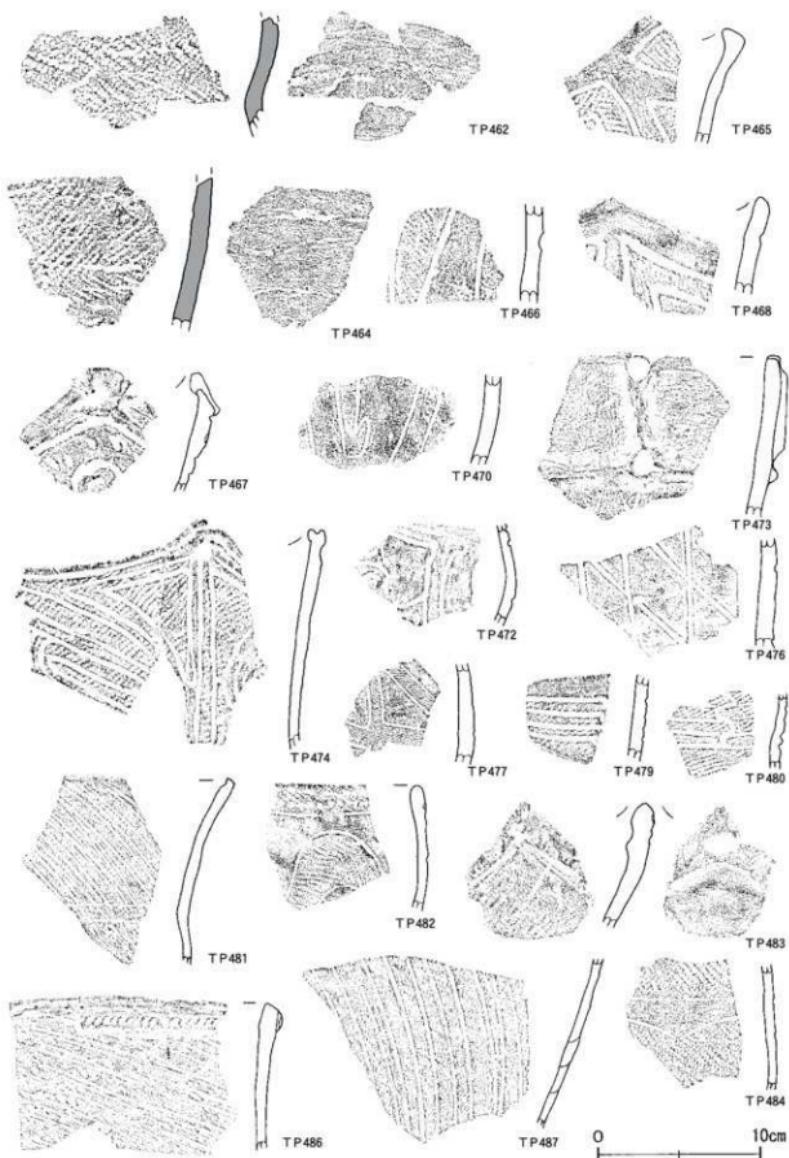
A1類 安行3a式 P63, 497～499である。497～499は三叉文がみられ、P63は注口土器の注口部である。

A2類 安行3b式 P58, 500～504である。500・502は入組文、501は内面に3条の沈線、口唇部に貼付文がみられる。503は細密沈線文、504は弧線状の文様が施され、どちらも「姥山式」である。P58は入組三叉文をもつ浅鉢である。

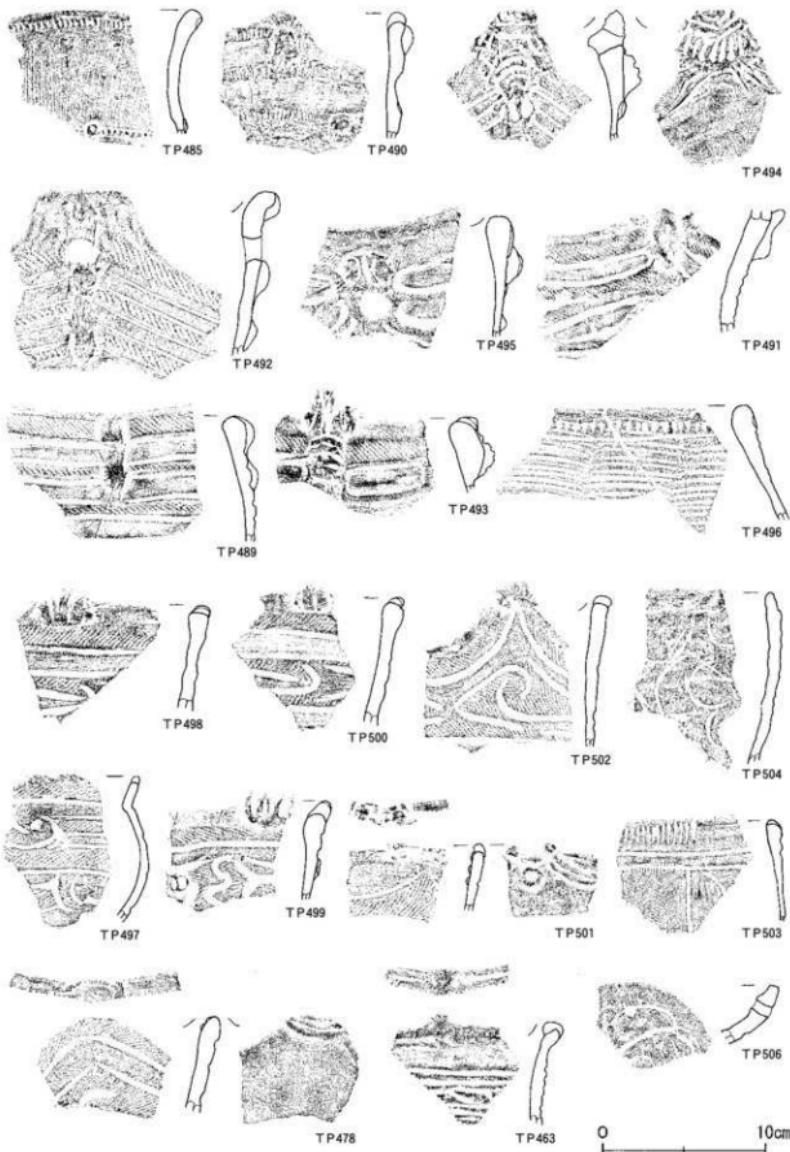
A3類 安行3c式 P60, 478・505～507である。478は口縁部に貼付文、505は沈線文と連続刺突文の充填施文が施されている。506は沈線文と円孔が認められる。507は沈線による区画文、P60は底部に沈線による文様が施されたミニチュア土器である。463は大洞C2式の蓋である。

第V群 その他の土器群

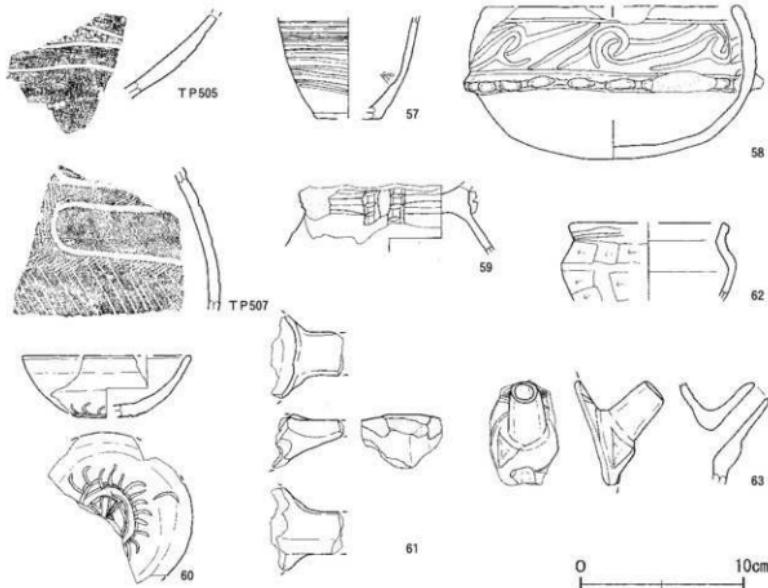
P61は把手、P62はミニチュア土器である。



第55図 C区遺構外出土遺物実測図(1)



第56図 C区遺構外出土遺物実測図(2)



第57図 C区遺構外出土遺物実測図(3)

2 その他の遺構と遺物

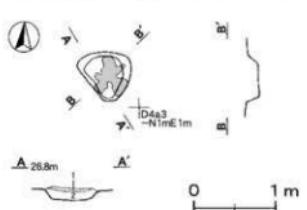
焼土遺構 1か所、井戸跡 1基、溝跡 3条、土坑 78基、ピット群 2か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 焼土遺構

第1号焼土遺構 (第58図)

位置 調査区北部C4 j3区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径 0.68m、短径 0.58m の不整椭円形で、長径方向は N-69°-Wである。深さは13cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。底面や壁に火を受けて赤変硬化した痕跡は確認されなかった。



覆土 2層に分層される。ロームブロックや焼土ブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 埋赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 埋褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量

所見 時期は、出土土器がないため不明である。本跡の周間にピットや硬化面が検出されなかつたことから、住居に伴う炉や屋外炉ではないと判断し、焼土遺構とした。

第58図 第1号焼土遺構実測図

(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第59図)

位置 調査区中央部D 3 g5区、標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2 A・2 B号住居跡、第99号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 径1.23mの円形で、円筒状に掘り込まれている。確認面から218cm掘り下げた時点で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

覆土 9層に分層される。各層に粘土ブロックやロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す入為堆積である。

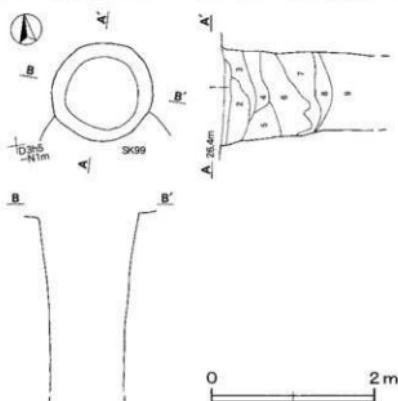
土層解説

- 1 黒 開 色 ロームブロック微量
- 2 黒 開 色 ロームブロック・炭化物・粘土ブロック微量
- 3 黒 開 色 ロームブロック・粘土粒子少量
- 4 黒 開 色 粘土ブロック・ローム粒子微量
- 5 増 開 色 粘土ブロック少量、ローム粒子微量
- 6 増 開 色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量
- 7 黒 開 色 ローム粒子少量、粘土ブロック微量
- 8 黒 開 色 ロームブロック・粘土ブロック微量
- 9 黒 開 色 ロームブロック少量、粘土ブロック微量

遺物出土状況 繩文土器片123点が出土している。

ほとんどが細片で、破断面が摩滅していることから流れ込んだものと考えられる。

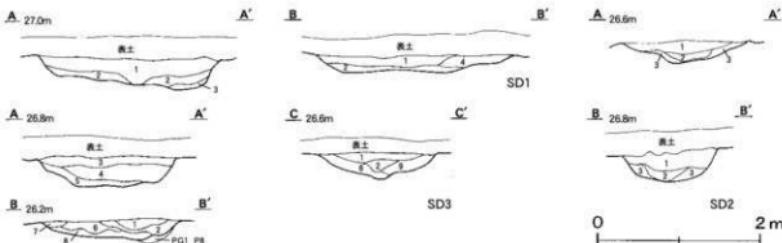
所見 形状から井戸と判断した。時期は不明である。



第59図 第1号井戸跡実測図

(3) 溝跡 (第60図・付図)

ここでは、時期及び性格が不明な溝跡3条について、実測図と一覧表で掲載する。



第60図 第1～3号溝跡実測図

第1号溝跡土層解説

- | | |
|---------------------------|-------------------|
| 1 黒 開 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒 開 色 ロームブロック微量 |
| 2 黒 開 色 ローム粒子少量 | 4 黒 開 色 ローム粒子微量 |

第2号溝跡土層解説

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1 黒 開 色 ローム粒子微量 | 3 黒 開 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒 開 色 ローム粒子・焼土粒子微量 | |

第3号溝跡土層解説

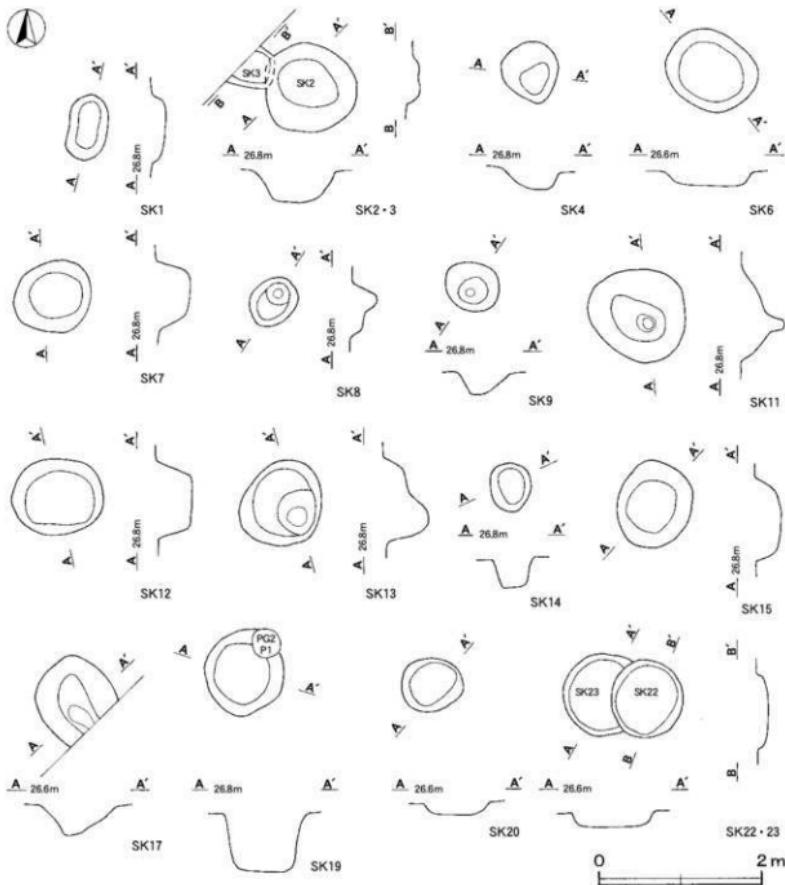
- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 黒 開 色 ローム粒子少量 | 6 黒 開 色 ローム粒子微量 |
| 2 黒 開 色 ローム粒子少量 | 7 黒 開 色 ロームブロック中量 |
| 3 黒 開 色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 8 増 開 色 ロームブロック多量 |
| 4 黒 開 色 ロームブロック少量 | 9 増 開 色 ロームブロック中量 |
| 5 暗 開 色 ロームブロック中量 | |

表4 時期不明溝跡一覧表

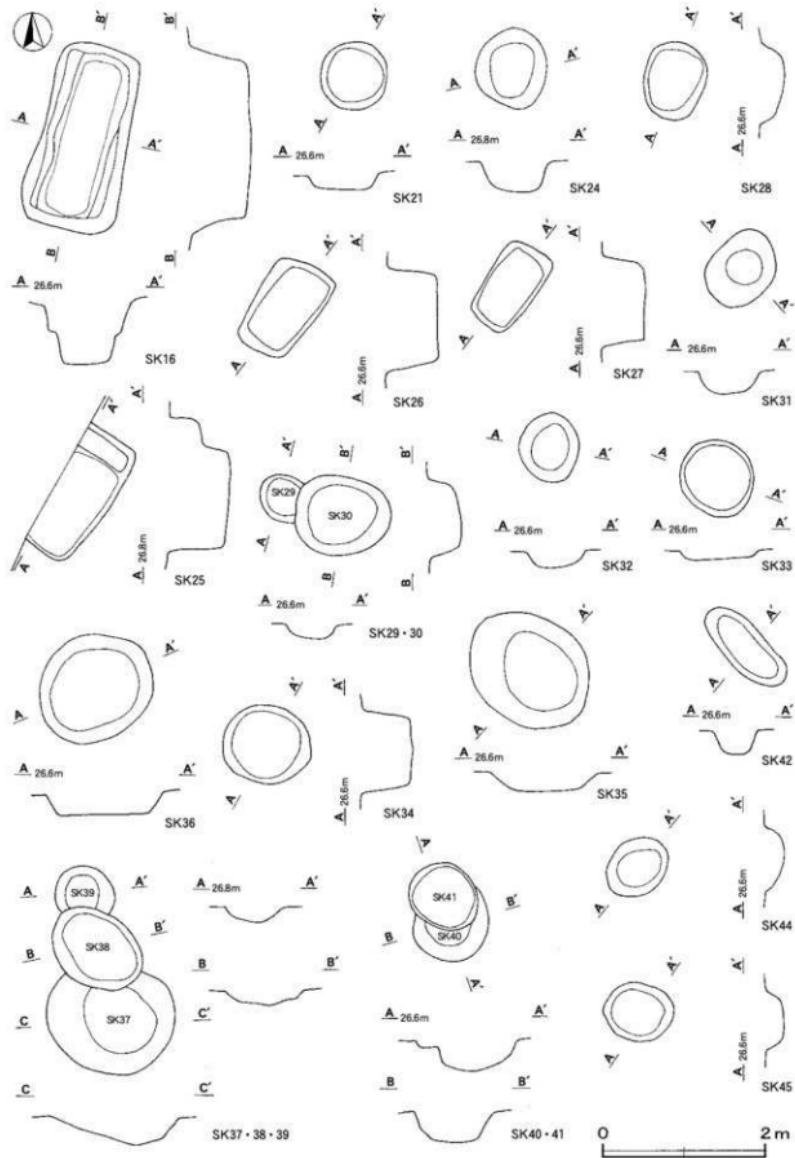
| 番号 | 位置 | 方向 | 形状 | 規 模 | | | 壁面 | 底面 | 覆土 | 主な出土遺物 | 備考 重複関係 (古→新) |
|----|-------------|--------------------|-----|---------|-----------|-----------|-------|----------|----|--------------------|---------------------|
| | | | | 長さ(m) | 上幅(m) | 下幅(m) | | | | | |
| 1 | D 4a2~D 4b1 | N-40°-E | 曲線状 | (6.30) | 1.28~2.42 | 0.68~1.34 | 20~39 | 外傾 直傾 | 自然 | 縄文土器 | SI 1~本跡 |
| 2 | D 3b4~D 3b5 | N-53°-W | 直線状 | (8.48) | 1.00~1.44 | 0.22~0.52 | 29~36 | 外傾 直傾 | 自然 | 縄文土器、土師器、土師質土器、陶磁器 | SI 2 A~2b、SK8~9~本跡 |
| 3 | D 3b3~E 2b6 | N-29°-E N-52°-W | L字状 | (43.38) | 0.24~1.86 | 0.12~0.42 | 30~36 | 外傾 直傾 | 人為 | 縄文土器 | PG 1 P 8~本跡 |

(4) 土坑

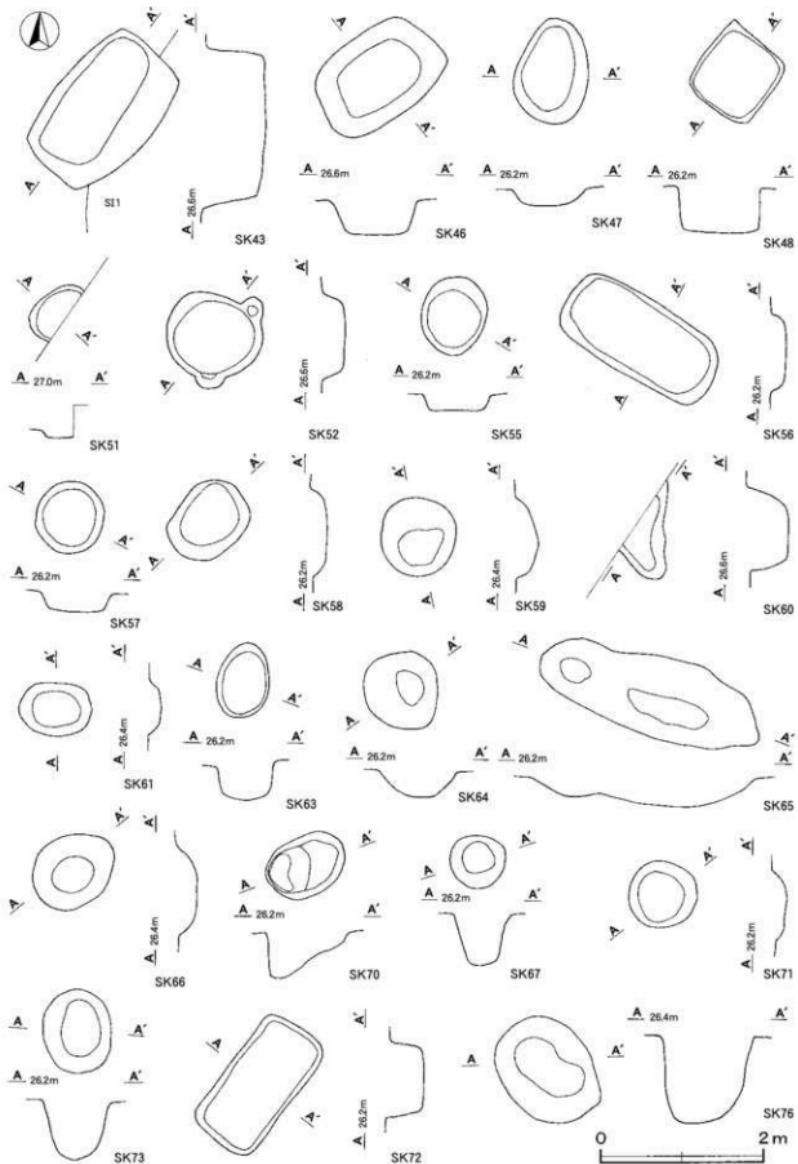
ここでは、時期及び性格が不明な78基の土坑について実測図（第61～64図）及び一覧表を掲載する。



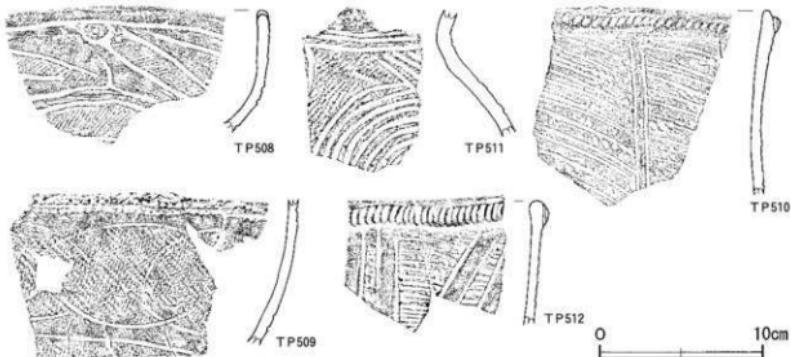
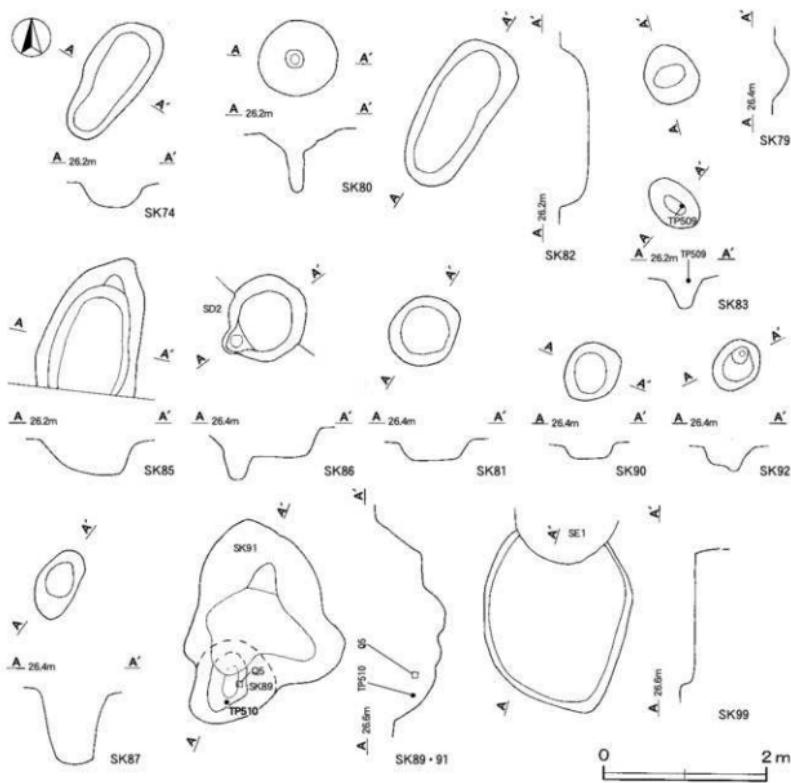
第61図 時期不明土坑実測図(1)



第62図 時期不明土坑実測図(2)



第63図 時期不明土坑実測図(3)



第64図 時期不明土坑、第64・83・89・91号土坑出土遺物実測図

第64・83・89・91号土坑出土遺物観察表（第64図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎 土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備 考 |
|-------|------|----|----------------------|--------|----|-----------------------------------|------|----------|-------|
| TP508 | 調文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 灰褐色 | 普通 | 入組三叉文 単部調文LRの充填施文 | 安行3a | 8881層土中 | PL.II |
| TP509 | 調文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 黒褐色 | 普通 | 刻文帯 対向する弧状の沈線 単部調文LRの充填施文 | 後期後半 | 8881層土中層 | PL.II |
| TP510 | 調文土器 | 深鉢 | 長石・雲母 | にぶい赤褐色 | 普通 | 斑端文 堆文は撚糸文 斜位の条繩文 懸垂する2条の火継の施文 | 後期後半 | 8881層土中層 | PL.II |
| TP511 | 調文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・絹織 | にぶい赤褐色 | 普通 | 地文は網目調文LR 沈線文 | 層之内 | 8891層土中 | |
| TP512 | 調文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 ・赤色鉱子・絹織 | にぶい赤褐色 | 普通 | 斑端文 地文は撚糸文 弧状の条繩文 斜位・懸垂する2条の火継の施文 | 後期後半 | 8891層土中 | PL.II |

表5 時期不明土坑一覧表

| 番号 | 位置 | 平面形 | 長径方向 | 規 模(m、深さはcm) | | 壁面 | 底面 | 覆土 | 出土遺物 | 備 考 | 新旧関係(古→新) |
|----|------|---------|---------|-----------------|----|----|----|----|---------|------------|-----------|
| | | | | 長径(軸)×短径(軸) | 深さ | | | | | | |
| 1 | C4j2 | 椭円形 | N-9°-E | 0.82 × 0.48 | 17 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | — | — | — |
| 2 | C3i0 | 円形 | — | 1.15 × 1.11 | 33 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | — | SK3と新旧不明 | — |
| 3 | C3i0 | [椭円形] | N-43°-E | 0.58 × (0.30) | 7 | 緩斜 | 盤状 | 自然 | — | SK2と新旧不明 | — |
| 4 | C3i0 | 不整椭円形 | N-15°-W | 0.77 × 0.68 | 23 | 凸斜 | 平坦 | 自然 | — | — | — |
| 6 | D3d0 | 椭円形 | N-40°-W | 1.10 × 0.96 | 19 | 外傾 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 7 | D3d0 | 椭円形 | N-85°-E | 0.98 × 0.88 | 40 | 外傾 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 8 | D3d0 | 椭円形 | N-25°-E | 0.66 × 0.54 | 16 | 外傾 | 平坦 | 自然 | — | — | — |
| 9 | D3d0 | 椭円形 | N-75°-E | 0.70 × 0.62 | 28 | 緩斜 | 盤状 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 11 | D3d0 | 不整椭円形 | N-55°-W | 1.24 × 1.12 | 52 | 緩斜 | 盤状 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 12 | D3d0 | 椭円形 | N-90°-E | 1.14 × 0.92 | 41 | 外傾 | 平坦 | 人為 | 調文土器・剝片 | — | — |
| 13 | D3d0 | 椭円形 | N-31°-E | 1.12 × 0.97 | 50 | 外傾 | 盤状 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 14 | D4b1 | 椭円形 | N-5°-W | 0.58 × 0.50 | 40 | 外傾 | 盤状 | 人為 | — | — | — |
| 15 | D3a8 | 椭円形 | N-18°-E | 1.04 × 0.92 | 26 | 緩斜 | 平坦 | 人為 | 調文土器 | — | — |
| 16 | D3d0 | 調丸長方形 | N-12°-E | 2.32 × 1.08 | 72 | 外傾 | 平坦 | 人為 | 調文土器 | — | — |
| 17 | D3d0 | [調丸長方形] | N-45°-E | 0.94 × (0.88) | 36 | 緩斜 | 盤状 | 人為 | 調文土器 | — | — |
| 19 | D3a8 | 円形 | — | 1.02 × 1.00 | 74 | 外傾 | 平坦 | 人為 | 調文土器 | PG2P1→本跡 | — |
| 20 | D3b8 | 円形 | — | 0.70 × 0.68 | 15 | 緩斜 | 盤状 | 自然 | — | — | — |
| 21 | D3d7 | 円形 | — | 0.86 × 0.84 | 20 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 22 | D3d7 | 円形 | — | 0.98 × 0.90 | 14 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | SK23→本跡 | — |
| 23 | D3d7 | [円形] | — | 1.04 × (0.66) | 20 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | 本跡→SK22 | — |
| 24 | D3d9 | 椭円形 | N-14°-W | 1.00 × 0.88 | 40 | 緩斜 | 盤状 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 25 | D3d6 | [長方形] | N-33°-E | 1.66 × (0.72) | 84 | 直立 | 平坦 | 自然 | — | — | — |
| 26 | D3d6 | 調丸長方形 | N-36°-E | 1.28 × 0.78 | 64 | 直立 | 平坦 | 自然 | — | — | — |
| 27 | D3d6 | 調丸長方形 | N-37°-E | 1.12 × 0.62 | 52 | 直立 | 平坦 | 自然 | — | — | — |
| 28 | D3e8 | 椭円形 | N-18°-E | 0.98 × 0.76 | 28 | 緩斜 | 盤状 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 29 | D3e8 | [椭円形] | N-17°-E | 0.58 × (0.48) | 16 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | — | 本跡→SK30 | — |
| 30 | D3e8 | 椭円形 | N-78°-E | 1.96 × 1.20 | 38 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | SK29→本跡 | — |
| 31 | D3e6 | 長椭円形 | N-25°-E | 1.12 × 0.74 | 22 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | — | — | — |
| 32 | D3e6 | 椭円形 | N-15°-E | 0.86 × 0.72 | 20 | 緩斜 | 盤状 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 33 | D3e6 | 円形 | — | 0.94 × 0.92 | 12 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | — | — | — |
| 34 | D3e7 | 円形 | — | 1.10 × 1.09 | 66 | 直立 | 平坦 | 人為 | 調文土器 | — | — |
| 35 | D3e8 | 椭円形 | N-47°-W | 1.66 × 1.32 | 24 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器・剝片 | — | — |
| 36 | D3e9 | 椭円形 | N-49°-E | 1.50 × 1.22 | 30 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 37 | D4a1 | 円形 | — | 1.52 × 1.48 | 34 | 緩斜 | 盤状 | 人為 | 調文土器 | 本跡→SK38 | — |
| 38 | D4a1 | 椭円形 | N-55°-W | 1.24 × 0.90 | 18 | 緩斜 | 凹凸 | 自然 | — | SK37-39→本跡 | — |
| 39 | C3j1 | 円形 | — | 0.72 × 0.70 | 18 | 緩斜 | 盤状 | 自然 | — | 本跡→SK38 | — |
| 40 | D3e7 | [椭円形] | N-20°-W | 1.06 × (0.96) | 38 | 緩斜 | 平坦 | 人為 | 調文土器・剝片 | 本跡→SK41 | — |
| 41 | D3e7 | 椭円形 | N-52°-W | 0.90 × 0.80 | 8 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | — | SK40→本跡 | — |
| 42 | D3e8 | 長椭円形 | N-48°-W | 1.24 × 0.56 | 28 | 外傾 | 盤状 | 自然 | — | — | — |
| 43 | D4b1 | 長方形 | N-35°-E | 1.96 × 1.28 | 72 | 外傾 | 平坦 | 人為 | 調文土器 | — | — |
| 44 | D3f6 | 椭円形 | N-39°-E | 0.82 × 0.68 | 21 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | SI 1→本跡 | — |
| 45 | D3f5 | 円形 | — | 0.80 × 0.76 | 25 | 外傾 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 46 | D3f5 | 長方形 | N-54°-E | 1.63 × 1.08 | 42 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器・剝片 | — | — |
| 47 | D3j3 | 椭円形 | N-12°-E | 1.28 × 0.93 | 22 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 48 | D3j2 | 方形 | — | 1.02 × 0.95 | 56 | 直立 | 平坦 | 人為 | 調文土器 | — | — |
| 51 | D3f8 | [椭円形] | N-50°-E | 0.80 × (0.36) | 8 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器・石器 | — | — |
| 52 | D3e8 | 円形 | — | 1.22 × 1.04 | 28 | 外傾 | 平坦 | 人為 | 調文土器 | SK53→本跡 | — |
| 55 | E2f0 | 椭円形 | N-6°-E | 1.00 × 0.80 | 20 | 外傾 | 平坦 | 人為 | 調文土器 | — | — |
| 56 | E3d1 | 調丸長方形 | N-60°-W | 2.04 × 0.96 | 20 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 57 | E2e0 | 椭円形 | N-6°-E | 0.92 × 0.81 | 22 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 58 | E3e1 | 椭円形 | N-39°-E | 1.10 × 0.82 | 10 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | 調文土器 | — | — |
| 59 | D3i5 | 円形 | — | 0.98 × 0.96 | 16 | 緩斜 | 盤状 | 人為 | 調文土器 | — | — |
| 60 | D3i5 | 不定形 | N-32°-W | (0.70) × (0.60) | 50 | 直立 | 平坦 | 人為 | 調文土器 | — | — |
| 61 | D3i4 | 椭円形 | N-85°-W | 0.88 × 0.66 | 14 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | — | — | — |

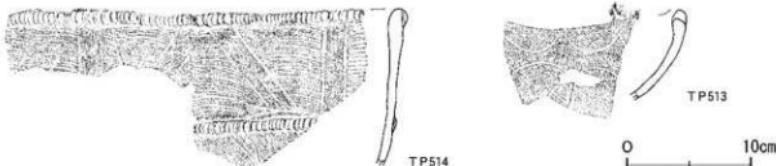
| 番号 | 位置 | 平面形 | 長径方向 | 規 模(m. 深さはcm) | | | 上面 | 底面 | 覆土 | 出土遺物 | 備 考 新旧関係(古→新) |
|----|------|-------|---------|---------------|----------|-----|----|----|----|------|------------------|
| | | | | 長径(輪)× | 短径(輪) | 深さ | | | | | |
| 63 | E2e9 | 梢円形 | N-10°-E | 0.92 | × 0.65 | 46 | 直立 | 皿状 | 自然 | — | — |
| 64 | E3h2 | 円形 | — | 0.98 | × 0.95 | 32 | 外傾 | 皿状 | 自然 | — | — |
| 65 | E3e1 | 不整梢円形 | N-70°-W | 2.86 | × 1.02 | 34 | 緩斜 | 皿狀 | 自然 | — | — |
| 66 | E3c4 | 梢円形 | N-48°-E | 1.09 | × 0.86 | 24 | 外傾 | 皿状 | 自然 | — | — |
| 67 | E3d3 | 円形 | — | 0.69 | × 0.69 | 64 | 外傾 | 皿状 | 人為 | — | — |
| 70 | E3f3 | 梢円形 | N-69°-E | 0.98 | × 0.72 | 54 | 緩斜 | 平坦 | 人為 | — | — |
| 71 | E3g3 | 円形 | — | 0.96 | × 0.84 | 16 | 緩斜 | 平坦 | 人為 | — | — |
| 72 | E3f3 | 圓丸長方形 | N-35°-E | 1.74 | × 0.88 | 44 | 直立 | 平坦 | 人為 | — | — |
| 73 | E3f2 | 梢円形 | N-2°-W | 1.03 | × 0.83 | 72 | 外傾 | 皿状 | 人為 | — | — |
| 74 | E3g3 | 梢円形 | N-40°-E | 1.62 | × 0.76 | 24 | 緩斜 | 平坦 | 人為 | — | — |
| 76 | E3h5 | 梢円形 | N-51°-W | 1.46 | × 1.12 | 108 | 外傾 | 平坦 | 人為 | — | — |
| 79 | E3a4 | 梢円形 | N-34°-W | 0.74 | × 0.66 | 15 | 緩斜 | 皿状 | 人為 | — | — |
| 80 | E2g9 | 円形 | — | 0.98 | × 0.96 | 78 | 緩斜 | 平坦 | 人為 | — | — |
| 81 | E3a5 | 円形 | — | 0.94 | × 0.88 | 26 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | — | — |
| 82 | E2f9 | 長梢円形 | N-33°-E | 1.96 | × 0.38 | 32 | 緩斜 | 平坦 | 人為 | — | — |
| 83 | E3c3 | 梢円形 | N-49°-W | 0.74 | × 0.50 | 35 | 外傾 | 平坦 | 自然 | — | — |
| 85 | E2h9 | [梢円形] | N-15°-E | (1.66) | × 1.24 | 81 | 緩斜 | 平坦 | 人為 | — | — |
| 86 | D3l5 | 梢円形 | N-10°-E | 1.08 | × 0.94 | 36 | 緩斜 | 平坦 | 自然 | — | SI12a・2B→本跡→SD2 |
| 87 | E3e3 | 梢円形 | N-24°-E | 0.90 | × 0.50 | 89 | 外傾 | 平坦 | 人為 | — | — |
| 89 | E3h6 | 梢円形 | N-32°-E | 1.10 | × 0.96 | 46 | 緩斜 | 皿状 | 人為 | — | SK91→本跡 |
| 90 | E3c4 | 梢円形 | N-23°-E | 0.80 | × 0.64 | 19 | 緩斜 | 平坦 | 人為 | — | — |
| 91 | E3a6 | 不定形 | N-59°-W | 2.03 | × (1.33) | 66 | 外傾 | 皿状 | 人為 | — | 本跡→SK89 |
| 92 | E3c4 | 梢円形 | N-30°-W | 0.66 | × 0.54 | 22 | 外傾 | 平坦 | 自然 | — | — |
| 99 | B3g5 | 不整長方形 | N-13°-E | 1.84 | × 1.80 | 17 | 外傾 | 平坦 | 人為 | — | SI12a・2B→本跡→SE1 |

(5) ピット群 (第65図・付図)

C区調査範囲に径0.3~1.0mほどの平面形状が円形または梢円形のピットが36基確認されている。これらピットは、調査区中央部に28基のピットが集中する第1号ピット群と調査区北部にピット8基が散在する第2号ピット群として報告するが、いざれも建物跡を想定できるような配置ではなく、時期及び性格は不明である。ここでは、実測図を復構全体図で示し、一覧表とピット計測表を掲載する。

第1号ピット群ピット計測表

| y'・1 番号 | 形状 | 規 模(cm) | | | y'・1 番号 | 形状 | 規 模(cm) | | | y'・1 番号 | 形状 | 規 模(cm) | | |
|------------|------|---------|--------|-------|------------|-----|---------|------|-------|------------|-----|---------|------|-------|
| | | 長径×短径 | 深さ | 長径×短径 | | | 長径×短径 | 深さ | 長径×短径 | | | 長径×短径 | 深さ | 長径×短径 |
| 1 | 梢円形 | 90 | × 78 | 115 | 11 | 梢円形 | 75 | × 65 | 115 | 21 | 梢円形 | 74 | × 60 | 114 |
| 2 | 円形 | 50 | × 48 | 50 | 12 | 梢円形 | 80 | × 70 | 130 | 22 | 梢円形 | 66 | × 54 | 71 |
| 3 | 円形 | 34 | × 29 | 22 | 13 | 梢円形 | 80 | × 52 | 75 | 23 | 円形 | 97 | × 93 | 99 |
| 4 | 円形 | 42 | × 41 | 12 | 14 | 円形 | 62 | × 51 | 119 | 24 | 梢円形 | 56 | × 48 | 69 |
| 5 | 円形 | 45 | × 43 | 56 | 15 | 梢円形 | 70 | × 51 | 52 | 25 | 梢円形 | 72 | × 66 | 75 |
| 6 | 梢円形 | 50 | × 43 | 70 | 16 | 梢円形 | 97 | × 77 | 53 | 26 | 梢円形 | 76 | × 59 | 55 |
| 7 | 円形 | 52 | × 52 | 58 | 17 | 円形 | 43 | × 38 | 32 | 27 | 梢円形 | 40 | × 35 | 60 |
| 8 | [円形] | [52] | × [46] | 42 | 18 | 円形 | 62 | × 62 | 63 | 28 | 円形 | 50 | × 46 | 54 |
| 9 | 梢円形 | 77 | × 64 | 55 | 19 | 梢円形 | 79 | × 65 | 76 | | | | | |
| 10 | 円形 | 68 | × 59 | 54 | 20 | 梢円形 | 54 | × 38 | 50 | | | | | |



第65図 第1号ピット群出土遺物実測図

第1号ピット群出土遺物観察表（第65図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 胎土 | 色調 | 焼成 | 文様の特徴 | 時期 | 出土位置 | 備考 |
|------|------|----|----------|----|----|-------------------------------------|------|---------|-------|
| TP51 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英・雲母 | 橙 | 普通 | 対向する連弧状の沈線、單面縄文底の充填施文 | 後期後半 | P 9 覆土中 | PL.11 |
| TP51 | 縄文土器 | 深鉢 | 長石・石英 | 橙 | 普通 | 縄文、底文は單面縄文底、弧状の条縄文、斜位・継位の文様(区画内を整消) | 後期後半 | P 9 覆土中 | |

第2号ピット群ピット計測表

| ピット番号 | 形状 | 規 模 (cm) | | ピット番号 | 形状 | 規 模 (cm) | | ピット番号 | 形状 | 規 模 (cm) | |
|-------|-----|----------|-----|-------|-----|----------|----|-------|----|----------|----|
| | | 長径×短径 | 深さ | | | 長径×短径 | 深さ | | | 長径×短径 | 深さ |
| 1 | 楕円形 | 42×35 | 57 | 4 | 円形 | 50×46 | 22 | 7 | 円形 | 26×25 | 25 |
| 2 | 円形 | 45×40 | 28 | 5 | 楕円形 | 32×26 | 25 | 8 | 円形 | 26×24 | 26 |
| 3 | 楕円形 | 73×58 | 102 | 6 | 楕円形 | 46×(31) | 40 | | | | |

表6 時期不明ピット群一覧表

| 番号 | 位 置 | 範 围 | | 柱穴数 | 柱穴平面形 | 規 模 | | | 主な出土遺物 | 備 考 重複関係(古→新) |
|----|---------------|-------|-------|-----|--------|--------|--------|--------|--------|------------------|
| | | 東西(m) | 南北(m) | | | 長径(cm) | 短径(cm) | 深さ(cm) | | |
| 1 | E 3.00～E 3.02 | 23.0 | 27.0 | 28 | 円形 楕円形 | 34～97 | 29～93 | 12～130 | 縄文土器 | |
| 2 | D 3.08～D 3.16 | 21.0 | 26.0 | 8 | 円形 楕円形 | 26～73 | 24～58 | 22～102 | 縄文土器 | 本跡→SD 1 |

第3節 D区の調査と遺物

D区は、標高25mの台地縁辺部に位置し、北側は桜川低地へ、東側は谷津に向かって緩やかに傾斜している。西側はB区に隣接する。調査範囲は南北44m、東西32mで、確認調査面積は729.8m²である。

1 遺構の確認状況

確認面の観察により堅穴住居跡、土坑と見られる遺構が確認された。確認面の観察だけで掘り込みを行っていないため詳細は不明であり、確認状況だけを全体図に示す。

2 遺物（第66図）

縄文土器片514点が採集している。後期初頭から晩期中葉までの土器が確認されている。主体となるのは加曾利B式土器および安行3a～3d式土器であるが、少量であるため詳細は不明である。TP番号の土器の説明は、数字番号のみの表記である。

D区出土土器の点数及び重量

| 時期 | 前 期 | | 中 期 | | 後 期 | | | | | | | |
|--------|-----|----|-----|----|------|------|------|------|-------|------|------|------|
| | | | | | 称名寺式 | | 堀之内式 | | 加曾利B式 | | | |
| | | | | | 精 製 | | 粗 製 | | 精 製 | | 粗 製 | |
| 土器型式 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 |
| 粗・精の別 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 14 | 11 | 0 | 2 |
| 部位 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.03 | 0 | 0 | 0.34 | 0.34 | 0 | 0.04 |
| 出土数 | | | | | | | | | | | | |
| 重量(kg) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.10 | 0 | 0.17 | 0 | 0.05 | 3.45 | 4.52 |

| 時期 | 後 期 | | | | | | | |
|--------|-----|----|-----|----|--------|------|------|------|
| | 曾谷式 | | | | 安行1・2式 | | | |
| | 精 製 | | 粗 製 | | 精 製 | | 粗 製 | |
| 土器型式 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 | 口辺部 | 胴部 |
| 粗・精の別 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 4 | 0 |
| 部位 | | | | | | | | |
| 出土数 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 4 | 0 |
| 重量(kg) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.10 | 0 | 0.17 | 0 |
| 底部分 | | | | | 細片 | | 総点数 | 総重量 |
| | | | | | | | | |
| 底部分 | | | | | 1 | 290 | 325 | |
| 底部分 | | | | | 0 | 0.05 | 3.45 | 4.52 |

| 時期 | 晩期 | | | | | | | | | | | |
|--------|----------|------|------|------|-----|------|-----|----|------|------|------|------------|
| | 安行3a～3d式 | | | | 前浦式 | | 大洞式 | | 無文土器 | 底部片 | 縫片 | 総点数 総重量 |
| 粗・精の別 | 精製 | | 粗製 | | 口辺部 | 胸部 | 口辺部 | 胸部 | | | | |
| 部位 | 口辺部 | 胸部 | 口辺部 | 胸部 | | | | | | | | |
| 出土数 | 10 | 5 | 1 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 6 | 164 | 189 |
| 重量(kg) | 0.21 | 0.10 | 0.04 | 0.06 | 0 | 0.02 | 0 | 0 | 0 | 0.10 | 1.55 | 2.08 |

第III群 後期の土器群

A類 称名寺式 515は称名寺2式で、沈線文、連続刺突の充填施文が施されている。

C類 加曾利B式

C1類 加曾利B1式 517は横位の沈線が施されている。

C2類 加曾利B2式 518は斜格子目文が施されている。

C3類 加曾利B3式 516は連続刺突が施され、円形の区画内に単節縄文LRが充填施文されている。

E類 安行1・2式

E2類 安行2式 519・520は縄文帯に刻目のある貼付文がみられる。520には蛇行沈線文が施されている。

E3類 安行1・2式の粗製土器 526は横位の条線文が施されている。

第IV群 晩期の土器群

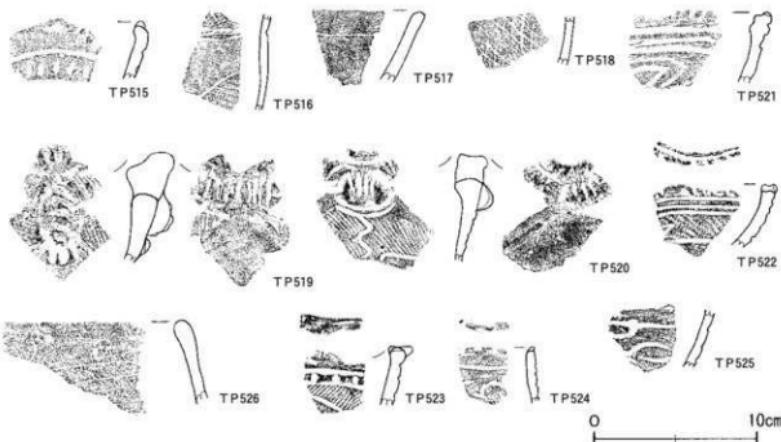
A類 安行3a～3d式

A1類 安行3a式 522は横位の沈線文と単節縄文RLを施し、口唇部に刻目が施されている。523は単節縄文LRと連続刺突が施文されている。

A2類 安行3b式 525は入組三叉文が施されている。

A3類 安行3c式 524は横位・弧状の沈線、連続刺突の充填施文が施され、口唇部に貼付文がある。

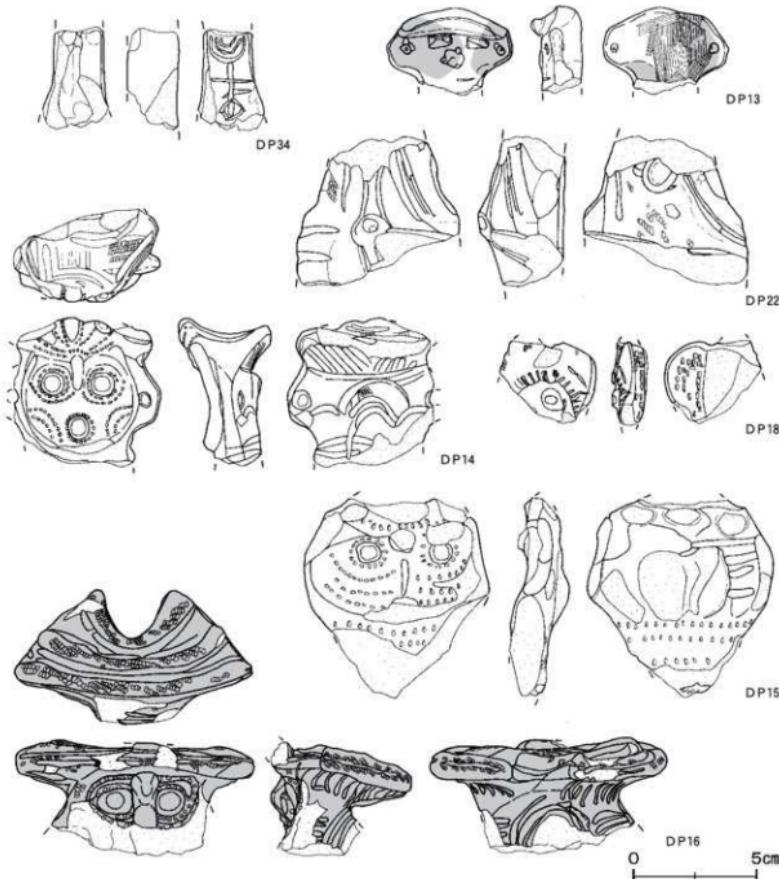
C類 前浦式 521は太い沈線による区画文と口唇部内面に沈線が施されている。



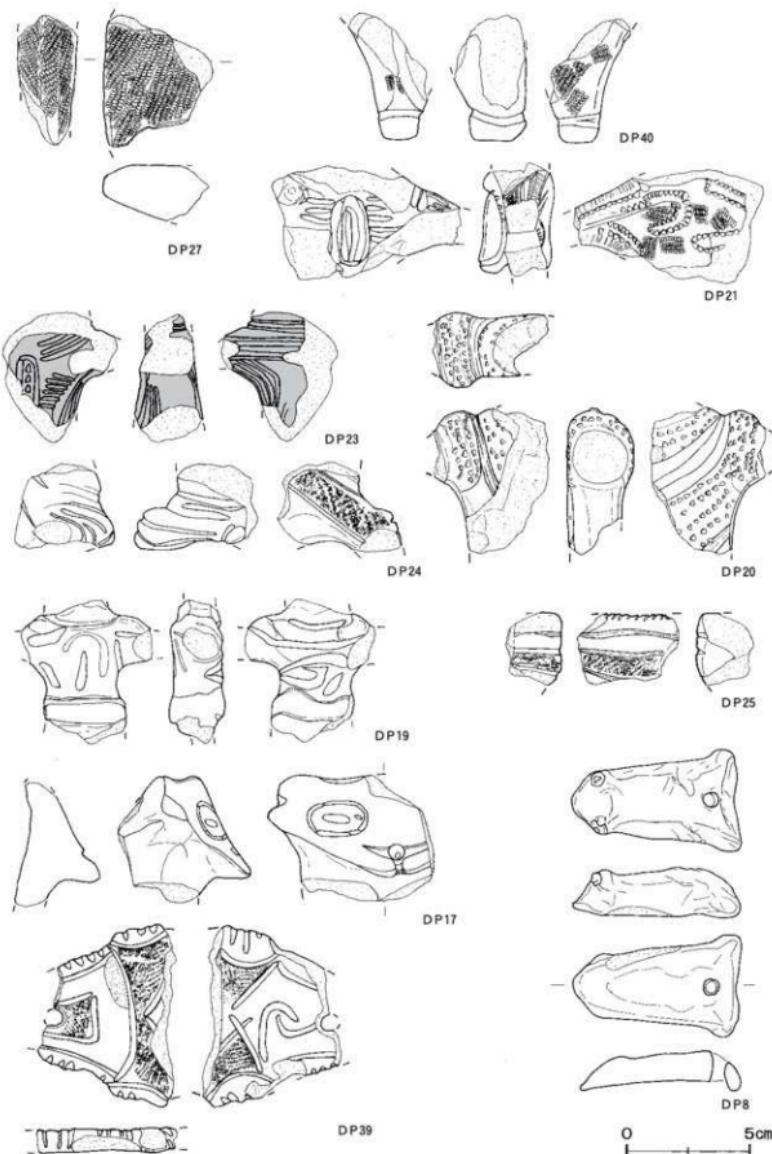
第66図 D区遺構外出土遺物実測図

第4節 特 殊 遺 物

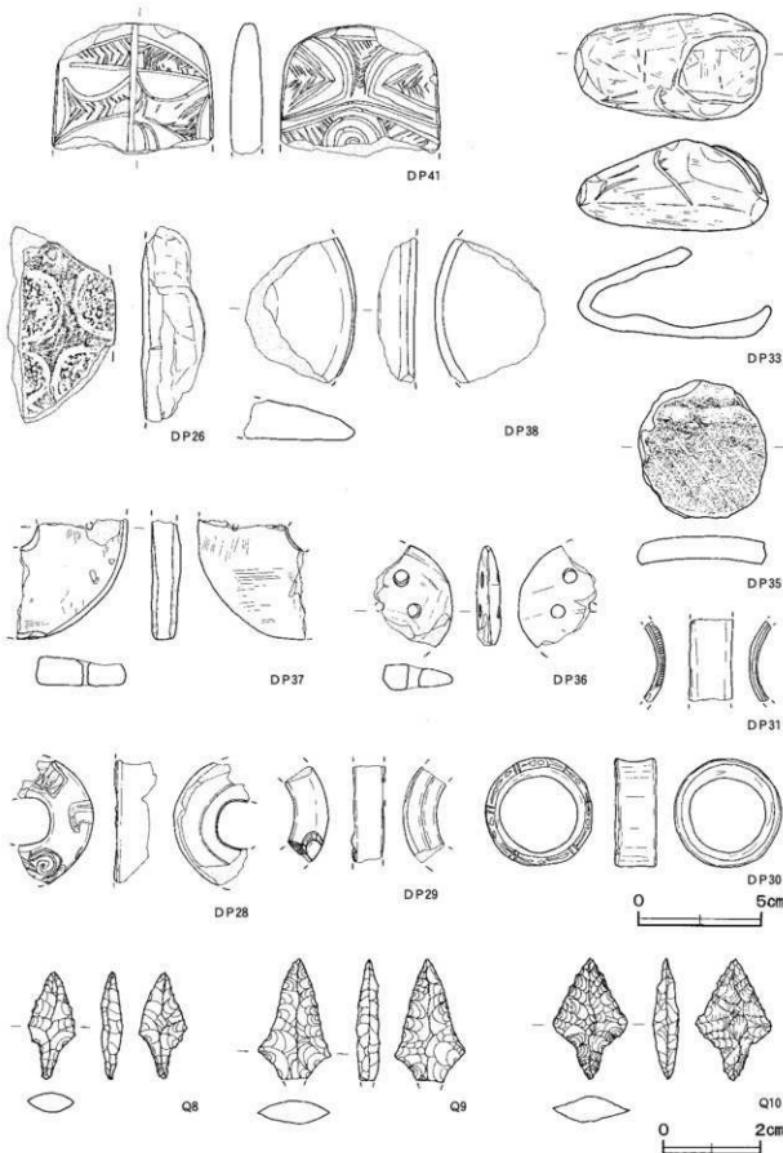
B・C・D区の調査では縄文土器のほか、特殊遺物（土製品、石器・石製品、骨角器、貝製品、剥片）が出土している。B区では土製品17点（土偶7・土版1・耳飾り2・靴形土製品カ1・土製円盤2・土器片鍤3・不明土製品1）、石器・石製品30点（搔器1・磨製石斧4・磨石8・回石5・敲石5・石錐2・石棒5）、骨角器1点（ヤス）、剥片46点が出土している。C区では土製品14点（土偶4・土版1・耳飾り1・動物形土製品2・土製円盤5・不明土製品1）、石器・石製品32点（石錐3・石錐1・磨製石斧3・打製石斧1・磨石11・回石5・敲石2・石棒5・石劍1）、剥片69点が出土している。D区では土製品2点（土偶）が出土している。これらの遺物について実測図と観察表で紹介する。



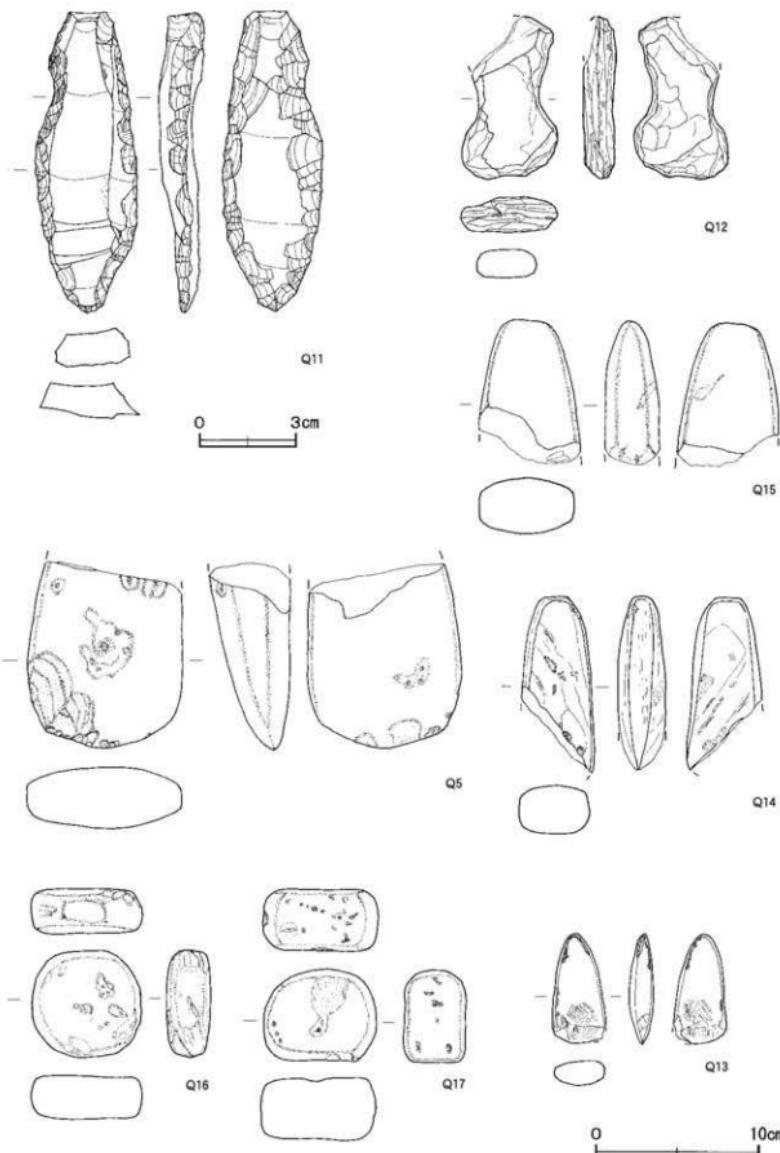
第67図 特殊遺物実測図(1)



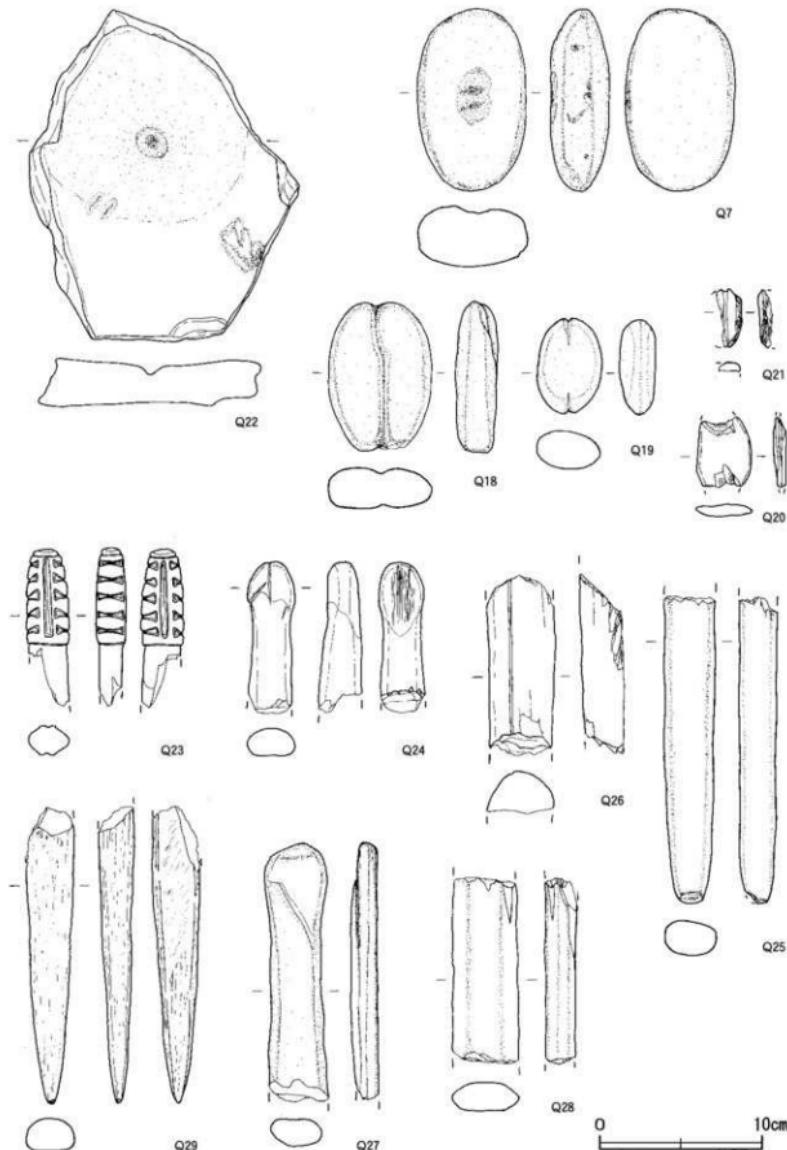
第68図 特殊遺物実測図(2)



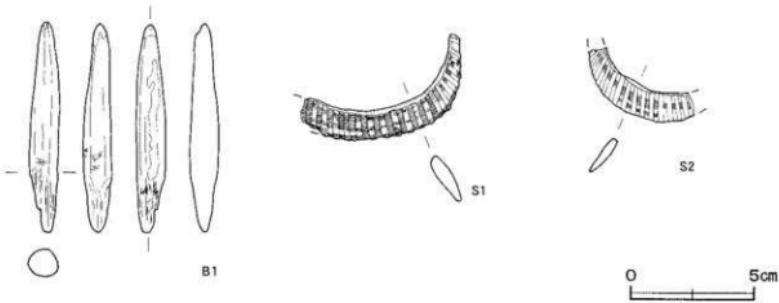
第69図 特殊遺物実測図(3)



第70図 特殊遺物実測図(4)



第71図 特殊遺物実測図(5)



第72図 特殊遺物実測図(6)

特殊遺物観察表(第67~72図)

| 番号 | 器種 | 長さ (cm) | 幅 | 厚さ | 重量 | 胎土 | 特徴 | 出土位置 | 備考 |
|------|-------|------------|-------|-------|---------|------------------|---|---------------|------|
| DP8 | 動物土偶 | 7.0 | 4.3 | 2.1 | 41.7 | 長石・石英 | 対向する突起 穿孔1か所 四肢動物を表現か | S8B9 植土中 | PL15 |
| DP13 | 土偶 | (3.6) | 5.2 | 2.1 | (30.8) | 長石・石英 | 眉は粘土紐の貼付 目・口・耳は刺突で表現 山形土偶 | B区第6号 トレンチ | |
| DP14 | 土偶 | (6.0) | (6.0) | (3.8) | (81.2) | 長石・石英 | 目・口・耳はボタン状貼付 耳を刺突で表現 頭頂部は平頭 木菟土偶 | C区確認面 | PL15 |
| DP15 | 土偶 | (8.1) | (7.6) | 2.5 | (105.6) | 長石 | 刺突文 目・耳はボタン状貼付で表現 木菟土偶 | B区北坡 確認面 | PL15 |
| DP16 | 土偶 | (4.8) | 9.8 | 5.9 | (112.0) | 長石・石英 | 刺突文 目はボタン状貼付で表現 ハート状に平頭な頭部に3条の横文帯 木菟土偶 | B区確認面 | PL15 |
| DP17 | 土偶 | (5.2) | (6.8) | (5.5) | (79.4) | 長石・石英・雲母 | 目は沈綴 口は刺突で表現 中空 遷光器土偶か | D区確認面 | |
| DP18 | 土偶 | (3.5) | (3.9) | (1.5) | (15.2) | 長石・石英 | 頭部 目は半ボタン状貼付で表現 刺突文 表面と裏面に刺突文 表面に半輪縞文帯 木菟土偶 | C区確認面 | |
| DP19 | 土偶 | (5.9) | (5.3) | 2.4 | (54.0) | 長石・石英・雲母 | 刺突文 表面に沈綴文 裏面に入組文 | D区確認面 | PL15 |
| DP20 | 土偶 | (6.0) | (4.7) | 2.8 | (52.8) | 長石・石英・赤色粒子 | 右肩部 表裏に刺突文 | B区確認面 | |
| DP21 | 土偶 | (4.7) | (7.8) | 3.1 | (78.1) | 長石・赤色粒子 | 表面に沈綴文と貼付文 裏面に繩文と刺突文 木菟土偶 | B区第5号 トレンチ | PL15 |
| DP22 | 土偶 | (6.1) | (6.7) | (3.6) | (104.7) | 長石・石英・雲母 | 腰部 沈綴文 腹部は貼付文に刺突で表現 裏面は繩文と刺突文 | C区確認面 | PL15 |
| DP23 | 土偶 | (5.3) | (4.7) | (2.9) | (45.4) | 長石・雲母・赤色粒子 | 左肩部・腹部は隆縫に刺突文で表現 表裏面に沈綴文 木菟土偶 | C区確認面 | |
| DP24 | 土偶 | (3.4) | (5.2) | (4.1) | (50.8) | 長石・石英・雲母 赤色粒子 | 右腰部 沈綴文 裏面に國文帯 木菟土偶 | 表探 | |
| DP25 | 不明土製品 | (3.0) | (4.2) | 2.4 | (27.0) | 長石・石英・赤色粒子 | 刻目文 沈綴文による区画帯に半輪縞文1R 施文 | B区確認面 | |
| DP26 | 土版 | (7.9) | (4.5) | (2.6) | (71.9) | 長石・石英・赤色粒子 | 腰部内に刺突を充填施文 | PL15 | |
| DP27 | 土偶 | (5.4) | (4.5) | (2.4) | (40.4) | 長石・石英 | 脚部 単輪縞文虹 施文 | B区確認面 | |
| DP28 | 耳飾り | [5.7] | (1.8) | 1.8 | (14.5) | 長石・雲母 | L字状隙縫満喰や扇形の沈綴 内面に抉り | B区第1号 トレンチ | PL16 |
| DP29 | 耳飾り | [5.8] | 1.3 | 1.4 | (7.3) | 長石・石英・雲母 | 円状隙縫 三叉文 内面に抉り | C区確認面 | PL16 |
| DP30 | 耳飾り | 4.4 | 1.8 | 0.6 | 20.6 | 長石・雲母・黒色粒子 | 表面に沈綴文と刺突文 三叉文 裏面無文 断面が薄い、表探 | PL16 | |
| DP31 | 耳飾り | [5.0] | 1.8 | 0.3 | (5.1) | 長石 | 刻目文 三叉文 脊鼻状突起 断面が薄い | B区確認面 | PL16 |
| DP33 | 不明土製品 | 4.4 | 7.9 | 3.7 | 64.4 | 長石・石英・赤色粒子 | 無文 長軸方向にヘラ状工具による磨き | B区確認面 | PL15 |
| DP34 | 土偶 | (4.2) | (2.7) | (2.0) | (17.8) | 長石・石英 | 脚部 背面に円形と十字形の沈綴 ハート形土偶 | B区第6号 トレンチ | PL15 |
| DP35 | 土製円盤 | 5.7 | 4.3 | 0.9 | 38.8 | 長石・石英・雲母 | 周囲に研磨痕 反りあり | C区確認面 | PL16 |
| DP36 | 土製円盤 | (4.2) | 孔径0.5 | 1.0 | (11.6) | 長石・石英 | 表面に研磨痕 中心孔1か所 小孔2か所とも両面穿孔 | C区確認面 | PL16 |
| DP37 | 土製円盤 | (4.9) | 孔径1.1 | 1.2 | (28.0) | 長石・石英 | 表面に研磨痕 中心孔1か所 小孔1か所とも両面穿孔 | B区確認面 | |
| DP38 | 土製円盤 | (6.0) | (4.5) | (1.6) | (36.9) | 長石・石英・雲母 赤色粒子 | 表面に研磨痕 | B区第6号 トレンチ | PL16 |
| DP39 | 不明土製品 | (5.7) | (7.4) | (1.1) | (50.0) | 長石 | 表面に沈綴文と単輪縞文虹、裏面に人組文と単輪縞文 腹部に刺突 中央部に凹孔 | 表探 | |
| DP40 | 土偶 | (5.2) | (2.9) | (3.3) | (30.6) | 長石・石英 | 脚部 単輪縞文虹 施文 | 表探 | |
| DP41 | 土版 | (5.4) | 6.7 | 1.3 | (58.4) | 長石・石英 | 表面に国文帯や満喰文 沈綴区画内に細密沈綴による矢羽根状文 | B区第1号 トレンチ | PL15 |

| 番号 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 石質 | 特徴 | 出土位置 | 備考 |
|------|------|--------|-------|-------|---------|---------|-------------------------------------|-----------|-------|
| Q 5 | 磨製石斧 | (11.4) | 9.5 | 5.0 | (722.0) | 緑色凝灰岩 | 大形の定角式磨製石斧 両面研磨 丂部敲打痕 基部欠損 | S88 穂土中層 | PL.16 |
| Q 7 | 凹石 | 11.2 | 6.8 | 3.6 | 419.0 | 安山岩 | 凹み 1か所 | S92 穂土中 | PL.17 |
| Q 8 | 石礫 | 2.15 | 0.95 | 0.45 | 0.50 | チャート | 両面押圧削離 凸基有茎繊 | C区確認面 | PL.16 |
| Q 9 | 石礫 | (2.47) | 1.44 | 0.45 | (1.20) | 黒曜石 | 両面押圧削離 凸基有茎繊 脊部欠損 | E 3e3 | PL.16 |
| Q 10 | 石礫 | 2.50 | 1.50 | 0.50 | 1.10 | チャート | 両面押圧削離 凸基有茎繊 | C区確認面 | PL.16 |
| Q 11 | 搔器 | 9.2 | 3.1 | 1.1 | 38.8 | 真岩 | 両縁調整削離 | B区第7号トレンチ | PL.16 |
| Q 12 | 打製石斧 | 10.1 | 5.9 | 2.2 | (139.1) | ホルンフェルス | 分側形 刃部の一部が欠損 | E 3e3 | PL.17 |
| Q 13 | 磨製石斧 | (6.7) | (3.3) | 1.5 | (52.5) | 蛇紋岩 | 小形の定角式磨製石斧 両面丁寧な研磨 | 表探 | PL.16 |
| Q 14 | 磨製石斧 | (10.7) | 4.7 | 3.0 | (215.0) | 緑色凝灰岩 | 刃部欠損 | C区確認面 | PL.16 |
| Q 15 | 磨製石斧 | (8.8) | 6.3 | 3.4 | (302.0) | 緑色凝灰岩 | 刃部欠損 | 表探 | PL.16 |
| Q 16 | 磨石 | 16.5 | 16.7 | 2.7 | 188.0 | 安山岩 | 全面に磨痕 | B区第1号トレンチ | |
| Q 17 | 磨石 | 5.7 | 7.1 | 3.8 | 244.0 | 安山岩 | 全面に磨痕 | C区確認面 | |
| Q 18 | 石鍬 | 9.3 | 6.4 | 2.5 | 302.0 | 安山岩 | 長軸に溝が全周 | 表探 | PL.17 |
| Q 19 | 石鍬 | 5.9 | 3.9 | 2.2 | 73.0 | 石英斑岩 | 上下に剣目 | B区確認面 | PL.17 |
| Q 20 | 石鍬 | (4.3) | 3.5 | 0.8 | (16.4) | 粘板岩 | 上下欠損 | B区第7号トレンチ | |
| Q 21 | 石鍬 | (3.5) | (1.6) | 0.5 | (3.7) | 粘板岩 | 長軸に溝 裏面欠損 | 表探 | |
| Q 22 | 凹石 | 20.4 | 16.7 | 2.9 | 1460.0 | 雲母片岩 | 全面に磨痕 表面中央部に凹み 1か所 | C区確認面 | |
| Q 23 | 石棒 | (9.7) | 2.5 | 1.8 | (59.6) | 粘板岩 | 有頭 表裏面中央部の長軸方向に溝 丂側面に横位5単位の1文字 | 表探 | PL.17 |
| Q 24 | 石棒 | (9.2) | 2.9 | 2.7 | 93.9 | 粘板岩 | 有頭 無文 | E 3b6 | |
| Q 25 | 石棒 | (18.9) | 3.1 | 2.4 | (193.9) | 粘板岩 | 基部 無文 丁寧な研磨 基部に敲打痕 | B区確認面 | PL.17 |
| Q 26 | 石棒 | (11.1) | 4.1 | (2.5) | (167.7) | 粘板岩 | 柄部 長軸方向に沈線 裏面欠損 | 表探 | |
| Q 27 | 石劍 | (15.9) | 3.8 | 1.6 | (183.1) | 綠泥片岩 | 頭部 残端とし明確な区分けがない 表裏面平坦に研磨 Q 28と同一個体 | 表探 | PL.17 |
| Q 28 | 石劍 | (11.3) | 4.0 | 1.9 | (168.8) | 綠泥片岩 | 柄部 表裏面平坦に研磨 Q 27と同一個体 | 表探 | PL.17 |
| Q 29 | 石劍 | (18.2) | 2.8 | 2.2 | (130.5) | 綠泥片岩 | 鋭角な基部残存 無文 丁寧な研磨 | E 3d5 | PL.17 |

| 番号 | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 材質 | 特徴 | 出土位置 | 備考 |
|----|----|-------|-------|-----|--------|------|-------------|-------|-------|
| B1 | ヤス | 8.5 | 1.2 | 1.2 | 10.0 | 安山岩 | 硬直で鋭角 | B区確認面 | PL.17 |
| S1 | 貝輪 | (6.6) | (2.1) | 0.5 | (14.3) | サルボウ | 縁辺部に磨痕 未製品カ | 表探 | PL.17 |
| S2 | 貝輪 | (4.4) | (1.7) | 0.3 | (6.0) | サルボウ | 縁辺部と表裏面に磨痕 | 表探 | PL.17 |

第6章 まとめ

今回の調査では、縄文時代前期から晩期中葉の遺物が検出されており、後期中葉から晩期初頭のものが主体となっている。遺構は貝塚のほか堅穴住居跡や土坑があり、縄文時代後期初頭から晩期中葉の土器が出土している。ここでは、時期区分と集落の変遷、第二の道具、当遺跡の景観について概略を述べ、まとめとしたい。

1 土器型式による時期区分

縄文時代前期から晩期中葉までの土器が出土しているが、主体となるのは後期から晩期までの土器であり、ここでは主体となる時期を第Ⅰ期から第Ⅵ期に区分し、各時期の概要についてまとめる。

第Ⅰ期（称名寺式期） C区第2A号住居跡の土器埋設ビット出土土器は、深鉢で口縁部に特徴のある突起をもち、胴部には沈線による文様が施されている。また、A・B区の斜面貝層からはL字状の2条の沈線間に刺突文が充填施文されている土器が出土しているが少量である。

第Ⅱ期（堀之内1・2式期） 堀之内1式土器は交叉する沈線文が施文されたものや懸垂を基準に放射状に広がる数条の沈線による文様を施されたものが出土している。また、堀之内2式土器は区画文が2条の沈線で施文されたものが出土している。これらの土器は、A区の第1・2号トレンチとB区の斜面貝層から少量出土している。

第Ⅲ期（加曾利B式・曾谷式） 加曾利B1式土器は内・外面に横位数条の沈線文が施され、沈線間にクランク文などが施文されている。加曾利B2式土器は矢羽根状文や斜格子目文が施された土器であり、精製土器と粗製土器が出土している。加曾利B3式土器は口縁に刻文帯をもち、縄文や弧線文が施文されている。これらの土器は、A・B区の斜面貝層から多量に出土しており、特にB区からの出土量が多い。しかし、C区の遺構内からはほとんど出土していない。曾谷式土器は、口辺部に下向の連弧文、胴部には上下に向かい合う連弧文が施文されているが、当遺跡全体から少量しか確認されていない。

第Ⅳ期（安行1・2式） 安行1式土器は波状口縁もしくは平口縁で、口辺部に横位3～5条の縄文帯上に貼付文が施されたものである。安行2式土器は刻目のある貼付文が施されたものである。粗製土器は、紐線文があり、弧状の条線文が施されているものが多い。これらの土器は、A・B区の斜面貝層、C区の遺構内から多量に出土している。

第Ⅴ期（安行3a・3b式） 安行3a式土器は三叉文が施されたもの、安行3b式土器は入組三叉文が施されたものである。また、区画文内に細密沈線文が施されたものがいわゆる「姥山式」に相当し、同時期のものである。粗製土器は、紐線文が消えて縦位や斜位あるいは弧状に沈線文が施されている。これらの土器は、A・B区の斜面貝層、C区の遺構内から多量に出土している。

第Ⅵ期（安行3c・3d式） 安行3c式土器は沈線と刺突文をもつもの、安行3d式土器は沈線文をもつものが、それぞれ出土している。また、幅広の沈線文をもつ前浦式土器、入組三叉文・羊齒状文・雲形文をもつ大洞式土器も出土している。これらの土器はA・B区のトレンチ内から出土しているが少量である。

2 集落の変遷

ここでは、土器型式による時期区分に基づき、貝塚の形成と終焉及び各時期の集落構成について述べていく。

第Ⅰ期以前（前・中期） 土器が少量確認されているだけで、遺構は検出されていない。獣場の領域であった可能性が想定される。

第Ⅰ期（後期初頭） 称名寺2式期が集落開始期である。第2A号住居跡1軒が検出されており、埋設土器が確認されている。当貝塚全体からの出土遺物は少量であり、貝層は形成されていない。

第Ⅱ期（後期前葉） 堀之内1式期の遺物は少量であり、竪穴住居跡や土坑は検出されていない。堀之内2式期は、A区斜面貝層の堆積開始時期である。土器の出土量は若干増加するが、竪穴住居跡や土坑などの遺構はみられない。

第Ⅲ期（後期中葉） 加曾利B1～3式期では、A区斜面貝層から土器と動物遺存体が多量に出土しており、斜面貝層内から加曾利B2式土器を伴う竪穴住居跡の覆土と考えられる土層1か所が確認されている。また、B区斜面貝層の中層（第3・7・10・11層）からも、この時期の土器が多量に出土しており、貝層形成の最初の盛期と考えられる。C区の遺構確認面からも多量の土器が出土しているが、本時期の遺構は検出されていない。しかし、斜面貝層の広がりや当時期の土器が多量に検出されていることは看過できない。未調査部分に本時期の集落が形成されていた可能性が想定される。

第Ⅳ期（後期後葉） 安行1・2式期は遺構数が増加する時期である。第Ⅲ期に引き続いて、A区斜面貝層から土器や動物遺存体などが出土している。本時期の竪穴住居跡はA区の斜面貝層内に竪穴住居跡の覆土と考えられる土層1か所と、C区で第2B号住居跡が検出されている。土坑は4基検出され、多量の遺物が出土している。B区斜面貝層の主土器は当時期のものであり、中層（第7・10層）から小片が多量に出土している。

第Ⅴ期（晚期前葉） 安行3a・3b式期の遺構は、C区の第53・54・69・97号土坑が該当する。第53・54・69号土坑では、第Ⅳ期と本時期の土器が混在しており、後期末～晚期前葉と考えられる。A区斜面貝層の終焉はこの時期であるが、多量の土器や動物遺存体が出土しており、大洞式系土器の出土も多い。

第Ⅵ期（晚期中葉） 安行3c・3d式期では、遺構はみられない。貝層直上の遺物包含層から土器が出土しているが、少量である。これ以後の土器は確認できず、当遺跡の終焉は当時期となる。

3 第二の道具について

当遺跡では、土偶、動物形土製品、土製耳飾り、石棒・石剣などが出土している。これらは、日常の生活道具とは考えにくい人工物であり、「第二の道具」といえる¹⁰。ここでは、遺物の形態や様相について確認し、当遺跡における第二の道具の特徴について記述する。

土偶 土偶は19点出土している。ここでは、瓦吹壓式の変遷¹¹をもとに、出土土偶について述べる。当遺跡出土の土偶は、後期前葉から晚期までの時期のものが出土している。DP34はハート形土偶の胸部で、背面に沈線による文様をもっている。DP13は後期中葉に展開する山形土偶で、刺突によって目・口・耳を表現し、ほかは無文である。DP1・DP7・DP9・DP14～DP16・DP18・DP21・DP23・DP24は後期後葉の木蓋土偶で、ボタン状の貼付文によって目・口が表現されている。DP17は晚期の土偶で、中空で遮光器土偶の系列の中で開拓化したものである。

動物形土製品 動物的造形の土製品2点と浅鉢1点が出土している。ここでは、それらについて、時間的・地域的位置付けを考えてみたい。

DP8は中空の半卵形で、四肢動物を表現したものである。表面に突起があり、耳・足が表現されているが、ほかに文様はみられない。下半身に穿孔があることから、装身具の可能性もある。形態から、栃木県藤岡神社遺跡（後期）、福島市福田貝塚（後期）、土浦市神立平遺跡の出土品に類似している。DP3は大半を欠損した海

獸形土製品であり、一部だけが残存している。表面は赤彩されており、側面に鱗状の張り出しがある。文様は磨消繩文と三叉文が施されており、安行3a式期に相当すると考えられる。類例に埼玉県東北原遺跡（晩期）、山形県作野遺跡（晩期）、北海道美々4遺跡（晩期）の海獸形土製品が知られている。P37は赤彩された動物的造形の浅鉢であり、亀と考えられる頭部と尾部が貼付されている。表面は三叉文と丁寧な磨消繩文がみられ、文様の特徴から安行3a式期に相当するものと考えられる。

DP8は、形態と様相から鬼怒川流域に分布する後期の所産とみられる。また、DP3、P37は文様と形態から、晩期前葉の時期と考えられ、特に、中空の海獸形土製品は、北海道から東北、関東地方に分布が認められている。

土製耳飾り 土製耳飾りは、8点出土しているが、残存状況が良好なもの6点を図示した。設楽博己氏の分類基準³⁾を参考にして、形態と様相から分類し、時間的位置付けを考えてみたい。

出土した土製耳飾りには厚手のもの（DP4・DP5・DP28・DP29）と薄手のもの（DP30・DP31）がある。DP4は、環状で厚手に作られた無文のII1A1類である。DP28は「内面に抉りを入れた、断面截状」形態の沈線モチーフを有し、DP5は対向する浮文を施したもので、両方ともII2E3類である。短い三叉文を施したDP29はII2F類である。薄手のDP30・DP31は、DP30が三叉文を施したIV2F類（後期末～晩期初）、「豚鼻状突起」を有し、三叉文を施したDP31はVC2類である。

DP4の類例は、栃木県乙女不動原遺跡⁴⁾、DP30・DP31は埼玉県奈良瀬戸遺跡⁵⁾の出土品があり、後期末から晩期初頭のものである。DP5及びDP28は関東地方に広く分布が認められる類型である。その類例は埼玉県真福寺貝塚の出土品⁶⁾にあり、安行3a・3b式期のものである。

石棒・石剣 石棒13点、石剣5点が出土し、残存状況の良好なものだけを図示した。ここでは、形態と様相から、その時間的位置付けについて検討する。

頂部片はQ23・Q24・Q27である。Q23は「I字文」をもつ頂部片であり、側面に左右対称の「I字文」5列を配している。Q24は無文の頂部であり、頂部と柄部は明確に区分されていない。Q27はやや膨らむ無文の頂部で、全体的に平坦な形態である。柄部はQ25・Q26・Q28・Q29で、すべて無文であるが、形態がいずれも多少異なっている。Q25・Q29は無文の基部が残存し、やや鋭角な形態を示している。Q26は頂部と基部が欠損した破片である。縦に沈線が認められ、断面は円形である。Q28は平坦な破片で、Q27と同一個体の可能性がある。

「I字文」の認められるQ23の類例は、常陸大宮市小野天神前遺跡の出土品に、また、無文のQ24～Q29は、頂部と基部の形態から水戸市金洗沢遺跡に類例が求められる。当遺跡の石棒・石剣は鈴木素行氏の言う「小野型石棒」⁷⁾に相当し、晩期前葉から中葉の時期と考えられる。

貝輪 貝輪は2点出土している。素材はサルボウであり、縁辺を短冊状に加工している。S1は、上下が摩滅し、表面は磨きの認められない未製品である。S2は、周囲と表面を平坦に研磨した完成品である。現利根川下流域では、貝輪の出土頻度が高いことが地域的特徴である⁸⁾とされ、当遺跡で出土した貝輪の存在は、利根川下流域が貝輪製作の中心的地域であったことを追認するものといえよう。

4 旭台貝塚の景観と周辺の遺跡

当遺跡は、桜川右岸の低地から入り込む谷津に面する台地縁辺部に位置している。谷津を挟んだ東側の対岸には、中根中谷津遺跡が所在しており、この谷津を囲むように集落が形成され、その隣接地に貝塚が形成されたものと考えられる。貝塚を形成する貝は、河口などの汽水域に棲息するヤマトシジミが90%以上を占

めている。そのほか、ハマグリ・アカニシ・サルボウなどもみられるが、その量は少ない。当時の人々が貝を採取するとき、貝殻の選別が行われた可能性も想定されるが、当貝塚の構成貝殻は、後・晩期に砂泥域が広がっていた当桜川低地の環境によると考えられる。また、イノシシ・シカ・クマなどの歯骨やタイやズキンの魚骨も出土しており、周辺地域や湾内から捕獲した多様な食料を糧としていたと考えられる。

A区の斜面貝層は、純貝層及び混土貝層であり、土器や動物遺存体は良好な残存状態で多量に出土していることから、人為的な堆積と想定される。しかし、B区の斜面貝層については、そのトレンチ調査によつて、流れ込んだ土が2m以上厚く堆積し、土器の小破片が含まれている状況が確認されている。また、土層中にロームの混入があまり見られないことから、B区南側の谷津は自然堆積によって埋没した自然地形であり、その堆積状況から、谷津の古地形は現地表面より2m以上深かったと考えられる。また、B区斜面貝層の貝は破碎率が高く、混土率も高いことから、より高位の北部A区側からその深い谷津に向かって流れ込んだ土による再堆積層と想定される。

こうしたA・B区の斜面貝層の形成は、縄文時代後期前半から晩期前半の時期と考えられる。後期前葉の堀之内2式期に斜面貝層の南側から堆積が始まり、加曾利B式期から安行1・2式期が最盛期となり、安行3a・3b式期で終焉を迎える。その後、貝層直上の遺物包含層から安行3c・3d式期から前浦式期の土器も確認できることから、貝塚形成の終焉後も集落として継続して利用されたものと想定される。

また、前述したように、当遺跡は称名寺式期が集落の開始時期となるが、その後の遺構はしばらくみられない。その後、加曾利B式期の堅穴住居跡1軒が確認され、主体的に遺構が形成されるのは安行1・2式期から安行3a・3b式期である。一方、貝塚の形成は堀之内2式期から始まり、安行3b式期で終焉となる。このように遺構と貝層形成には時期的なズレがみられる。この点は、谷を挟んで位置する中根中谷津遺跡に注目する必要がある。この中根中谷津遺跡では、堀之内1式期の堅穴住居跡9軒、堀之内2式の堅穴住居跡1軒、土坑内貝層4基が確認されている。また、晩期前葉の住居跡が、調査区北西部のエリア際に1軒（第10号住居跡）確認されており、調査区外に晩期の住居跡が展開されている可能性が指摘されている⁹⁾。

前田潮氏は、貝塚遺跡を残した縄文人の居住空間が隣接する包蔵地にある可能性を指摘しており¹⁰⁾。川口武彦氏は、当貝塚と旭台貝塚東遺跡（中根中谷津遺跡）との間には微妙な時期差がみられることに注目し、両者に密接な関係があることを指摘している¹¹⁾。当貝塚の空白時期である堀之内1・2式期に中根中谷津遺跡で集落が形成されたと想定できることは、当貝塚と密接な関係を提示している居住空間ということがいえるであろう。また、中根中谷津遺跡の第10号住居跡は、当遺跡の東側で谷津を挟む対岸に位置しており、その出土遺物は当遺跡の貝層及びC区の遺構から出土した遺物と類似性がみられることからも関連性が指摘できる。

註

- 1) 小林達雄『縄文人の世界』朝日新聞社、1996年7月
- 2) a 瓦吹壁『茨城県の土偶』『国立歴史民俗博物館研究報告第37集』 国立歴史民俗博物館、1992年3月
b 瓦吹壁『第10回特別展山野を駆ける土偶その移り変わりと祈りの道具』土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2005年3月
- 3) 設楽博己『土製耳飾』『縄文文化の研究』9 縄文人の精神文化』雄山閣 1995年3月
- 4) 小山市『小山市史 史料編 原始・古代』1981年3月
- 5) 柳田敏司・川崎義進ほか『奈良瀬戸遺跡』大宮市教育委員会 1969年
- 6) 甲野勇『埼玉県柏原町真福寺貝塚調査報告』1968年6月
- 7) a 鈴木素行『ケンタウロスの落とし物 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒について』『婆良岐考古第24号』婆良岐考古人会、2002年5月
b 鈴木素行『本覚遺跡の研究 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について』2005年3月
- 8) 斎藤弘道『茨城の縄文時代貝塚(4)』『茨城県立歴史館報第29号』茨城県立歴史館、2001年3月
- 9) 川村満広『(仮称) 中根・金田台地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 seventh 中谷津遺跡 I』『茨城県教育財團文化財調査報告書』第39集 1998年3月
- 10) 前田潮『筑波大学先史学・考古学研究調査報告VI「古霞ヶ浦清」沿岸貝塚の研究』昭和63年度～平成2年度文部省特定研究費による調査研究概要』筑波大学、1991年
- 11) 川口武彦『II、縄文時代』『霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書—遺跡地図編一』霞ヶ浦町教育委員会・筑波大学考古学研究室 2001年3月

付 章

旭台貝塚の動物遺体

西本 豊弘

はじめに

旭台貝塚より貝殻とともに多くの動物遺体が採集された。それらは、茨城県教育委員会による試掘の際に出土したものと、2008年度の発掘で出土したものがある。良好な貝層は県による試掘で確認されたものであり、ヤマトシジミを主体としてハマグリ・シオフキ・アカニシを少量含むものであった。2008年度の発掘調査で確認された貝層は、本来は台地の平坦部に形成されていたものが耕作などによって台地下の斜面に2次的に動かされたものであった。台地上には所々に貝殻のブロックが見られたが、その地点に本来の貝層が分布していたのであろう。この搅乱貝層もヤマトシジミを主体とするものであった。動物遺体の内容は表と写真図版に示したとおりであり、その内容を簡単に説明する。

なお、この資料の分類では西本研究室の金憲実さんと太子夕佳さんの協力を得たことに感謝します。

1 貝類

この遺跡の貝層はヤマトシジミを主体としていた。殻長25mm程度のよく成育したものもあったが、それよりも小さいものが多い。ヤマトシジミに次いで多いのはハマグリであったが、殻長3cm以下の中型から小型のものが多くた。その他に目立ったものはアカニシであり、刺がないタイプと刺が張り出したものと無いものが見られた。その他ではシオフキ・サビシラトリガイ・ウバガイ・ベンケイガイ・オオタニシ・ヒタチシリメンカワニナ・イシガイ科の1種が見られた。ベンケイガイは貝輪の製作のために持ちこまれたものであろう。

2 魚類

マダイ・クロダイ・ボラ・スズキが見られた。そのうちスズキが多いが、骨が大きいので採取されたのであろう。小さな魚類はおそらく貝層に含まれていたと思われるが、内容は不明である。

3 鳥類

ガシカモ類の中で、ヒクイより少し小さいガシカモ類が少量含まれていた。また、タカの中手骨が1点採集されていた。トビよりもかなり小さなタカで、おそらくハヤブサ程度の大きさのタカと思われる。なお、この他にカラスの骨が5点採集されているが、骨質の保存状態から見て縄文時代のものではなく現代のものであろう。

4 哺乳類

シカとイノシシが主体である。上下の顎骨ではイノシシが多いが四肢骨ではシカが多い。おそらく採取時点まで大きな骨が採取されたためのバイアスであろう。シカ・イノシシともに縄文後期の他の関東地方出土の骨格と遜色の無い大きさである。

その他の獣類ではアナグマの下顎骨1点とテンの大脚骨1点、ツキノワグマの指の先端の骨である末節骨が1点みられた。なお、この他にネコの上腕骨が左右1点筒と馬の歯の破片が3個分含まれていた。これらはすべて先に述べたカラスの骨と一緒に採集されており、現代のものと推測される。

表1 シカ・イノシシの出土内容

| 部位 | 左右 | 残存部位 | シカ | イノシシ | 部位 | 左右 | 残存部位 | シカ | イノシシ |
|-----|----|-----------|---------|-------------|-------|-----|------|-------------------|---------------------------|
| 頭蓋骨 | | 落合2 磨片:36 | | | 脛骨 | | | (1) | (1) |
| | | 後頭部 | 後頭部破片:5 | 後頭部破片:6 | | R | | 中間部 遠位部 | 1 2(1) |
| | | その他 | 角+角座(3) | 細管(1;2, R2) | | L | | 近位部 中間部 遠位部 | 2(1) 2(2) 1 2(4) |
| 箇椎 | | | 3 | 4 | 踵骨 | L | | 12 | 4 |
| 棘椎 | | | (1) | 2 | | R | | 4(1) | 2(1) |
| 肩甲骨 | L | | 3 | 1(1) | 距骨 | L | | 8 | 2 |
| | L | 近位部 | 2 | 4 | | R | | 2 | 4 |
| 上腕骨 | R | 中間部 | 2 | 1 | 中手骨 | R | 近位部 | 3 | 3(1) |
| | R | 遠位部 | 2(1) | 3(2)(2) | | L | 遠位部 | 3 | |
| | R | 遠位部 | 2 | 2 | | R | 近位部 | 6 | |
| | R | 中間部 | 3 | | 中足骨 | L | 遠位部 | 2(2) | |
| | R | 遠位部 | 4 | 4(1) | | R | 遠位部 | 1 | |
| 桡骨 | L | | | 2(1) | | R | 遠位部 | 4 | |
| | R | 中間部 | 1 | | 手+中足骨 | | | 5 | 30(3) |
| | R | 遠位部 | 3(1) | 1 | | | | 12(1) | 4(1) |
| | R | 近位部 | 3 | 2 | | | | 3 | |
| 尺骨 | L | | 2 | 10(1) | 四肢骨 | | 基礎骨 | 30 | 30(3) |
| | R | | 1 | 11 | | 中肋骨 | | 12(1) | 4(1) |
| 対骨 | L | 夏骨臼 | 3 | 1 | | 中肋骨 | | 3 | |
| | R | 鶲骨 | 1 | | | 未端骨 | | 1 | |
| | R | 対骨臼 | 1 | | | | | 1 | |
| 大腿骨 | L | 鶲骨 | 1 | 1 | 四肢骨 | | 基礎骨 | 5 | 30(3) |
| | R | 近位部 | (1) | | | 中肋骨 | | 12(1) | 4(1) |
| | R | 中間部 | 2 | | | 未端骨 | | 3 | |
| | R | 遠位部 | 2(1) | (2) | | | | 1 | |
| 小腿骨 | R | 近位部 | (2) | | | | | 1 | |
| | R | 中間部 | 1 | | | | | 1 | |
| | R | 遠位部 | 2(1) | | | | | 1 | |

* 数字は成数、()内の数字は若齢、□内の数字は幼齢を示す。

** はね。Rは右を示す。

*** 近位部、中間部、遠位部は各部位の心臓に近い順である。

表2 シカ・イノシシの上・下顎骨と残存している歯

| 歯名 | 部位 | 歯名があるもの | | | | 歯跡表 | | | | | |
|----|------|-----------------|----|------------|----|-----|----|-------------|----------|----|---------|
| | | 部位 | 左右 | R | 歯考 | 部位 | 左右 | 点数 | 歯考 | 部位 | 左右 |
| 上顎 | イノシシ | (XH123) | | (P121) | | 11 | 3 | 3 | | 11 | 3 |
| | | (W14) | | (P122) | | 12 | 4 | | | 12 | 3 |
| | | (W1) | | (P123) | | 13 | 1 | | オス2、不明1 | C | 4 |
| | | (W123) | | (P124) | | P34 | 1 | | | P1 | 1 |
| | | (XH223) | | (W13) | | H2 | 1 | | | P2 | 1 |
| | | (XH12) | | (P1M123) | | M3 | 1 | | | M3 | 1 |
| | | (P3M12) | | (m4M1) | | | | | | | 未出 |
| | | (XH2) | | (m234W) | | | | | | | |
| 下顎 | イノシシ | (1)XXXXXX(1) | | (1)1112(1) | | 11 | 3 | | | 11 | 3 |
| | | (1120XXX)(2) | | (1120)(2) | オス | 12 | 4 | | | 12 | 3 |
| | | (1120)(3) | | (XX)(3) | | 13 | 1 | | | 13 | 2 |
| | | (X)(4) | | (XXXm2)(4) | 幼 | C | 10 | オス2、メス3、不明1 | C | 6 | オス3、不明1 |
| | | (XXXm2)P2343(5) | | (XXX)(5) | | P3 | 1 | | | P2 | 1 |
| | | (XXXm2)P2343(6) | | (XXX)(6) | オス | P4 | 1 | | | P4 | 1 |
| | | (X)(7) | | (XXX)(7) | オス | H1 | 1 | | | H1 | 2 |
| | | (W12) | | (W123) | 衛成 | H2 | 1 | | | H2 | 2 |
| | | (XP3M123) | | (M3)(3) | 衛成 | M3 | 1 | | 衛成 | M3 | 3 |
| | | (X)(8) | | (M3)(8) | 衛成 | | | | 衛成:1、成:3 | M3 | 2 |
| | | (m8M12) | | (M123) | 衛成 | | | | | | 若1、成1 |
| | | (XP3M12) | | (M123) | 衛成 | | | | | | 未出2、成1 |
| 上顎 | シカ | (P123) | | (P123) | オス | | | | | | |
| | | (P123) | | (P123) | 成 | | | | | | |
| | | (P123) | | (P123) | 成 | | | | | | |
| | | (P123) | | (P123) | 成 | | | | | | |
| | | (P123) | | (P123) | 成 | | | | | | |
| | | (P123) | | (P123) | 成 | | | | | | |
| | | (P123) | | (P123) | 成 | | | | | | |
| | | (P123) | | (P123) | 成 | | | | | | |
| | | (P123) | | (P123) | 成 | | | | | | |
| | | (P123) | | (P123) | 成 | | | | | | |
| | | (P123) | | (P123) | 成 | | | | | | |
| | | (P123) | | (P123) | 成 | | | | | | |
| 下顎 | シカ | (M12) | | (P23) | | F3 | 2 | | | P2 | 1 |
| | | (XP3M123) | | (P23) | | M2 | 3 | | | M2 | 2 |
| | | (P4M123) | | (P23) | | | | | | M3 | 2 |
| | | (P23) | | (P23) | | | | | | | |
| | | (P23) | | (P23) | | | | | | | |
| | | (P23) | | (P23) | | | | | | | |
| | | (P23) | | (P23) | | | | | | | |
| | | (P23) | | (P23) | | | | | | | |

* 年齢の幼、若、衛成、成は幼は3ヶ月～6ヶ月、若は7ヶ月～1.5年、衛成は1.5年～2.5年、成は2.5年以上を示す。

** 内歯子は同じ個体を示す。P.M.は前臼歯、M.は臼歯、M2は後臼歯、M3は前乳歯を示す。

*** P.M.は前臼歯、M.は臼歯、M2は後臼歯、M3は前乳歯を示す。数字は各歯の歯式を示す。

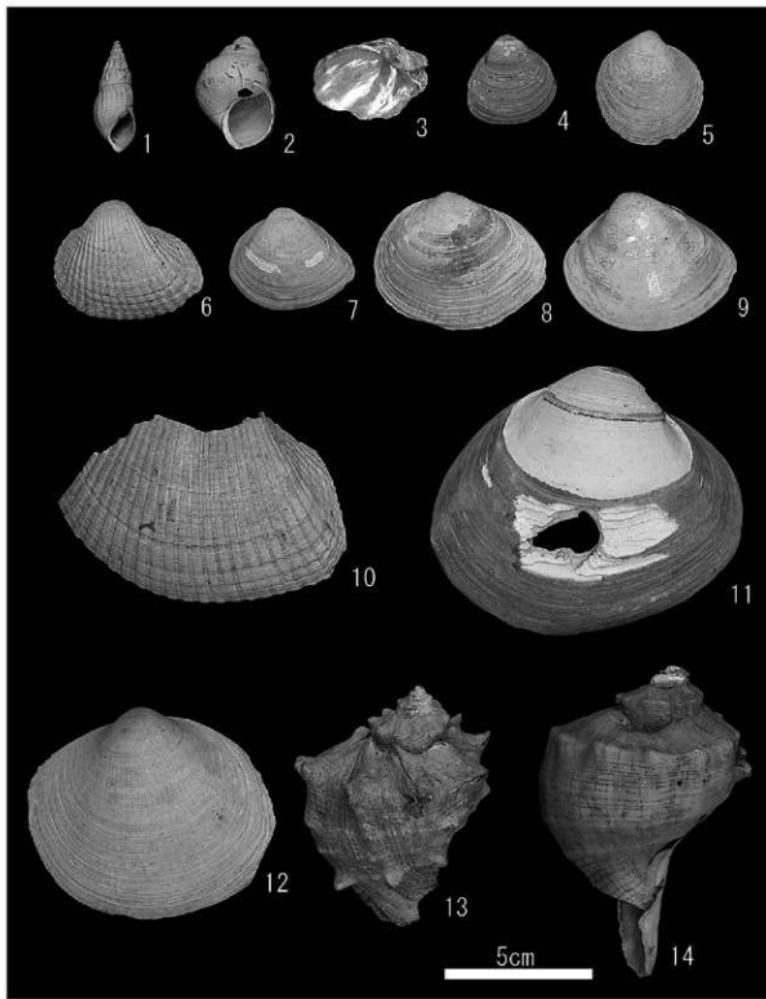


図1 貝類

1: ヒタチチリメンカワニナ 2: オオタニシ 3: イシガイ科の一種? 4: ヤマトシジミ

5: オキシジミ 6: サルボウガイ 7: シオフキガイ? 8: サビシラトリガイ 9: ハマグリ

10: アカガイ? 11: ウバガイ? 12: ベンケイガイ 13・14: アカニシ

(L:3, 6, 7, 8, 9, 12 R:4, 5, 11)

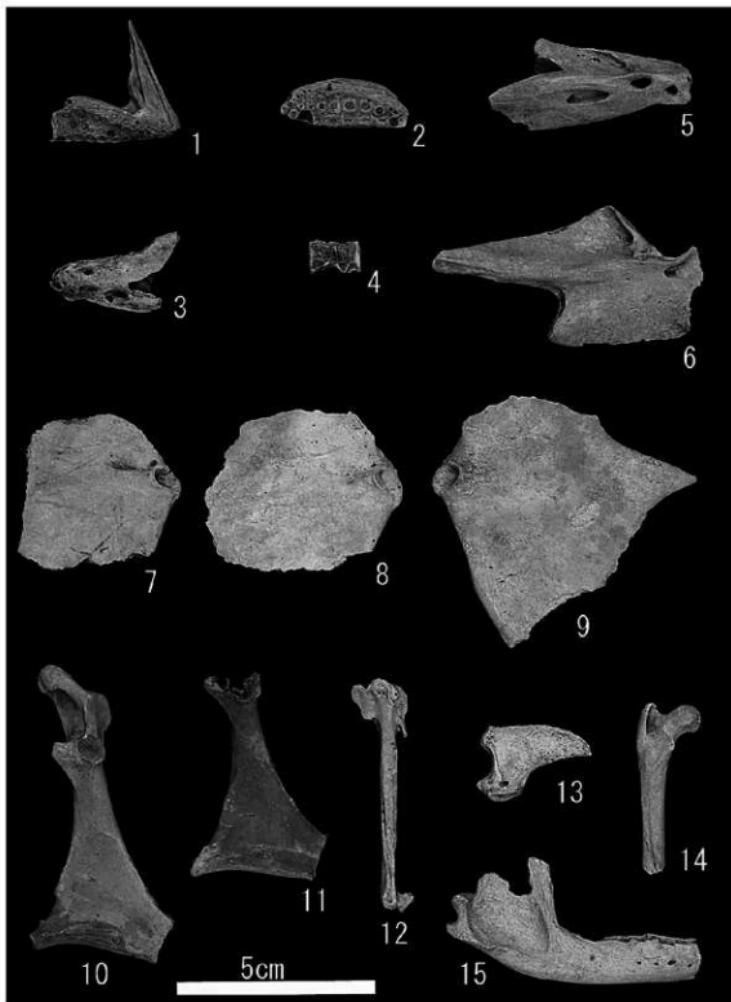


図2 魚類・鳥類・小型哺乳類

1・3: クロダイ 2: マダイ 4: ボラ 5～9: スズキ 10・11: ヒシクイ? 12: タカ類

13: ツキノワグマ 14: テン 15: アナグマ

(1: 前上顎骨, L 2: 前上顎骨, R 3: 齒骨, R 4: 椎骨, L 5: 齒骨, R 6: 開節骨, L

7・8: 主鰓蓋骨, L 9: 主鰓蓋骨, R 10・11: 烏口骨, R 12: 中手骨, L 13: 末節骨

14: 大腿骨, 近位部, L 15: 下顎骨, L)



図3 イノシシ

1: 上顎骨, L 2: 下顎骨, L 3: 下顎骨, R 4: 下顎骨, L 5: 上腕骨, 遠位部, R 6: 桡骨, L

7: 環椎 8: 軸椎 9: 尺骨, R 10: 跗骨, L 11: 肩甲骨, R 12: 股骨, 近位部, R

(4)の矢印は骨が病気により融けた痕跡を指している)



図4 シカ

1: 上顎骨, L 2: 下顎骨, L 3: 落角 4: 上腕骨, 遠位部, R 5: 楊骨, R 6: 肩甲骨, L 7: 環椎
8: 軸椎 9: 尺骨, L 10: 緊骨, L 11: 距骨, L 12: 中手骨, R 13: 大腿骨, 遠位部, R

写 真 図 版



A区トレンチ全景



A区第1号トレンチ全景



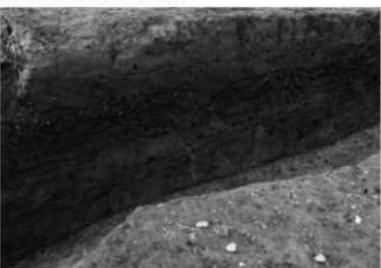
A区第2号トレンチ全景



A区第3号トレンチ全景



B区遺構確認状況



B区第1号トレンチ土層断面



B区第5号トレンチ（貝層）土層断面



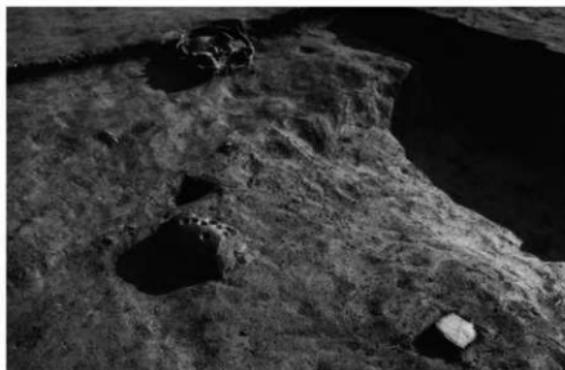
B区第6号トレンチ土層断面



第 1 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 2A・2B 号 住居跡
完 挖 状 況



第 2A 号 住居跡
遺 物 出 土 状 況



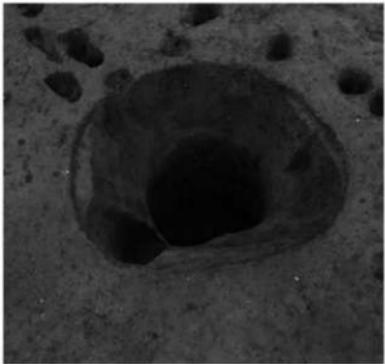
第 18 号 土 坑
完 挖 状 況



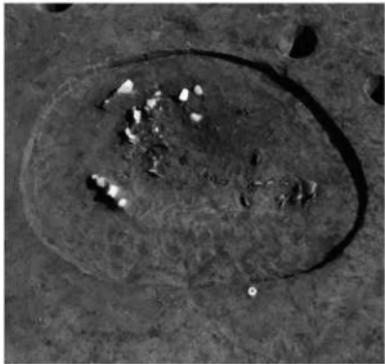
第 50 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況



第 53 号 土 坑
土 層 断 面



第54号土坑完掘状况



第54号土坑遺物出土状况



第54号土坑遺物出土状况



第54号土坑遺物出土状况



第54号土坑遺物出土状况



第54号土坑遺物出土状况



第62号土坑完掘状况



第62号土坑遺物出土状况



第68号土坑完掘状况



第68号土坑遺物出土状况

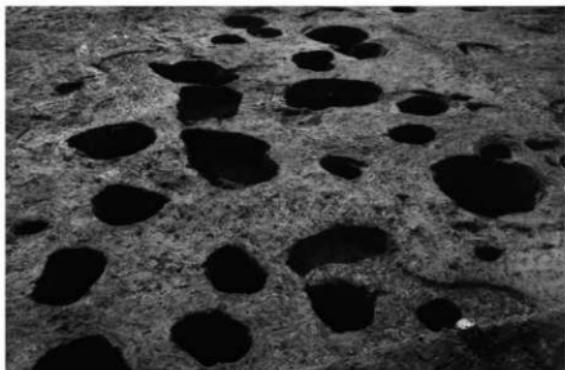


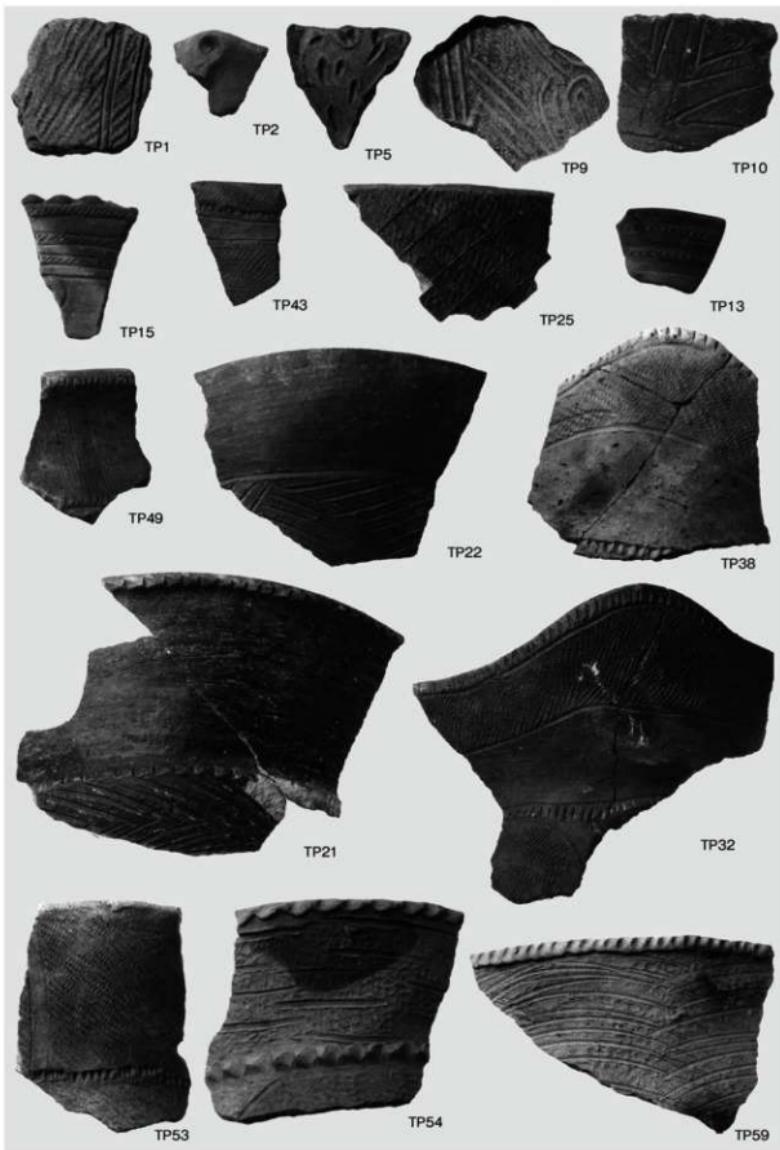
第68号土坑獸骨出土状况



第69号土坑遺物出土状况

PL 6

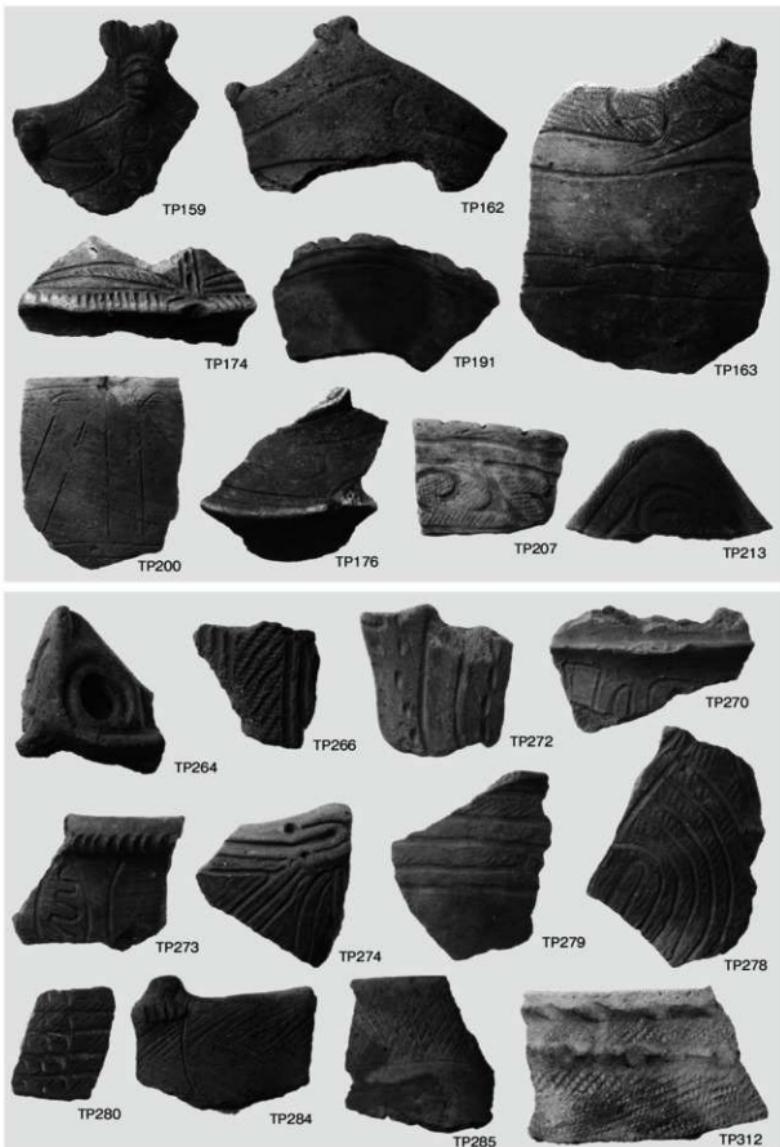




A区 トレンチ出土遺物



A区 トレンチ出土遺物

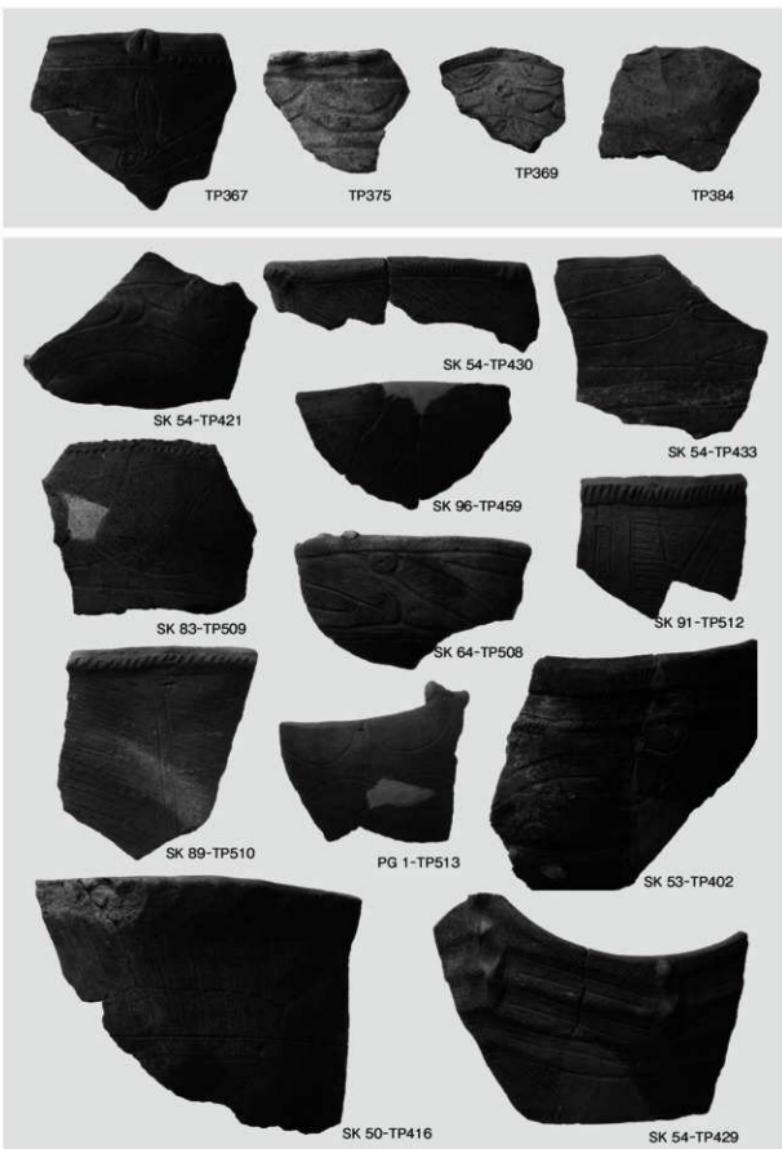


A・B区トレンチ出土遺物

PL10



B区 トレンチ出土遺物



B区トレンチ、第50・53・54・64・83・89・91・96号土坑、第1号ピット群出土遺物

PL12



SI 2B-25



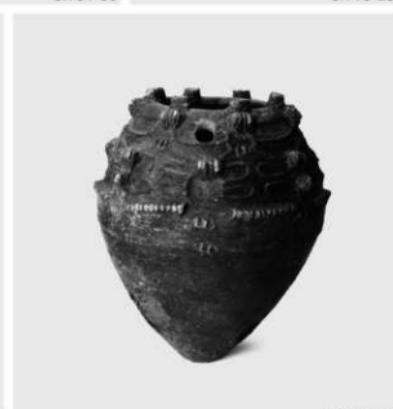
SK 54-36



SK 18-28



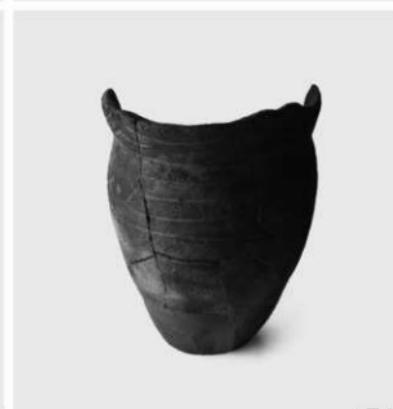
SI 2A 土器埋設ビット-52



SK 54-40



SI 2A 土器埋設ビット-53



A 区-3

A区トレンチ、第2A・2B号住居跡、第18・54号土坑出土遺物



A・B区トレンチ、第54・62・69・97号土坑。C区遺構外出土遺物



SK 69-47



B 区-18



SK 54-34



SK 54-29



SK 54-31



A 区-5



A 区-4



SK 54-37

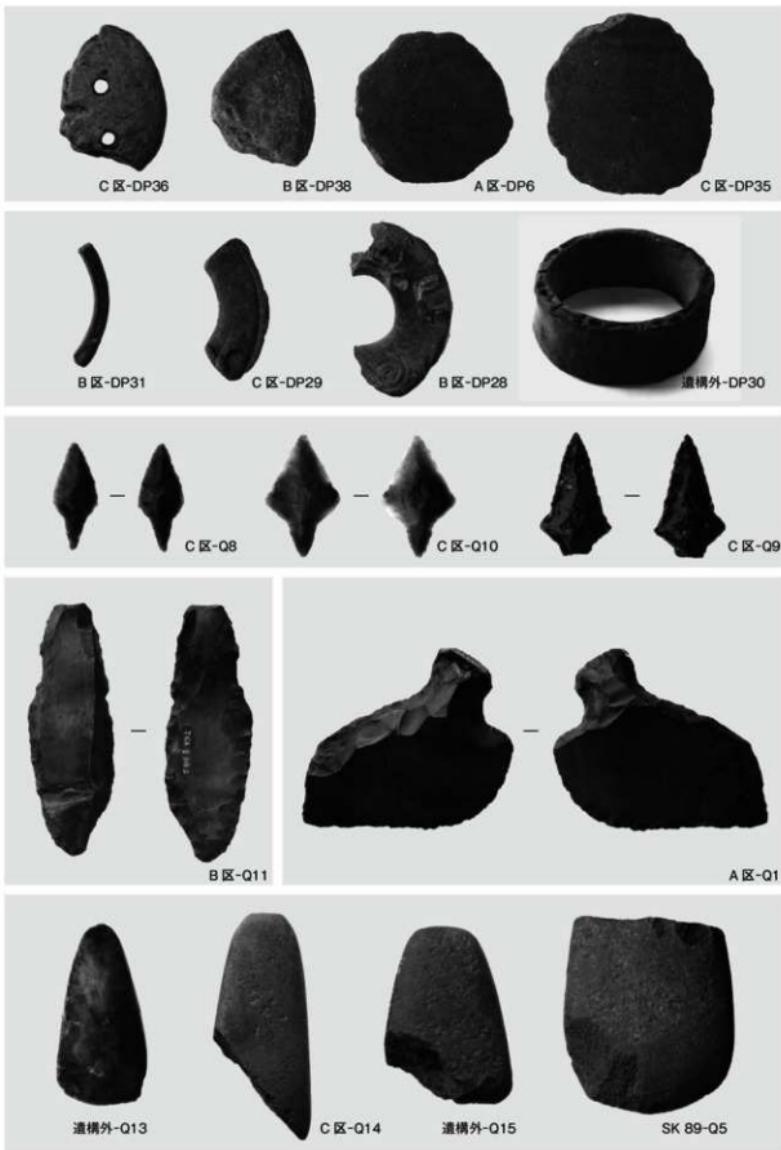


A · B 区トレンチ、第54・69号土坑出土遺物



特殊遺物

PL16



特殊遗物



抄 錄

茨城県教育財団文化財調査報告第325集

上 境 旭 台 貝 塚

中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII

平成21(2009)年3月18日 印刷
平成21(2009)年3月23日 発行

発行 財團法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第325集

上境旭台貝塚遺構全体図



付図 上境旭台貝塚遺構全体図 「茨城県教育財団文化財調査報告第325集」